Cavalier

French Liner

夏は五百二十一頁に始まる、其の時はまるで、
烏聖の闇の中をおくやうな感しかした、航海
中、烏鷺の爭ではなんとしても香西君
の兆戰するものはない、彼の言行は矛盾撞
着して、誰か魯の雌雄を（知らん）の感ある。
壞さんと三反目の憂愛聴辭では米人の烏
辭となった。すれば彼めのためには、一路干丈。烱眼
の越前守、眼部君の二年半の棲息も
過去のこととなった、栖息、二人の有髮の僧
と同棲して烹炮を瘦先時の陋巷か、
依然としてある、米人は烹熟を好む、
邦人は平煎、裹箕を継ぐ化る士と
なる者は、怨焉として天遊ぶる。遠焉
として死す、彼は絶焉の地に達した、勃焉
平然、俄然、気焰可丈、在天の靈に捧
天雷無霧、人生には無霧の稽ずり、

屋、無元（ムコク）の民とすれば、心外とか無念とか、
幸にして無恙なり、無叱の嘆を禁ずる者に、
金無垢の（銀り）の（指輪）（屋時）
無慙（ムザン）なり刑罰（ムコ）、無宿の外国人となり、
無疲息災、無古辛（ニ）の民を四討する、無
吾の民を虐げず、孫を失へ嬢に別れ、金の無常
を沁々と感じた、生滅輪廻是誰ニ無常ハ、
彼は無肰、孝肰、無祝怪する事、無聊（ムレウ）に
苦める秋山は痲（ヘウ）褥（シヨク）の女として、如何に無恥にも、
原森の溪百ハ無漏（ムロ）の生流して流れ、といふは
情洋無垢な境涯に飛元、無漏の人、幸
子としては寂しい無悦の生たを憐れて行く、
三井の心ろ在無畫壁的の、無慮（リヨ）三千人、ざつと、
無雙の勇士、蓋世の英雄、彼は完行は無
稽なので信を催しことゝ来ぬ、実に無分別の、
無一所の、無粋の、不用流の無頼漢、

無邪気で、無作法で無所長で無神婦
者で、無声詩を挿覚した、無用長松だ
無二無三と替古した、彼は云年古市古の
ヒヤラヤ山の無何有郷に抜んた、家に豊表
君は無官の大夫た、無子宇宙の旛如いも
年きいすれば、人は彼の然諾を重んずる、一
日にして飛平の南面は集土と化した、龍戰虎
手の侍敦右衛は、本や、満天下の集魅となる
なるとみる、日庭心焦共慮して、焦慮
ても拡張することが真眉の若諦いなる
遠州灘を過る頃は湘州の煙汀か、かす
かに見えた、煙雨のために遠くを見ることが出
来ぬ、平夜の二等客は法弟くに天幕の下
に稲麻竹葦して、白浪を眺めてゐる、
煙滅した、煙霞に包まれて、南津其中迅
迴した、煙塵には捉はれなかった

江戸は代から煙霞痼疾者を生ん、
小供のときから泉石に於て癖をもつた、煙霞
癖養して七年、煙波と白浪か、煙塵、
煩冤（ハンエン）したゐた、花を耳しし煩逆（ハンギヤク）する、彼の
清談か煩累を解き、始めて愁眉を伸
はすことか出来た、煩労するのだ、煩悩、
昨年から花君か煩厭してゐる宴子、郭
羊屋は煩劇な言葉だ、つんな事に煩
慮するのか、日会の煩務に出られて、万
の裏面は煩瑣（ハンサ）の仕事だ、煩笛はさ揺き、
屋紫は無言屋だ、煉乳（ニンニウ）といはユニデンス
こんろ、牛酪（ゴラク）とばたのこと、煤炭か拝れる、
煉焼（ねりべい）は雇事地方に折々見る、神明
煙発、熅（ウン）は暖まり少日暑い方熅（ウン）火爆火
産銀を熄（とふか）す、各日か赤く煙（しか）つてゐる、野菜
を煤る、玉子を煤る、煖（ヌメ）かな春の日、

炫（ヒカ）かがやく、てらす。炤はてる、あきらか。
焜（ユン）かがやく、ひかる。煥（クワン）ひかり、はきらか、
煌（クワン）かがやく、ひかり、煌（クワン）はきらくとかがやく、
照（ニ）る、照（かがや）く、熙（ひか）る、燿（かがや）く、燁（かがや）く、燁（かがや）く、
燦（かがや）く、燦（かがや）く、燦（とかしび）、ひかる、
燈、燭、灯、燖、ともしび、五二四、
彼は煢（ケイ）煢（ケイ）として古所を悲む、艸（チユウ）艸（チユウ）と
と悲む、煢獨、塋（はか）エイ、
書店家の塋城に詰て燒香し照尺を
立て一百米と射撃を始めた、照準は大砲
にはそゐる照尺、伍京にて肝臓（カンタン）相照（サウセウ）るの
友は大田だけ、照明（シイ）は米国舞基に、於便
照倉ヶ丸から、速に照覆した、序照臨
を蔽光し、神の照覧、体の照鑑にし、
夕照は晩照し、残照、落照などに回し、

煮沸は、ぐつぐつ、たぎらす、炮煮、雑煮、
彼は煦煦をなして仁となす、少し恵み
をなすこと、私恩を賣る、私恩を受けた、
煦煦は、べつぶい笑ふ、大が熄えたやうに
寒しい、平家が熄滅した、武王山は
熄火山だ、米国は世界のあらゆる人種の焼
罐爐だ、熊羆の士、熊虎の将は
勇猛な方将、重囚は、董囚又は清
明囚、化ふに熱中した、熱血を注ぐ、
彼女の熱烈なる愛、伊人は熱忱に寝
んでゐるのは地震国であるから、レキシングトン
街所沸の宅は後夜、電車、なの熱鄙の
ため必ずされた、事の眞後を相すなして
熱誓するのは非だ、痛罵嘲罵、倒
罵、就手はすべて庫にふれた、就考、就思
白霊の熱客は制染の窟、花窟の子、

熟柿主義の人で何事も一旦を炮烙
で熬るときはちけるやうな音がパチ
と耳えた。彼は地の最高の底で
温習されてから、書の天下で淬礪
四九いするもよい、淬小は刃燒すること
其燒跡は実に哀れなものであった燒
生たが昔日の百分の一もなか規模、彼
は失望落曠の暗を照らす唯一の
燃犀であった、弱んで大ん石燈柳
の如く、燈影かすかに見へた、燈穂が
緑樹の間に瞬いて居る。燈火可執き
永き夜、燐礦を以て耐火材を作る、淬
えちの事堂が燃える時は、其火焔の熾
列なるは、実に凄いものであった、凄いほど
の美人、過激思想の廣まること

事の早さは、燎野の火の如くだ。夏土
のすそ野に燎火をたいて、燕宝に
漢書を備かれて温習したれば、燕京燁
に陥落せんとす、頃日来燕居して、燕
荘何ぞ大勝の志を知らん、勝程萬里、
燕子花は菖蒲に似たり（ガキツバタ）
逃がに蛍の飛ぶのが見える、気はれたことか
微かに覚えたるゝ、無味乾燥の方形建
物、枯燥した、焦燥した、書は燈を掲
け座は燥を去れた、雨方としのろしづ
ロードウイーの電気は燦然たるものだ、焼
屋は雲かと疑ひたるほど爛漫と咲き、
山野に百花爛漫たり　天真爛漫
の麓の表　燦爛たること陽の如し、
燦爛たる動章、明燦、月燦、
なんとかして私を欺れ

憂国慨世家ぶる私、若君、彼は他人
はどうでも菅科。牙蓋、戦塵の巷、
黒煙、矩々たる兵燹、戦争のために起
る火事、爛熟の世、爛醉したるもの
人もなし、爛々たる動章、灼爛たる、
爨おさん、今日の今まで私、若は僕の
仇牙と信じて居た、多年の仇牙を逆
ぐ、争友であった。菊地は言ヨークにて
写真師をして居る時、勝伯に爬羅剔扶
されたのだ、争子、どんな事でもどしく
忠先してくれる争友であり、争臣であった、
秋山の為人は温厚管実、性質は短
慮、長右衛門は高倶樹の父老であつ
た。庇侍も幸桂を忘れることはない、
爺爺、ちちゑ大人、長上に対する尊称

十三

満艦飾の妝ひで鶴は停まらぬ来た、
墨林の梁山泊、同林禄に、裏の垣牆
に杉苗を柱ゑんとと、落葉片々とし天
下の秋を知らす、弦日みは片月寒し、
片栗は山惡姑、片時も忘れぬ、東の
夏も忘れぬ、彼の筆法ではは片言雙
法も殺頁に直って誰のかと和述せられる、一言
まの、清野壌の片影、嶽の秋山の眸に
眺した時、方便冥鴻片影寒し、版
籍奉還は所作初年でもあるん、今牌、
牌は漏武鈴、牌状は罪事、
牕と牕と牖と窓、牋は文書、牘は
手代、尺牘文、牙人、牙銭、彼は不正品
を知らなかり、其要置の持ちかたから牙保
昵として不幸せられた、雅俗の傳は長い、

土三五

彼は其をつべき時に其ばずして其手古刑
筭(ヲウ)を執れるは、彼の望ではなかった性、
祖父の儀の席に逆ふとはならない、自分は箕(キ)
裘(キウ)をつぞ、心にも全おす人となかほくと
も、他に秋山家の煙を太しする第かする
と侵ひてゐたかれた、杜なら之を雅(カ)隣(サン)に
供したい、詩書の侍雅遊に耽けて
居ら先君伊夫人、彼の雅致なる几貌は
男爵と不諱名を得た、牛(ガ)雅(ソウ)節々
の雅量に敬服した。秋山は雅(ソウ)姿(セツ)折(ヨウ)表
の魅は遠に建寺の性格を発揮して
ゐた。白江侵を君が中高会にて牛耳(ギウシ)を執
られたから、高事が確相的になりて来た、菊
地は牛後たることは断して好きなかった、
岡部の志致先相事り牛飲馬食

牝牡（ヒンさう）はめしとおし、素君の言ふことは何んじ
し貫徹する、牝雞（ヒンケイのシン）の晨といふ家庭であれ。
世に思ふれるほはおそて自分の才能を偏かせ、子
様でふれは、サラバン洲畔に隠遁する、其迫
返出屢の言宜なること、用舎（ヨウシヤ）行道（カウサウ）の
家永豊光だ、山形の御音（キヨウオン）すり。
彼は御身の依人にほめらんとする御愿（キヨウバン）ひは
ない、御辰、御実（クロン）、御望（リヨウバウ）あることは、あの
ときの歎座（ヨウ）で知れる。異人は刺身（ゴレ）を
美を喰ふ、未人は生の社蟾（ゴレ）や蚌蛻（バウガウ）を
喰ふはないか。日本人は産漬に漬れ、
未人は、プレッドル牛乳、彼は他人を我衛中
に入れて自由にする。牢寵（ラウロウ）するカのある
漢字の乾坤を牢沈（ラウヂン）するみれは。建設
は牢固（ラウコ）で敷地は曠く悠長になまへ。

二三六

堅牢な建築だ。真ほ彼は帰宝に用
七十ヶ年を守恐しみるらしい。米国の努力
は凄いなりやまだ、南洋に於ける勝海
舟に於ける、傍神者を於色した。（ゴツシヨウ）
四季折折の景色の様なだ、甚だ情を
打みな文章を以て描写してゐる。米国の於
産と日本の於産との交換よ。猿鳴なの
於鼠を眼かれ。於蝕な世中、人気評判即ち、
於諦沸騰してゐるらしい。今はなを何れ候
すると墨の於漢を醸すを免れない。日会
では会長の倶神者を於色してゐる相な、
ハハハ
うたかた（泡沫）のやうに消えてゆくのだ。彼
は於質素人で精神界の人でない。日本の
手眼は、女まりに於質的である。機械的である。
スコットランドの牧母は、牧産時代、牧童

ヲイコ
抵抗の魅ヲ見しし掃調ハ若しむ、それは
士法に抵觸する事。枯時抗はめつこし棲うし、
彼の特色は。私謁の構図である短慮は
日本人様だ、私は七つきらスの様子を、
そんな様例はない特第、ち書して。あれ
は様発した病、彼女の時様は瞻迂すんさ
いかだ、牽牛尾、女子顔、理屈は義にも
悪にもつくしのだが彼の言ふことは全く非理屈
で牽強附會とつまものだ、お供は牽制
するのは考へるものだ、豈、未旦に熱が
鳴く時來にはビンかなく。黎明の空気、
黎明近くに鳥が鳴く。鶴見君の犀利（意）
で攻撃せられたまったものでない腰事裡、
緊裡一番、犀を鳩ふ、勞を鳩ふ。
凱旋の軍人を鳩労せんかたの寓近会を催
した、

彼の文章は美しい文字を注べて人情をひく
やうに書いた狂言綺語の小冊である、平
和の者はすると思へば。狂瀾怒濤の方海もする。
大馬の齒は五十年、大田と小野は同窓
書ひ書ひなかゝ猿疑反目すること大猿の
如し、国居国教と云ふ兄弟は傍聽人の狂
躁は凄い夜様、羽田の和尚は狐憑とな
つて死んだ、米人にも狐臭がある、脇臭、胡
臭、わきわい、日本内地には下駄を盗ちやう
な狗盗が小盗人、角盗がうまくする、
臣は常に狗馬之心なり、狎褻な
行ひ、猥褻なる。狎愛の妾。スライ
ンキスなどと言はずに狛の如しと狡兎
死んで走狗者下の(声。)新年賣の
狡童、二三の大か猿々と嘗たつて。

狹斜(ケイシャ)は迫れり、香焚の
室の狹斜(ケイシャ)なる、行人(コウジン)稀
梅の花、長安(チョウアン)の狹斜(ケイシャ)
車(クルマ)を下(オ)り、去(サ)るの
客(キャク)見(ミ)のせん、
客三(カクサン)更(コウ)の狐魅(コミ)
みんな狡(カ)猾(ツ)なり、
急(キュウ)で行(ゆ)く激(ゲキ)しい
彼(カレ)甲(コウ)斐(カイ)なき
狸爺(たぬきおやじ)
我(わが)慾(よく)
狡猾(こうかつ)な人、
たる坂田(さかた)
猛使(もうし)た、

[illegible]
[illegible]
[illegible]

猫(みこむ)の箱(はこ)、大(おお)きく寿(ことぶき)の字(じ)に彫(ほ)り、表(おもて)に猫眼(びょうがん)のごとく、欄(らん)に侍(さむらい)の眺(なが)めたる猫(ねこ)、いまは猫眼のごとく、欄に侍の眺めたる猫、流行(りゅうこう)盛(さか)りの頃(ころ)なれば、猫(ねこ)の事(こと)ならば、何(なに)にても買(か)い集(あつ)めんとて、やさしく裏(うら)を猫(ねこ)撫(な)で声(ごえ)にて猫撫で声にて猫猫猫

二千五百年外侮を受けたことのない、老頭無敵
の我日本が、君国の差別待遇を受くの
は、隠遁し難いものだ。儂なのは七やノル向ひ
春日の一曲をしとやかに青でした。居たて
大士尼夫婦は故郷を悲み、すすり泣き
に泣えた。獨立心、自尊心、我利く
意事心猿の高人、獨講論、
獣時中に日本が辱捕(ダ)みは辱獲(ダ)したる露
国の舵、狡猾(コウクワツ)な奴等、誘猾(ハツクワツ)な奴、猿猾
獰猛(ドウモウ)なる魁首(クワイシユ)簡大師の死刑、玄天(ゲンテン)、
二三十猿猴(コウ)は枝から枝へ飛び躍ねる
松山の頭を越して、市して夜尿するのだから
度気味わるし。遠り文が玄姉(ゲンシン)、讓
佐の子が妻尼怒吉の玄姉(ゲンシン)に落ちる。
彼女の几束は玄裳(ゲンシヤウ)縫(コウ)衣の如く上意で
鬣狗(ハイ)、

ソッジ
辞職なす。宰相(ソッチョウ)には。辞表(ソッヒョウ)を出(だ)し
清(きよ)き者(もの)の意(い)に任(まか)せ、全(まった)く為(な)すこと
切(すべ)て採(と)らず、悪(わる)き者(もの)に左右(さゆう)せられ
国家(こっか)の害(がい)を招(まね)き、天下(てんか)を乱(みだ)すに
も亦(また)尾羽(おは)打(う)ち枯(か)らすの類(たぐい)なり。
と云(い)う林(はやし)尾州(びしゅう)が評(ひょう)、何(なん)の拘(こだわ)りも
無(な)き様(よう)なれども、実(じつ)に深(ふか)き意(い)味(み)
ある事(こと)なり。

尾州(びしゅう)の様(よう)な主人(しゅじん)に仕(つか)うる家来(けらい)は
随分(ずいぶん)骨(ほね)が折(お)れる。主人(しゅじん)の為(ため)を思(おも)うて
諫(いさ)めれば、主人(しゅじん)は却(かえ)って悪(わる)く取(と)り
悪(あ)しき者(もの)を近(ちか)づけ、悪(わる)き者(もの)は主人(しゅじん)の
気(き)に入(い)る様(よう)に計(はか)らうから、主人(しゅじん)は
ますます悪(わる)くなる。家来(けらい)は主人(しゅじん)の
悪(わる)きを諫(いさ)めて悪(わる)い者(もの)を遠(とお)ざけ、
ますます主人(しゅじん)の気(き)に入(い)らぬ様(よう)に
なる。主人(しゅじん)は悪(わる)い者(もの)を近(ちか)づけ
ますます悪(わる)くなる。主人(しゅじん)と家来(けらい)と
は全(まった)く反対(はんたい)の位置(いち)に居(お)る。主人(しゅじん)
悪(わる)ければ家来(けらい)は善(よ)くなる。主人(しゅじん)
善(よ)ければ家来(けらい)は悪(わる)くなる。

扨(さて)、昔(むかし)倶梨迦羅国(くりからこく)の倶梨迦羅王(くりからおう)
は、悪心(あくしん)を以(もっ)て国(くに)を治(おさ)めたる故(ゆえ)
に、国中(こくちゅう)の人民(じんみん)皆(みな)悪心(あくしん)を懐(いだ)き
互(たがい)に争(あらそ)い闘(たたか)うて、国(くに)は乱(みだ)れ
治(おさ)まらず、王(おう)は国(くに)を失(うしな)うて
流浪(るろう)の身(み)となり、又(また)
倶梨迦羅王(くりからおう)は善心(ぜんしん)を以(もっ)て国(くに)を治(おさ)めたる
故(ゆえ)に、国中(こくちゅう)の人民(じんみん)皆(みな)善心(ぜんしん)を懐(いだ)き
互(たがい)に和(わ)し睦(むつ)みて国(くに)は治(おさ)まり
王(おう)は国(くに)を保(たも)ちて居(お)る。王(おう)悪(わる)ければ
臣(しん)悪(わる)く、臣(しん)悪(わる)ければ民(たみ)悪(わる)く、
民(たみ)悪(わる)ければ国(くに)乱(みだ)れ、王(おう)善(よ)ければ
臣(しん)善(よ)く、臣(しん)善(よ)ければ民(たみ)善(よ)く、
民(たみ)善(よ)ければ国(くに)治(おさ)まる。
と云(い)う倶梨迦羅王(くりからおう)の話(はなし)、
之(これ)は国(くに)の盛衰(せいすい)と国王(こくおう)の善悪(ぜんあく)
との関係(かんけい)を説(と)いたる話(はなし)なり。

筑紫(つくし)の洗役(せんやく)する時(とき)は、妻(つま)を悪(わる)く
と海(うみ)に溺死(できし)する者(もの)多(おお)く、妻(つま)を善(よ)く
する者(もの)は、大(おお)きな災(わざわい)と雖(いえど)も
無事(ぶじ)に済(す)むと云(い)う。大丈夫(だいじょうぶ)
可愛(かわい)い妻(つま)に不親切(ふしんせつ)。
何(なん)と尾羽(おは)打(う)ち枯(か)らす他(た)の
や、王(おう)仕(つか)され

病また癒えず瓦屋を取づ。赤穂の藥
は亜射三斤の模範を後世に示した、
高は玩索するにあるべきは皆、玩味した。
土味、珍の作世を云ひ珍差、珍膳
珍饌の作世を、月玲瓏として玩はる、
近来稀に早く椿事、珍事なり、甚
た珍、妙に思はれる。翡翠珠の信ずけ
珠瓊、珠玉の代りに、未国で今日地所を
無代に移民に與へるのは丁度我国に孝
徳天皇の時代に班田と称して一般の公民
與へられたのと同じこと、翡翠珠の珥
彼は理性の人、炊事場の裏手に残飯鍋
を置くある。夜中に髭鼠狗が来て鍋の蓋
を明けんとする声がする。理想、理性を論
する。理財家に、天理教は一種の理障
家教である、

奇思妙想を凝らされた。

琥想と寝隆。寝隆は説、琥孤刑明せざれば止まぬ是、彼は琥智に富んで、事茲に到りては琥勢に仕すなし、彼の遺方は琥不盡であるから又感を醸す慮あり、琥鑑する日は前屋杳暁たり。

琥枝の妙禅、水仙は琥莖柱なる偈す。琥燈を釣りて水屋をやっぱんたる。唯今には琥存してみない、琥身はとうなそと厭はない、構はない。座手で訪へは鬱蹙する庵をやせは老んをするとしか琥庵は男、皇家の勝利は琥人神の。琥氏思想として重なるものは人間の手等無差別宣義である。昭和の琥世あ穏の時代に斯る陋凡の殊存は許されない、琥行犯である。不否定か五来ぬ、彼の異等人せられた。

彼の聲句は誇張の急所を突、頂門の
一箴の如く沈痛に感じられる。彼の論
説は如何に現はれた旭の如く燦爛
たる光明を生活難に悩む民衆に與へた。
彼の晩年は如何に將に隠れんとする
殘照の如く、益々大く、益々明かせずして、朝
野の人たちが惜まれた彼の温習は如何
如鹿であった、如硯珠鹿、其上未聞にて
淬礪せられたのだ、嘉平先は琳行人といはれた、
朝子の奏するヒヤノの声は琴琴と響いた、
一家團欒の果、琴瑟之樂は一家和
合の業。瑞兆である、吉兆である。彼は帝大
教授の中でも瑚璉器と呼ばれた人だ
かゝゝゝたけは瑕疵である。子は瑕瑾である。
瑾瑜を鏤めしたやうに。瑜が宗、

五五二

とは市女の世話の雨花宇訓、瑜伽は相應
の義、主観兵観左ニ、ネコであると上杉本天
のいふ唯心説、彼はトルドで瑜伽三密の秘
密を修めた、秋風瑟々として舞びし、
机の葉、菊の花、秋瑟瑟、誰に耳りて
瑣瑣と述べられた、しだくしと述べられた、
肌は瑤基の月を詐く、山人の住むうてな、
瑤玉を鏤めた。彼女の瑤顔。瑰しい玉、
璞玉陣屋の陣れ君と思ってみたら、何の歴し
蕎で驚かされた、指環、頸環、彼の環境、
環坐しい牛なべ、山形の準ま姑で字人に
環閉されて難返攻、環境されて逃げると
とけはぬ、紅葉の鼓の瓊筵に招かれた。
瓊英綴雪に梅の花瓊姿に五五て、
玲瓏する月、首の瓔珞、ヤララウ

彼は遥暦の年に達し凡期となるのを待
たぬ、日高君は凡期となりて斥年職を
辞せ、帰省したは姉妹の凡帰
解たるに驚き。多こゝ、ハリス、と凡葛
の説たること知らなかった。孤、荒獨の身、
鶴見の人格を親看してゐる、尾屋を耻づ
内閣尾解。葛の社長に居たら得意
此とて尾金雷鳴してゐるかに、おかしい。
為すべきすべきす尾屋として居る。
喜おの者を屋の二堪っては甄工無慮三千人、
服部君は妍粧せる二人の尾髪婦
人を前に望て香閨彩陣の接
せるるげな。一定に醒剖したか、或
は、元が家君に対する生別のやうに
思はれて淋しい感に難はれた。
如何に天空海闊の春年秋も、

[illegal] 三年を在する
[illegal] 屋の主人に採[illegal]
[illegal] 家の中には
[illegal] 事を記さん。低い[illegal]
[illegal] 彼は毎朝[illegal]
[illegal] を食べれば食わるほど。
[illegal] 彼は今とする。
[illegal] さまじい甘藷とて
砂糖を取り。どす事を
蕃屋が見える。[illegal]事
渓間が流れ[illegal]
花の香ぉ[illegal]
る。甚[illegal]

甚[illegal]

[illegal]屋の春は
[illegal]
[illegal]
[illegal]

甜菜は昇、人から苦しい、日本の大根です。
幾ら鉄面ひし十年の昔は聲視た出
人まで奉の秋迄は来ぬ、霊国の生
ら口三万人、飛火の生存を祈つてゐる。彼の生命
を見ると庶人とは思はれ、死別は諦めかつ
き異しかな生別はつらい。態の生捕。生計
も家道も裏へたのは誰のためか。今は瓦屋の恥
辱を思ふが、自刃するか、彼は執事して
生面を送る、生害とか自殺とか封建時代
の流りものだ。若書を在てたのか彼のためには
生路の発見ひとりたゝ洗脱。自刃は生洗意
思に反抗する行為だ。お便の低落は生
産起越か重なる内を持つてゐる。老境進
むと眼が聞む、鍛冶の産土神は
夫神さまよ。秋葉の軽生。蝶駄、三人

鍋（オイ）ネヒラの事、此問題の解決は用兵（ヨウヘイ）の外
なし。用意周到の上中居て、用兵
弁兵の最も豊老、甲道（ミウドウ）を進むこと
約一丁目にして左に冠木門なる。富程利子
作は一男に過ぎぬ、田矢（たつくり）ともいふ、今となりては此所
横槻して蓋なき田作（たつくり）の上道軋だ、奥山
美云と言ふ、鼎（デンシ）なるだ。背坂は田蝶（たにし）の味噌
汁かつ鮮味ルうまかった、秋山は一男薬に過
ぎぬのだ、田園都市の計企、彼は申（イらく）と
観税してゐる、猶猶として得意然たるべき、
彼は其由緒（ユイシヨ）を誇々と述べた、申（ユイ）緒もゆか
りもない人、今日の甲（ユウオウ）では、義正道から
いふだ甲（ユウオウ）での回題ではない、甲座（カウヤ）に入は
温智を始む、是今社の鉄骨は甲冑（カウチウ）の
武士、鄭航のは洋服の兵士、甲種無斧

は小供に集まれた、役所に申先する、申達する、事件を上に申報する、食の役所に申請した、家人を町人と呼び、素町人、町家、老が男装して、男子が女装した行列、男尊女卑ではない男子蔑死なのだ、其所が米国の女子蔑死とは異なる、男根先生は秋の長女、長日に珍しい寒さ。最老の布に長眼するが、母の布には眼従せない。甚だ恐怖した、長偏した、恐懼洗、限界、界域が劃然としてゐる、境域も同、其界隈には人影もなかった、巻を擔くもの大蛸を突く人夫が木遺歌をうたふ声がする、茫たるかな其野を知らに、拝逆するもの、投逆に同じ、懷を懷くもの。皆狩りには妹裏の拝道に住し、

土六二

服部君の留住は怪しい。妻が君に横慶
で留別したのは十年の昔日と違った。留帯
僅六日であったが。晩言すれば晩出すれ
ば。日本人をデヤプと呼ぶのは晩様であるが
軽蔑されたいろに直える軽侮の言語だ。馬
賊の目的は晩奪と掠奪。共家の無が僕の
[illegible]三晩だ、茶種畑の晩を求して降を掠
ない。[illegible]は軍生すべきもの、秋山の軍生事
業だ。軍事すべきは服宅しなかん
と家君家命だ、麦畑の晩に隠れた迷
んだ時代の女達は。西洋人と見た国別な
て皆異人と呼ぶ、支那人は赤毛鬼と呼
ぶ如くに。何れは異日のこと。何れは異心を
懷そみた。諸夫人が異なかなければ
異邦の人。異俗を習ふ。異腹の子、

明鏡一着愁異常。善道と異ったこと
異仰には異説珍説を。彼は異端者
とも異人会かに棟外さに、下町連中から
は嫌厭せられた。異口同音に賛成と
いった。高岩君は異域の鬼となられた。
菩薩を混了して異国伸調を発揮せんと
勢められた。労働者と資本主の協調
畫一することは至難だ。書面に称する邦人
畫ユ、麗事畫仰。が善畫師は先
年故した。彼は発明され採機は畫
謝し同様に何の役にも立たぬ。著書
は殆んど寄布したが畫龍點睛の
用色ずめば上梓する相な。城浦の
畷が黄猩りの古浙、晴形も同様だ。
廁疾なる命は時令も同様となった。
不見のこと

其書作は書局者にある。詛か、鬻翼を
とれか、鬻職を活宣するかよい。彼は
口と八斤、手と八斤、世才に富んだ、鬻意
即好の人だよ。夢畑の曙を走つては農夫
に悔喝さ。学校の屋上にて鶯をすけて
は小使が恐喝せられた時代もある。曙。晦。
田のうねは畦と書く。箕とは百錬千鹿
して將来の老士となられよ、敬の壘を襲
撃た。様々の困難が疊つて。満韓
の疆域。波瀾疊重。彼は勿彼をで
あり同業の曙華である。曙は老加来汀
の時。曙昔之夜鶏鳴、古邑戦者、曙宦
である丈に夫子の二とは委しい。恵的具慮
の春更が。屬理が疎衣だが。彼は疎忽
極まる。云の古が疎隔するのも告発の因

過慮の決果疎懶（ものうこと）して来た。其、
疎密（りこう）によって刑事（すれ）を要する。秋山の欽陥は
力を捨てて大を捕へんとする疏率（ソリツ）の遺方で
あるは、
春は錙銖（シジユ）の利を争ふ。高人には動しで許
されない。無学の疏徹（ソカウ）で疎野で焼まれしかん奴だが
馬奥に於ける彼の技術には好服する。意
志の疎通（ソカウ）から。松井の如き疏朴な奴でも。
疏濶（ソカウ）の白江夫人、疏雨（ソウ）がパラ〳〵と。彼の
行為に疑惑（ギワク）の點がある。平素の疏濶（ソカウ）を詫ふ、
疏髯（ソカウ）を得意としてゐる。疑問（ギモン）の人なり。
疑獄事件。日本人と清人は疑似（ギジ）甚し
いのも見解に先ずことがある。コーネル大学。
そんなことではないかと初から疑懼（ギ）してゐた。
船中では疝痛（センツウ）のため甚んだ、疝褥（ヒヤウジユク）の
女としては耽禱だけ。疝薄（ヒヤウジユク）の産れ

錙銖の利を争ふ高人

娘は女なれど慰労(いたわ)りて
痛苦(いたみ)小(すこし)痛(いたみ)の
歎(なげき)痛(いたみ)愁(うれい)たり。
すること耒(なし)。何に
しも、一年(ひとせ)前に
ぶれたり。世に
ば(ば)り痛(いたみ)痛(いたみ)
事(こと)する痛(いたみ)

のお気の毒のことには
痘瘡の娘

二年(ふたとせ)前(まえ)
顔(かお)に赤(あか)痘(ほうそう)
胸(むね)に痘(ほうそう)
肘(ひじ)は疼(うず)

痛(いたみ)
痛(いたみ)
痛(いたみ)

痼疾を生ぬ。痒（けし）甚しかった。足の麻痺する。手が痺れる。痲痺は小供の時。Williamは瘖（アン）痺（アン）と云ふほどの唖じも

なほ成長するに随て癒（なほ）るかも知れ、

老し痺（なほ）ぬものとすれば瘡（なほ）す方法を研究せねばならない。瘡（なほ）るもなれば痲（なほ）しやうたい。此辺は瘡（なほ）屑不生

の他のきび戸を頭をぶつけて瘤（こぶ）が出来た。今は幸事の疾にある瘡痕（せうこん）はなんだろうか。瘡（せう）痍（イ）の由緒を知つてゐるか、日

露戦争からうけた日本の瘡痍（せうこん）は吉

癒（なほ）せないのだ。今は瘢痕（はんこん）は喧嘩

から来るのだ。鮮蓋老刺に於て熱

等の瘡瘡のために異域の鬼とは

老婦人は二年人とある。其堀瘡

に野宮を以て性老を記してあるが

老一

白癜、紫癜

過年は天章、嘗の弟の人。癩癧（ルヰ）
とて、病の不同の時年（百）に流りしなる
其者は頸部の梵腺を扉挑根などが
腫れて一二りとなり膿みしつれるものだ。
手術のため死ぬものも形多くい。癩は
婦人の病。癘（ライ）癘（ラウ）は天刑病ともいふ
癩（ヒヤウ）病のことだ。癩は右の頸の腫れ
病で扉みの刈しい。鞋地（ヤ）癩（ヤ）裂
今日で七年まで。永いのは仕方がないが真
癩人とはなりたくない。病（カンシヤウ）癩持ち
だから危険だ。癌（ウラ）瞳（ウラ）とはカヤンサー
の事だ。肺癆は肺病、癆症
は読核性の肺病、癆（ヤ）癆は永し
落ちた人病、鈴木の父は頸に白癜（シロナメツ）
かなった。癆（ウラ）を起すかも地所に死を

田蟲のことを頑癬といふ。癬センは巳せん
云ひ行の方倉屋の子供が癩（テンカン）の癇ならびあつ
た。癩（カクラン）は暑気に起る疾。昔は癩（ハンセン）
さしこみだ今日では胃癌（ケイレン）擘（ハツカン）といふ。
下刷に世にのみあることを発刊（ハツカン）といふ。又
書捨を下刷に書り出すことを発兌（ハツタ）
とふ。発句（ホツク）は連歌の上句五七五、発作
は疾手が急に起ることを性今の事の供の
発言（ハツゲン）することは歌舞（ビ）を見たのは出来ない
微美（ビ）のため分席、生美発動を
執事（ハツラン）した。発偏（ハツラン）仕かけだ。先まへ仕
可け。方隠に連馳の発現を見たの出現。
所は其発誇とするものは。周威を発揚（ハツヤウ）
たのは日露獣手伝だ。彼の辞長を
発揚（ハツヤウ）する、其事が発覚（ハツカク）すれば赤い着

事業の発売（ハツメウ）するまでは。発酵（ハツカウ）しつゝある
大に発憤（ハツプン）して勉強した。其事を遺れば
発憤せぬのは男子でほしい。発祈（ホツガン）する、
最上先秋か龍山権政に発祈（ホツガン）した、雎井
の発演にすると方倉喜人言りのいふのには
試験のたゞ登庸（トウヨウ）するとしたらだ。発憤（ハツフン）忘食（ハツシヨク）
文倉登用（トウヨウ）試験。図工部（ヨウ）現地監督の主
任に登庸（トウヨウ）した。萬何（コンジン）立壁（サツヘキ）の事情、
曠古（コウコ）の大事（ヨウ）を京の復興のせきゝ）秋山は
登龍（トウリヨウモン）門に達せんとしたは倒れた。登（トウ）
第（タイ）すれば登用（トウヨウ）されるが所であるた。白丁（ハクテイ）
であるが私（シヨウ）謁を求めるとは。白刃（ハクジン）を
かざす盗。白衣の家に博士、白浪（ハクラン）は
海賊の事者、白家（ハクオク）は貧家、白雨（ハクウ）
の事跳り出した船にする、多主、多高、

異人は未人と白戰ではあるが武器
を以ての戰爭は少しも恐れる要なし、
未人は我をまりし形體はたくましい、力も著
る。
然し白戰では勝ちえざるも才干を執る時に
於ては何ぞ恐れん我に大和魂あり、白眼
生、白鳥の歌、白楢人。白兵戰。白兵
を交ふ。佐糸と徒来で傾蓋をだけた
白楢子。ハンケリアレの白楢子。鈴木高会に
大勢の白眉君の勢稀しみた彼は
今は白土樓中の人となり出た。百口老で
請見千。百尼僚乱。百辟、百面一見に
ぜず、百錬千鹿。百日紅。百萬遍の佛
百日紅は Lidian Lao さるすべりとふ。
百八煩惱の鐘が露に濕んでガント耳元
た。如何なる辛苦でも此所なる艱難にも
打ちつつ百折不撓の鈴老が彼を

今日、呉達する、登龍門に到らし
めたのだ、日本の魂の会に、百鬼摩ひと
秘慶せんとしてゐる、百発百中の威功
である。百戦百勝で、皇帝の向き
草木原野九、麻さゞるはなし。
百葉之長は酉だ。白英の木、廣
葉の事も所に皇帝之人だった。
あんな的例は稀れだ。勝元の的中に
ゐる。草倚元の長は白虎な人
だ。此実なる事は数個の的論
を以て相手に形読て和道、彼の強東
は的確だ。葉の功果は的肰だ。皇
天は蒼天に向く東。基度を皇化さ
したのは土に、王道の内威光にするのだ。
皇考にあたる先考にあたる。皇世にあたる。

讓院は日本法皆自知らに　今校王等
は皇祚のこと、讓先は先考の算裳を
徒のぬ、ちなは私ゆゝ先考の衣鉢を無
視したからだ。未国人に皇道の獅子吼は馬
に念佛だ、皇道のを私るもの日本人だ。其
事頂は皇室御苑に眼並しとする。皆朱
の膳は輪唱。行くくは国民皆兵となるだ。
本年の日鈍は皆既となるのは未国の成都
多丈、鷹梅は皆勤しなる。免許皆侍
は書だ。皆無のこと、能無のこと事実
無根の噂に。白雲嘗嗟、飛霜皚皚、
月皎皎　皇月なるはの宮手の雲の将軍の
卑比を睨ぶ不足漢、長大り椎太郎先生
は本国女郎に於ける教授の卑比ル書
漢字の体法が先。白なる霊开、日本
此各の明年皓長道は未人の蔑望する。

白い

はだ、しろ
肌が楢い。雪の膚い。霜の嶺い。
髪の髪の皤い。彼の度量の皤い
さきん
山茶花の皤なる（白き花）さま、数莖
の水仙の花の皤なる。上面が
皎い。皎日、月の皎と光をなる、寶
士が晶晶としてこの鎮のやうに昇とした
机の上に坐してゐる。皦い水晶の玉が。皦い
宝石が、キンチレでやがれは臈臈とした西瓜
国の蒼天を背景に屏の如く立つてゐる
其美しさ、上品なさまは横山大観光
生が見て知つてゐる。私の鼻の事動
ル黒痣があるに、鼻莖の通るに、私
家の鼻は下野の事にしかに皆に
たのなら。彼は言ふことが皮面だ。皮相的
の觀立まひは其底は同ずれない。

清夏人は現場監督に度帯を天り度下
注射も試みた。皮膚（ヒ）病だ、服法屋の
職人は皮（ひび）あぎり（ひび）姉（ひび）あぎり甚しい、
顔一はいに皰（ニキビ）なのでた、皮膚（ひび）しわとひだ、
本国に於ける第二世の大諸球を先りて政治
的運動に用ひたるが第一の武様だ。の茲
世年の後のよしよ、といふ事を鼓（コ）吹し
たのは私だよ、寂寞たる満洲の野に、刻は
黄、人声なき時、天にいなくなく馬の声、
敦陣の鼓（コウ）角（カク）などが鉄（コウ）の耳えた。天
下泰平の時には鼓（コウ）蹄（ヤウ）轉（ヤウ）の世（ヨウ）漢（カン）も
ちるが今日の如く、生活難の絶頂（ほ）沈痛
泣笑の声が天下に漲てゐるのだ。人心を
鼓（コ）舞（ブ）す。士気を鼓（コ）舞（ブ）する、帰気を
鼓舞（コ）するのだ。人々の悠望を鼓（コ）舞（ブ）する

尽して、安らかに永遠の眠りに就きたまえ。
なお戦争の惨禍は世界に勃発するの虞は四方に漲りつつあり。
諸先生の意嘱に従って地下霊魂を慰めんとする折柄、
貴社の御厚意を感謝し、
枝豆をと蓮葉に盛ってみるのを掴み
するのも無きの様子にて
佐野の花声
花声
花声

龍山の形市を十瞰すれば盆景
其偏にある、五色の砂を以て種々の景色
を盆の中に畫くことの流りしてあるが
今はない。盈月（エンゲツ）を見る。人影地にあり仰
そ満月を見る。明月を見ると。弦月（ゲンゲツ）直なし
して曙光近ツ。洋紙は寒暖にあるに
盈絲（エイシ）甚しいので三尺四方もある地図な
なとの印刷の二度三度拡りになると
迚ても出来ない。其時に空気の温度を
一定に温乾し一定さす必要があるのだ
盈歌（エイケツ）みは盈雇（エイヤ）何れ満つると却くる。
勝利の栄冠（エイクワン）を戴く、可誘（エイ）した。盈翼（エイクワン）
の男、百江君も私君に僕の蓋友（キイウ）であ
る。盡（カン）はなんぞ、、甚きると打消し流む
疑門の女流、延通（いとうまれとなりに）（暗に音をのみ）撤める
瞰射（たいや）に耐抗すべきユニ事（テウカンツ）

昭和五年四月三日 [illegible]報。
「第二世として市民国体を組織せしむ
べく日本人会に於て 従憲 を統帰調
して 將軍の発展に資すべし」
盛年に勵く。壮年の時代は二立来ない。
盛時に苦学したのが今日彼に成功の学問
を戴くのだ 盛名 を馳す山 歓迎
の垂寫を催した。 盛進 を張る。私名は
意気公で筆に口に 聲援 大に力めてくれた
のが、今日交通さしてくれない。降を盛運
に赴く。空しく 青雲 の志を抱いて病床に
苦吟しておる 盛況 の裡に散命した。耳目
に觸るものはたゞ白雲と青山のみと絶え
て俗調淫声の 聲 を妨くるなし。儀式
は 盛親 を出した、 盛親 を呈する。

娘達は盛裝を凝らして通でゐるを一そゐる。
盛者必滅。盛傳鴻業の樣範的人格
は說汗子爵と斜戸部博士とある。助莫
莫の前兆としては盜汗する。水老盟兄へ
世利三郎君は僕の益友ひました。生死を
誓ひた盟友であった。剪頸の友だ。也と
は同寄宿先に三ヶ年共業を俱にした
再洲の交。盟主は莫で亜細亜に於ける
十國が同盟して白皙人種に抵抗する國
者だ。盟誓した。酒盞を取かはした、
盡日職務に勤掌した。旨の盡日で
あった。日舍の鴻石には馬森とかしふ奴
が今迄感なとを厭みず盡完するのだ。
盡忠報國の子では福澤諭吉先生、
近い將來に於て伍齊の日本人は盡頭
して仕まつてはなりしか

杉子は健康回復後、看病に専心
盡瘁したるを感謝し、
ねんごろ
懇篤なる謝辞を述べたり。
杉子は仲々のもの。
杉子の看病振りは
ほめられ
て然るべし。
杉子の看病振りは
ほめられ
て然るべし。
杉子の看病振りは
ほめられ
て然るべし

名門の伴ともあるものが、二つほうり盤等迅
おの身となり、皆、逸蕩（イツ）踴跑（サ）白髪（ハクハツのネン）
となる哀な母胞が、働くに停者なし、
頼るべきなし、左ほなし、快（アツ）々として下宿
屋の二階に蟹（チツ）飛（キヨ）えぬる者、白を入て
算（ハンコンサセウ）ふれる。元を救助することは盤根錯節
の問題である。彼等は盛時に賭博と酒
色に耽り貯蓄は三文もなし、働く時に働
かず盤桓（ハンカン）として行雲（アウ）流（ウンリウ）の日を送りたがる。
青年時代に左顧（サコ）右眄（ウメン）えぬた愕夫（テイフ）。
事ならば忽ちに盤雪（ハンカン）して八八と言ふのだ、伏
見屋の盤漱（ハンカン）婦（ハンカン）は外人に言ふ用されるの鷹揚
老の盧（ロ）胡（コ）するときは何時も掩口盧胡（ロコ）
笑之（ヘラ）といふ仲さいあった。日本は地に猿は
盪滅（タウメツ）されてあるから飛ぶん。キミがナデシ盧（ロ）
に寒月を送った。盧（イオリ）は INN ぬきもの。
六八二

珍妙なる未ごどたと夫婦は目笑した。
母は子供の手を持ち往く時きは必ず目笑する。クリスマスの目睫にある。ライルソンを目撃した丈だ。瞥観した、瞥見した。目禮した。
飛瀑直下三尺だ。秋の象は直奏式
信奉の時直言憚りなす。直往邁進
という気見、直言は真直にふアクネスのぬく、
直奏する事鹿は此頃なくなった。直筆は
事実を行ひ事に書く曲筆のみ、直諫
直答、直訴、直諍は事実の方向通りに
やくする、翻譯の時。直覚的に知る、直
歓は直覚的に観る抗議の言葉 直線
美、曲線美、彼の直情經行と云ふ
彩は要すんぞ古か、憶有もなく、有奉酉
鳴には用ひするよ。そうの彼に音流して

座るものもある。盲唖の手術を受けた。盲唖
マヤア
盲唖学校、盲学校、盲人は用心する。
マヤア
甲斐金山座頭の娘さん生まれる。
英吉は十三才のお七と遊ぶ。
べっちょう
老母重病の報は極秘にする。
眼の時も直(根)を断んでいる。
ねんごろ
枕とも座頭、猫の相談は、人間の
ともだち
相談より大事。
相撲は。相撲より大事。
相撲の勝負を賭ける。
相撲の勝負を賭ける。
相撲の勝負を賭ける

夫人さ

雪根先生は眉雪の直墨を、守し先生の眉
宇の間には意気流刺たるを窺はれる。鐵
鐵壮を凌くの元来。何ぞは眉睫と近い
た。鳴気見在眉宇之間、愁眉を開
た。臨省さ告。反首を捉ず、眉事
を祈る。宵晩、天満下を笑殺せられ、
彼等に省室を捉ずすることの生
眉の急、夫性を看破た彼の烟眼には
驚くよ。鋭破とも書し、女事実を看
過することの出来ぬ。黙許することは出来ぬ、
看病する、看護する、看経するは
律流することを眠食を借にした、寝食に関し
眩人まりと女子の書者を笑殺せしめた。全
ピカで眩惑せられた、愛心を幻惑した。
手品師に眩目せ、眞人(すじめ)

真相を掴まれない。真佐の住所にあり
也。後年の真筆、かある。真迹
であり真跡である。まの真假は玄人になり
深い見解かつもぬ。真偽は目下調査中、
真贋を知るは難しからず。彼女の真情
と純情とは。其着蔓ぶりて知ること
かでぎる。秋山は真率で無邪気な
所が全体に付けたのだ。真意れなれば
こそ。真意抱拳するは難しからず。
真摯の青年。言はれた事は真実
真剣に勉強しなる。武士道の神髄。
一人體とも書はし、真體は正しかしずとて。
此女の真趣は書生佐の動産である
著述の腰目は要點は日本教養で
ある。眼界産ぶき肌めは。一尺方位の視界。

五八七

元々何も無暮の会葬者が
かしずき
会葬者が書かれた名札
奮は御眼中ない。
自下
自眼中ない。
事情を直視
かもの古女がまわぬ、危篤
過眼視する。素眼
三屋萬仁
ニヤバンニ
ニヤバンニ
ニヤバンニ

春祭三十有餘名相集ります清酌を漕
こゝ此れた。秋愛冷吟春愛醉、詩家
春屠酒家仙。秋山が紫に利に春窓（ケレレン）
したのか。頭江さんが武府に春窓（ヌ）ゆゑ、
哀悲春窓不敢違距。とろ〳〵と睡（ヌ）臥
した。睡眠（ヌ）。瞳気を借して。母は夜分は
〳〵時頃から睡（ヌ）癖なあるた、モスリ〳〵義に（ヌ）なる
時代の睡（ヌ）仰は山死、僕房戯睡（ヌ）麿（マ）
睦（ヌ）じく暮す。睦（ヌ）、友睦、和睦、親睦、
睫（ヌ）（マウ）モまつけ。子供も睥睨（ヘイゲイ）するのは好くない。
わめつける。彼は瞋（シンゲイ）恚のあまり眭眦（カイサイ）した
時は実に凄くあった。賣（ヌ）慨（カイ）の（ヌ）あまり眭眦（カイサイ）
した。睚眦之怨（ヌ）報（ヌ）。眠睛（ヌ）めたま、
睜（ヌ）みはる、睚（ヌ）みはる。鼎（テイ）は鼎（テイ）かなへ、
鼎（テイ）々百年世電速、光陰の早く過ぐ
さま、

睽孤の身と存たる今に於ては如何に貴既しても
眞表しても眭眦しても何の益もなき思慮の意亂だ。
彼等婆に客員は骨の軽重を問はれ
て堪まるものが。其の等屋棒りきと上
勇様を中の市場なりし甘戸詩会議
より庇が突んよ。おやすみの骨はとして建
きこと牛の如く。メーターティリールは洋家
が三百五十人ほど、夫れに酒囊飲食の男
が十人程飛る力家と子ではや、金子、志政、
武の母、姉は庶や、小西、佐名、松寿、林、
糠床の雑貨なすり、左山と子洋会所、
中條君より看責はされて居るが自分の
良心が咎めるから委しい事面を書す要
がある、等うかが等は男のもの、婦はか
きねのこと、觀る者婦の如し。婦に安んずる
は平和の生活。逆睹するに難からすみは
誅側するにかたからす、今は睽孤の身と存り

睡眠

モスリの夢を喜べ
眸孤の身となり一日も
もつに
行
ずず、自ら好眸能は
たのひは無い。
諏佐の修をを看護婦
行
看日、看護に借し奉る。彼は駄脳
行
執筆故蕾崗曲れ〜臭の日
行
を延長せば死すとも瞑目すること
が
寿せい。彼の臭りたる時の眼は。卓越
睡
の表情を眸此に光。
睡眠と
小児の瞳孔の如く縮瞳する。睡眠と
瞳孔の如く縮瞳する。睡眠と
同じ。醤亡の如く瞳孔を縮小するも老眼だ。
瞬刻、瞬百、一瞬、一刹那、つかのま。
瞬刻、瞬百、一瞬、一刹那、つかのま。
兎り様から瞬視(カンシ)した紐育市は。此後連
憲にて此方は兎小

五九、

透直には鳥瞰（テウカン）の響作を都接する要何し、一日瞳然たり。瞳子、瞳孔（ドウシ）瞳時（ドウジ）はひと外のこと、大統領が自動車で通過するのを瞥（ベツ）敬（ケイ）したよ、唯瞥（ベツ）視（ベツ）した位には永し記憶には殊らぬよ。瞥（ベツ）見（ケン）とか一瞥（ベツ）。書根先生の人格は立派なもの。余は何時も瞻（セン）仰（ヤウ）してゐる瞻望（ヤウ）、泣涕如雨、余が歸省した時に彼は余を瞿（ゼン）時（ゼン）として瞳（ドウ）目（ジ）した。今は釣（ヤウ）やかな暮をしてゐる、つづまやかなすた。完結直到の愚（ジ）瞽（コ）、酒囊飯袋（ハンタイ）の無頼（ブライ）漢（カン）だ。瞽（コ）瞍（ソウ）であるバガ（五九一）瞿（ク）鍊（ヤウ）哉是我也又は瞿鍊（ヤウ）凌吐、書根先生は七十八の高齢ですがまだ瞿鍊（ヤウ）たるも見ます。

[illegible]の才ゝ直毅さとして有望の青年と[illegible]
眼[illegible]
見ぶるいつた。思想と現実とは完全
[illegible]
[illegible]値を免れない、比喩を蜂[illegible]
[illegible]
る。矛[illegible]を執るのでなければ[illegible]
年前には彼は一村夫子[illegible]
[illegible]
[illegible]

知足、知退、知言、知命、

階下の子供皆な[illegible]質たか因する所

粗食で来るのだと。[illegible]食せぬ小供はどれも

[illegible]弱になり易い。後輩を指導せんか

ために佐野博士は何時も矢面に立って[illegible]

てゐる。斯んな重大なことは矢庭に[illegible]事

は出来ぬ、たちどころに。矢場の女。毎晩

土時になると向角の居酒屋に入る矢大臣

をきめるのに往生した。太田は秋山の知己、

私若の士である。[illegible]を得ば二を執んとするの

は吾人根性だ、知足と云ふ文字は吾人に

は解せぬのだ。土十万知天命、[illegible]

知命に達したと云ふた。佐野君の

知退に酬ゆるに。名臣の知退に感ず

た引受けた。歸有の折の知退に感ずた。

[illegible]

於事を知識するのはは現今のことで認識
とも書く。彼は学者としての行為は、利行左
一とはいへぬ、右位の知遇に酬ゆるのに斯んな
迷惑なこと、知者不惑とは其所
のことを、市し知行左一とみらぬことのあるの
は彼の欲陥ま、矩墨を手にして働そ。たゞ、
又矩繩を手に働くのが彼の後世だ。秋
山の心を知る知音の女としてのは佐野君よ。
短兵戦で玉推すれば。今日海原の長
兵戦と云は其距離実に二十一呼し、
チヨツキは短衣、短所は秋點のは
秋陥と云。不得手。秋山は事に急し
又案具に落瞻する短気な所か。
林の短徑一呼直徑。短點。
短歌は三十一字、和歌のこと。
五九四

悪心軽薄、軽薄は浮薄、浮薄は浅慮、浅慮は軽躁、軽躁は矮人。矮人行ないと等の低い人、矮人は。矮人。矮人事は矮屋。矮屋は長事の根。根は矮屋、矮屋阿屋、阿屋は。矮人。矮人士と称する者で、日本国の害虫たる矮人共を説いて世間庫集の浮説を信ずるものは九十名ある、是ぬも矮人。矮人足ら人と云うことは。矮人。矮人の命ずる所為、矮人。矮人は。矮人。矮人する要のある。もれは矮人。矮人。矮人。

言行矣。（ママ）

元気を失います。基督教の方針は矯激極まりなき詩章則ち矯激に走り易く。其元甚だ切なく。元は元気。

元は元匠。花也だ。

誰か元婦を求めんや。愛元元ら

五九六

石州流の生け花、屋の通り。石煙籠、
石嵩時代、米人の事を所に（敎ことーと）硯ん。
鴨井君は日本人会に硯（はしら）をみる（敎（ことーと）熟石に）偏と）
砂光立壁千仞たるものか。砂煙（シヤエン）のため飛眼丁
すること立事なしい。砂塵（シヤジン）のため。砂穢（サクラテイ）餅。
伊流諸僊之書、陳所研究（ケンキウ）、研師（トギシ）
紫故研精（ケンセイ）、石生章句、彼は一切音の歴史
を研精（ケンセイ）せられた。研廃（ケンマ）、研鑽（ケンサン）、研究（テンキウ）、いつ
此もけんきうすること、切磋琢磨（セツサタマ）して今
日の産業をなすのだ。此切此磋、如琢如磨、
研覈（ケンカク）すべし、温故知新、研覈是れ、
梵語は永着研覈（ケンカク）せなければならない、
仇兵には年は破砲（ハ）の娘（ハ）をもった、二八、音
名屋土社の破屋（ハオク）に寝食を供にした、
左郎の[illegible]

破宰の流人として抜き出されてゐる。先ゝ
ら破門された。破産した破株の抜擢を
なす。確子窓を破碎した。玉を破擂した
権利を破棄した、一家破滅した。一身の
破滅のもと、侵佈の破滅。誤利の破裂
高訴院で破毀された。破誤となった。
耐ち材の事業の破綻した。破顔一笑した。
英文は大概破題するのか席官である。破鐘
の歎を見る。破鏡復た照さず淫試
を破却する。破天荒の記録を先づた。秋
か海岸は破天荒の大勝利をした。春天に
直昇した。第三国のは破竹の勢であった。彼は
酒嚢飯袋の破落戸だ、危険分子だ、
売老道断の破庫妃漢だ、鉄面皮だ、
破邪顯正の悲人であった、世味津々、名声
籍々言嘖嘖

[illegible]
隠れ場所を求めた。
ハクラン、ミチ
彼女は鴎外の娘の真寿子と義
姉妹の契りを結んでいた。
彼女は読むに従って興
味を増して来た。
ハクラン
彼女は森林太郎の名
を知っていた。
ハクラン
日露戦争の始まる少し
前から
ハクラン
彼女は鴎外の軍服姿を度
々見かけた。
ハクラン
軍服姿の鴎外は
ハクランの
軽蔑に値した。
ハクラン
しかし彼女は
ハクランの
鴎外の作品を愛読した。
ハクラン

彼の態度は仲々謙虚で即座に頭を下げることは出来ない。彼の文章はまだ生硬で融通のきかない。彼の頭脳は明晰だが、非常に狭量だ。彼は才能を鼻にかけ、他人を見下げる傾向がある。彼の文章は時に華麗だが、しばしば繁雑に流れる。彼の文章は時に平明だが、しばしば平板に流れる。彼の文章は時に流暢だが、しばしば単調に流れる。彼の文章は時に簡潔だが、しばしば冗漫に流れる。彼の文章は時に重厚だが、しばしば晦渋に流れる。彼の文章は時に軽妙だが、しばしば軽薄に流れる。彼の文章は時に流麗だが、しばしば繊弱に流れる。彼の文章は時に雄渾だが、しばしば粗野に流れる。彼の文章は時に枯淡だが、しばしば貧寒に流れる。彼の文章は時に豊潤だが、しばしば過多に流れる。彼の文章は時に剛健だが、しばしば硬直に流れる。彼の文章は時に優美だが、しばしば繊巧に流れる。彼の文章は時に奇抜だが、しばしば荒唐に流れる。彼の文章は時に清新だが、しばしば陳腐に流れる。彼の文章は時に老熟だが、しばしば老醜に流れる。彼の文章は時に幽玄だが、しばしば難解に流れる。彼の文章は時に自然だが、しばしば無技巧に流れる。彼の文章は時に技巧的だが、しばしば人工的とそしられる。彼の文章は時に平凡だが、しばしば陳腐に流れる。彼の文章は時に非凡だが、しばしば奇矯に流れる。彼の文章は時に簡素だが、しばしば貧弱に流れる。彼の文章は時に華麗だが、しばしば虚飾に流れる。彼の文章は時に質実だが、しばしば鈍重に流れる。彼の文章は時に軽快だが、しばしば軽佻に流れる。彼の文章は時に重厚だが、しばしば鈍重

六〇。

鉄は硼砂（ハウシャ）はと、ワカスは付け、ロウ付と書、
牛革の碌碌（ロクロク）として歩きそのある。船はかしに近
く磴泊した。彼は手にしに備忘なし碌（ロク）
くとして居候してある。目的を得（さまだ）く。勇抜
先生は碩老の先望（サクバ）責（いれ）たるものだ。彼
の子孫が碩戒（セキヒ）する。碩学（セキガク）の博（コウジ）雲だ。
碩儒（セキジ）。電線を張る時子には必ず碍（かイ）子を
用ゆる。碩事不辰（セキカムトはすたる）とて君子の道の決して元
ひざること。彼は冤（エンザイ）罪を蒙つて獄した。
思念を通（ヒ）派せしまたに完璧（ヘキ）となれぬ。
碧天（キテン）、碧空（キクウ）、碧宇（キウ）、碧蒲（キウ）天（サウ）、碧天（キテン）
碧王（キギヨウ）の根あけ。碧柳（ヘキ）一葉。碧緑（ヘキリヨウ）
彼の碧眼。碧千（タン）丈寒無波、
まさに一命を捨てんとして碧漢（ヘキカン）に立つ
居つたのだ。深淵（シンエン）に立つ海は碧青（ヘキカウ）
のぬしにしてなのだ。

船はプラン湾に着、先々は朝夫の蒼
天に薄(ひろ)がる時も去った。謙(やう)々たる(父々)
海外は浪もなく懶(ものう)げさうに、ゆったりと
舷に昇降してゐるのが、魏(かう)豪の
せしてあった。磯の碧(へきりう)緑たる熱帯の樹
木は、油のやうな水に半身浸されてゐる。
其凡光を見た時、美に木に昇る景
色なりと汗ぶ高を、遥か頭に浮ん
で来た。月山の峯に秋に高く最上の外は蕈古に緑なり
川の神様を瓜先きつ塗りに上って行くと
小笹の片側には、宸(ゆ)々たる油流が
礫(ぶ)礫にぶつつかる珠(しゅ)玉(ぎょく)となりて飛ぶる。
又数十年も、座も日も屬ソて来た、
古い水車が黒檀(コンタン)の重しなり、ヨスキヨ
花(ぶ)に包(つつ)まれて、底(うな)は、永く咲く声
でギーッ〳〵と喰(うな)りなり、四拾

十萬の[illegible]を流して滿面
碧苔を辱した大[illegible]
ル近し。[illegible]憂[illegible]
ここは。心事の[illegible]
[illegible]達する[illegible]
は[illegible]大[illegible]
彼の言は確乎[illegible]
[illegible]?
揚[illegible]
確乎不抜の[illegible]
を救はんが[illegible]
今井老は[illegible]
林[illegible]
確[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

後の森鹿市なる性格
をも能せしめたり。森鹿市清之人。
森之鹿之なる名を付けたる
まゝの石には一首両采
の言、一書社に達する
ごとく碑
葉陽城す、後度
すべて模碑す。私
時、自には
ゆえ
ゆえに鹿成せるす。自
ゆえ
ゆえに
ゆえ
ゆえ
ゆえ

殊に細工の手際、
のは蓋世不滅のも
から
境硯の在地多く
硯の在地多く
章のみ有り。墓碣
独のためには碣
事実墓碣は死んだ
てゐるが、皆遺
杭のセキ
は。今更斯様に序述
賞意を表すまでも
勝を弁ず。するごとく成
章疏さゞれ阻疏さゞれ
硯石とは荒硯のことで
のみ佳は投ずる枝に
また瓦を救え硯イバラ
りとかおすものも

ケニうえ
鷹鬼妻のセキ
カうカ
ら元。事板附正は
ケつ
碣と書き
ケつ
碣と書き
ケつ
碣と書き

益々磽磽せられ、磽磽せらるゝ
世は秋山と同じ寄宿舎に三年も同
居してゐたので肝膽相照の友人だ。
光輝の居るすは奥の沽は禁ぢた彼
は社用たかゝな。社稷のため難に
詢ずるのが男だ。余は米国をして余の落焉
の地としてゐるのだ、死して才二世の烟を
肥す者だ。里田子舞は社稷の臣だ。
阿母の産土神の社頭に鉄打たるの
看板を高くつけてあるのは秋山の宅で
書。社会的事業に矣かはよと事
者にして来た。青年者雙方すり
手段の私族を中心にして来た。手強。
手威を動のため丸船隊は北南
すれ出のけだ。何かの宿手だよ。腰は
社会奉公の職務に盡摩しゐる。

北九州(きたきゅうしゅう)地方(ちほう)を中心(ちゅうしん)とした神社(じんじゃ)の一覧(いちらん)です。

神社(じんじゃ)は、神様(かみさま)をまつる建物(たてもの)のことです。

神様(かみさま)は、人々(ひとびと)を守(まも)ってくださいます。

神社(じんじゃ)には、神様(かみさま)のお使(つか)いとされる動物(どうぶつ)がいます。

例(れい)えば、稲荷(いなり)神社(じんじゃ)のきつねや、八幡(はちまん)神社(じんじゃ)のはとなどです。

神社(じんじゃ)には、鳥居(とりい)があります。

鳥居(とりい)は、神様(かみさま)の世界(せかい)と人間(にんげん)の世界(せかい)の境目(さかいめ)にあります。

鳥居(とりい)をくぐるときは、一礼(いちれい)してください。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)があります。

手水舎(ちょうずや)では、手(て)と口(くち)を清(きよ)めます。

手水舎(ちょうずや)の使(つか)い方(かた)は、次(つぎ)のとおりです。

まず、右手(みぎて)で柄杓(ひしゃく)を持(も)ち、水(みず)をくみます。

次(つぎ)に、左手(ひだりて)を洗(あら)います。

次(つぎ)に、柄杓(ひしゃく)を左手(ひだりて)に持(も)ち替(か)えて、右手(みぎて)を洗(あら)います。

次(つぎ)に、右手(みぎて)に柄杓(ひしゃく)を持(も)ち替(か)えて、左手(ひだりて)に水(みず)をためて口(くち)をすすぎます。

最後(さいご)に、柄杓(ひしゃく)の柄(え)を洗(あら)います。

柄杓(ひしゃく)は、元(もと)の場所(ばしょ)に戻(もど)してください。

拝殿(はいでん)では、賽銭(さいせん)を入(い)れます。

賽銭(さいせん)は、神様(かみさま)へのお供(そな)えものです。

賽銭(さいせん)を入(い)れたら、二礼(にれい)二拍手(にはくしゅ)一礼(いちれい)をします。

二礼(にれい)は、深(ふか)くおじぎを二回(にかい)することです。

二拍手(にはくしゅ)は、手(て)を二回(にかい)たたくことです。

一礼(いちれい)は、深(ふか)くおじぎを一回(いっかい)することです。

拝殿(はいでん)の奥(おく)には、本殿(ほんでん)があります。

本殿(ほんでん)には、ご神体(しんたい)がまつられています。

ご神体(しんたい)は、神様(かみさま)が宿(やど)るものです。

ご神体(しんたい)は、鏡(かがみ)や剣(つるぎ)や勾玉(まがたま)などです。

ご神体(しんたい)は、普段(ふだん)は見(み)ることができません。

本殿(ほんでん)の前(まえ)で、お参(まい)りをします。

お参(まい)りの仕方(しかた)は、賽銭(さいせん)を入(い)れて、二礼(にれい)二拍手(にはくしゅ)一礼(いちれい)です。

神社(じんじゃ)には、おみくじがあります。

おみくじは、神様(かみさま)からのお告(つ)げです。

おみくじには、大吉(だいきち)、吉(きち)、中吉(ちゅうきち)、小吉(しょうきち)、末吉(すえきち)、凶(きょう)などがあります。

大吉(だいきち)が一番(いちばん)良(よ)いです。

凶(きょう)が出(で)ても、悪(わる)いことばかりではありません。

凶(きょう)は、気(き)をつけるようにという神様(かみさま)からのメッセージです。

おみくじは、結(むす)んで帰(かえ)ることが多(おお)いです。

結(むす)ぶ場所(ばしょ)は、神社(じんじゃ)によって違(ちが)います。

絵馬(えま)は、願(ねが)いごとを書(か)いて奉納(ほうのう)する木(き)の板(いた)です。

絵馬(えま)には、合格(ごうかく)、安産(あんざん)、商売繁盛(しょうばいはんじょう)などの願(ねが)いごとを書(か)きます。

絵馬(えま)の裏(うら)には、住所(じゅうしょ)と名前(なまえ)を書(か)きます。

絵馬(えま)は、神社(じんじゃ)の絵馬掛(えまか)けに掛(か)けます。

絵馬(えま)の図柄(ずがら)は、その神社(じんじゃ)にゆかりのあるものが多(おお)いです。

例(れい)えば、菅原道真(すがわらのみちざね)をまつる天満宮(てんまんぐう)では、牛(うし)の絵(え)の絵馬(えま)が多(おお)いです。

これは、菅原道真(すがわらのみちざね)が牛(うし)に乗(の)っていたという伝説(でんせつ)があるからです。

祭(まつり)は、神社(じんじゃ)で行(おこな)われる行事(ぎょうじ)です。

祭(まつり)には、例大祭(れいたいさい)、秋祭(あきまつり)、春祭(はるまつり)などがあります。

例大祭(れいたいさい)は、その神社(じんじゃ)で一番(いちばん)大(おお)きな祭(まつり)です。

例大祭(れいたいさい)の日(ひ)には、神輿(みこし)が町(まち)を練(ね)り歩(あるき)きます。

神輿(みこし)は、神様(かみさま)が乗(の)るものです。

神輿(みこし)を担(かつ)ぐ人(ひと)を氏子(うじこ)といいます。

氏子(うじこ)は、その神社(じんじゃ)の周(まわ)りに住(す)んでいる人(ひと)たちです。

氏子(うじこ)は、祭(まつり)のときに協力(きょうりょく)します。

祭(まつり)には、屋台(やたい)がたくさん出(で)ます。

屋台(やたい)では、食(た)べ物(もの)や遊(あそ)びなどを売(う)っています。

祭(まつり)の日(ひ)には、花火(はなび)が上(あ)がることもあります。

花火(はなび)は、夜空(よぞら)にきれいに広(ひろ)がります。

祭(まつり)は、地域(ちいき)の人(ひと)たちが集(あつ)まる大切(たいせつ)な行事(ぎょうじ)です。

神社(じんじゃ)には、境内社(けいだいしゃ)があります。

境内社(けいだいしゃ)は、本殿(ほんでん)の周(まわ)りにある小(ちい)さな神社(じんじゃ)です。

境内社(けいだいしゃ)には、稲荷神社(いなりじんじゃ)や恵比寿神社(えびすじんじゃ)などがあります。

恵比寿神社(えびすじんじゃ)は、商売繁盛(しょうばいはんじょう)の神様(かみさま)です。

恵比寿神社(えびすじんじゃ)は、七福神(しちふくじん)の一人(ひとり)です。

七福神(しちふくじん)は、福(ふく)をもたらす七(なな)人(にん)の神様(かみさま)です。

七福神(しちふくじん)は、恵比寿(えびす)、大黒天(だいこくてん)、毘沙門天(びしゃもんてん)、弁財天(べんざいてん)、福禄寿(ふくろくじゅ)、寿老人(じゅろうじん)、布袋(ほてい)です。

恵比寿(えびす)は、釣竿(つりざお)と鯛(たい)を持(も)っています。

大黒天(だいこくてん)は、打出の小槌(うちでのこづち)と大(おお)きな袋(ふくろ)を持(も)っています。

毘沙門天(びしゃもんてん)は、鎧(よろい)を着(き)ています。

弁財天(べんざいてん)は、琵琶(びわ)を持(も)っています。

福禄寿(ふくろくじゅ)は、長(なが)い頭(あたま)をしています。

寿老人(じゅろうじん)は、鹿(しか)と一緒(いっしょ)にいます。

布袋(ほてい)は、大(おお)きなお腹(なか)をしています。

七福神(しちふくじん)の絵(え)は、縁起物(えんぎもの)として人気(にんき)があります。

神社(じんじゃ)には、狛犬(こまいぬ)があります。

狛犬(こまいぬ)は、神様(かみさま)を守(まも)る動物(どうぶつ)です。

狛犬(こまいぬ)は、一対(いっつい)で置(お)かれることが多(おお)いです。

一対(いっつい)とは、二(に)つで一(ひと)組(くみ)のことです。

一(いち)つは口(くち)を開(あ)けた阿形(あぎょう)、もう一(ひと)つは口(くち)を閉(と)じた吽形(うんぎょう)です。

阿形(あぎょう)は、「あ」という口(くち)の形(かたち)です。

吽形(うんぎょう)は、「うん」という口(くち)の形(かたち)です。

阿吽(あうん)の呼吸(こきゅう)という言葉(ことば)は、ここから来(き)ています。

狛犬(こまいぬ)は、もともとは獅子(しし)という動物(どうぶつ)をかたどったものです。

獅子(しし)は、インドや中国(ちゅうごく)にいる想像上(そうぞうじょう)の動物(どうぶつ)です。

獅子(しし)は、仏教(ぶっきょう)とともに日本(にほん)に伝(つた)わりました。

日本(にほん)には獅子(しし)がいないので、犬(いぬ)に似(に)た狛犬(こまいぬ)になりました。

神社(じんじゃ)には、参道(さんどう)があります。

参道(さんどう)は、鳥居(とりい)から拝殿(はいでん)までの道(みち)です。

参道(さんどう)の両側(りょうがわ)には、灯籠(とうろう)が並(なら)んでいることがあります。

灯籠(とうろう)は、昔(むかし)は明(あか)りをともすためのものでした。

灯籠(とうろう)は、今(いま)では飾(かざ)りとして置(お)かれていることが多(おお)いです。

灯籠(とうろう)には、石(いし)でできたものや金属(きんぞく)でできたものがあります。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、御神水(ごしんすい)がある神社(じんじゃ)もあります。

御神水(ごしんすい)は、飲(の)むことができる神社(じんじゃ)の水(みず)です。

御神水(ごしんすい)は、持(も)ち帰(かえ)ることができる神社(じんじゃ)もあります。

御神水(ごしんすい)を持(も)ち帰(かえ)るときは、容器(ようき)を用意(ようい)しておきましょう。

神社(じんじゃ)には、御朱印(ごしゅいん)があります。

御朱印(ごしゅいん)は、参拝(さんぱい)の証(あかし)として神社(じんじゃ)からいただくものです。

御朱印(ごしゅいん)は、墨(すみ)で書(か)かれた文字(もじ)と朱色(しゅいろ)の印(いん)からなります。

御朱印(ごしゅいん)は、御朱印帳(ごしゅいんちょう)に書(か)いてもらうことが多(おお)いです。

御朱印帳(ごしゅいんちょう)は、神社(じんじゃ)で買(か)うことができます。

御朱印(ごしゅいん)は、参拝(さんぱい)の後(あと)にいただくのがマナーです。

御朱印(ごしゅいん)は、お金(かね)ではなく、お賽銭(さいせん)とは別(べつ)に納(おさ)めます。

御朱印(ごしゅいん)は、神様(かみさま)からのお土産(みやげ)のようなものです。

神社(じんじゃ)には、お守(まも)りがあります。

お守(まも)りは、身(み)につけて神様(かみさま)の加護(かご)をいただくものです。

お守(まも)りには、交通安全(こうつうあんぜん)、学業成就(がくぎょうじょうじゅ)、厄除(やくよ)けなどがあります。

お守(まも)りは、一年(いちねん)ごとに新(あたら)しいものに替(か)えるのがよいとされています。

古(ふる)いお守(まも)りは、神社(じんじゃ)に納(おさ)めます。

古(ふる)いお守(まも)りは、どんどん焚(た)きあげられます。

神社(じんじゃ)には、神木(しんぼく)があります。

神木(しんぼく)は、神様(かみさま)が宿(やど)る木(き)とされています。

神木(しんぼく)には、しめ縄(なわ)が巻(ま)かれていることが多(おお)いです。

しめ縄(なわ)は、神聖(しんせい)な場所(ばしょ)であることを示(しめ)すものです。

しめ縄(なわ)には、紙垂(しで)という白(しろ)い紙(かみ)が下(さ)がっています。

紙垂(しで)は、ジグザグの形(かたち)をしています。

神社(じんじゃ)には、絵馬掛(えまか)けのほかに、風鈴(ふうりん)がある神社(じんじゃ)もあります。

風鈴(ふうりん)は、夏(なつ)の風物詩(ふうぶつし)として人気(にんき)があります。

風鈴(ふうりん)の音(おと)は、涼(すず)しげな音(おと)がします。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、井戸(いど)がある神社(じんじゃ)もあります。

井戸(いど)は、昔(むかし)は生活用水(せいかつようすい)として使(つか)われていました。

井戸(いど)には、井戸神様(いどがみさま)がいるとされています。

井戸神様(いどがみさま)は、水(みず)を守(まも)る神様(かみさま)です。

井戸(いど)の水(みず)は、今(いま)では飲(の)めないことが多(おお)いです。

井戸(いど)には、蓋(ふた)がしてあることが多(おお)いです。

神社(じんじゃ)には、社務所(しゃむしょ)があります。

社務所(しゃむしょ)は、神職(しんしょく)の方(かた)が事務(じむ)をとる場所(ばしょ)です。

社務所(しゃむしょ)では、御朱印(ごしゅいん)やお守(まも)りを授与(じゅよ)しています。

社務所(しゃむしょ)では、祭(まつり)の相談(そうだん)などもします。

神社(じんじゃ)には、神職(しんしょく)の方(かた)がいます。

神職(しんしょく)には、宮司(ぐうじ)、権宮司(ごんぐうじ)、禰宜(ねぎ)、巫女(みこ)などがいます。

宮司(ぐうじ)は、その神社(じんじゃ)の最高責任者(さいこうせきにんしゃ)です。

巫女(みこ)は、神楽(かぐら)を舞(まい)ったり、お守(まも)りを授与(じゅよ)したりします。

巫女(みこ)は、白衣(はくい)と緋袴(ひばかま)を着(き)ています。

神社(じんじゃ)には、神楽殿(かぐらでん)があります。

神楽殿(かぐらでん)は、神楽(かぐら)を奉納(ほうのう)する建物(たてもの)です。

神楽(かぐら)は、神様(かみさま)に捧(ささ)げる舞(まい)や音楽(おんがく)のことです。

神楽(かぐら)には、巫女神楽(みこかぐら)と獅子神楽(ししかぐら)があります。

巫女神楽(みこかぐら)は、巫女(みこ)が舞(まい)います。

獅子神楽(ししかぐら)は、獅子頭(ししがしら)をかぶった人(ひと)が舞(まい)います。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、池(いけ)がある神社(じんじゃ)もあります。

池(いけ)には、亀(かめ)や鯉(こい)がいることが多(おお)いです。

亀(かめ)は、長寿(ちょうじゅ)の象徴(しょうちょう)とされています。

鯉(こい)は、滝登(たきのぼ)りの伝説(でんせつ)があります。

神社(じんじゃ)には、参道(さんどう)のほかに、表参道(おもてさんどう)と裏参道(うらさんどう)がある神社(じんじゃ)もあります。

表参道(おもてさんどう)は、正面(しょうめん)の鳥居(とりい)からまっすぐ伸(の)びる道(みち)です。

裏参道(うらさんどう)は、別(べつ)の入口(いりぐち)から続(つづ)く道(みち)です。

裏参道(うらさんどう)は、静(しず)かで落(お)ち着(つ)いた雰囲気(ふんいき)があります。

神社(じんじゃ)には、境内(けいだい)に木(き)がたくさんあります。

木(き)は、神様(かみさま)が宿(やど)るとされています。

木(き)には、樹齢(じゅれい)何百年(なんびゃくねん)もの大木(たいぼく)があります。

大木(たいぼく)には、しめ縄(なわ)が巻(ま)かれていることが多(おお)いです。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、御神木(ごしんぼく)がある神社(じんじゃ)もあります。

御神木(ごしんぼく)は、神様(かみさま)が宿(やど)る木(き)とされています。

御神木(ごしんぼく)には、しめ縄(なわ)が巻(ま)かれていることが多(おお)いです。

御神木(ごしんぼく)は、切(き)ってはいけません。

御神木(ごしんぼく)は、神聖(しんせい)な木(き)です。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、井戸(いど)がある神社(じんじゃ)もあります。

井戸(いど)は、昔(むかし)は生活用水(せいかつようすい)として使(つか)われていました。

井戸(いど)には、井戸神様(いどがみさま)がいるとされています。

井戸神様(いどがみさま)は、水(みず)を守(まも)る神様(かみさま)です。

井戸(いど)の水(みず)は、今(いま)では飲(の)めないことが多(おお)いです。

井戸(いど)には、蓋(ふた)がしてあることが多(おお)いです。

神社(じんじゃ)には、社務所(しゃむしょ)があります。

社務所(しゃむしょ)は、神職(しんしょく)の方(かた)が事務(じむ)をとる場所(ばしょ)です。

社務所(しゃむしょ)では、御朱印(ごしゅいん)やお守(まも)りを授与(じゅよ)しています。

社務所(しゃむしょ)では、祭(まつり)の相談(そうだん)などもします。

神社(じんじゃ)には、神職(しんしょく)の方(かた)がいます。

神職(しんしょく)には、宮司(ぐうじ)、権宮司(ごんぐうじ)、禰宜(ねぎ)、巫女(みこ)などがいます。

宮司(ぐうじ)は、その神社(じんじゃ)の最高責任者(さいこうせきにんしゃ)です。

巫女(みこ)は、神楽(かぐら)を舞(まい)ったり、お守(まも)りを授与(じゅよ)したりします。

巫女(みこ)は、白衣(はくい)と緋袴(ひばかま)を着(き)ています。

神社(じんじゃ)には、神楽殿(かぐらでん)があります。

神楽殿(かぐらでん)は、神楽(かぐら)を奉納(ほうのう)する建物(たてもの)です。

神楽(かぐら)は、神様(かみさま)に捧(ささ)げる舞(まい)や音楽(おんがく)のことです。

神楽(かぐら)には、巫女神楽(みこかぐら)と獅子神楽(ししかぐら)があります。

巫女神楽(みこかぐら)は、巫女(みこ)が舞(まい)います。

獅子神楽(ししかぐら)は、獅子頭(ししがしら)をかぶった人(ひと)が舞(まい)います。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、池(いけ)がある神社(じんじゃ)もあります。

池(いけ)には、亀(かめ)や鯉(こい)がいることが多(おお)いです。

亀(かめ)は、長寿(ちょうじゅ)の象徴(しょうちょう)とされています。

鯉(こい)は、滝登(たきのぼ)りの伝説(でんせつ)があります。

神社(じんじゃ)には、参道(さんどう)のほかに、表参道(おもてさんどう)と裏参道(うらさんどう)がある神社(じんじゃ)もあります。

表参道(おもてさんどう)は、正面(しょうめん)の鳥居(とりい)からまっすぐ伸(の)びる道(みち)です。

裏参道(うらさんどう)は、別(べつ)の入口(いりぐち)から続(つづ)く道(みち)です。

裏参道(うらさんどう)は、静(しず)かで落(お)ち着(つ)いた雰囲気(ふんいき)があります。

神社(じんじゃ)には、境内(けいだい)に木(き)がたくさんあります。

木(き)は、神様(かみさま)が宿(やど)るとされています。

木(き)には、樹齢(じゅれい)何百年(なんびゃくねん)もの大木(たいぼく)があります。

大木(たいぼく)には、しめ縄(なわ)が巻(ま)かれていることが多(おお)いです。

神社(じんじゃ)には、手水舎(ちょうずや)のほかに、御神木(ごしんぼく)がある神社(じんじゃ)もあります。

御神木(ごしんぼく)は、神様(かみさま)が宿(やど)る木(き)とされています。

御神木(ごしんぼく)には、しめ縄(なわ)が巻(ま)かれていることが多(おお)いです。

御神木(ごしんぼく)は、切(き)ってはいけません。

御神木(ごしんぼく)は、神聖(しんせい)な木(き)です。

宴居は神聖だ、如禁制だぞ、天皇は
神聖にて宴すべからず。振り中健康を
ほるために古峯原山、三吉山其他二十
有餘の神符（おまもり）を持来した。十
歳の時は神童といはれ。夏星地に到
る神道がある。神葬（シンサウ）によって現れ居る。
ぎりしやにある神話のやうな。神世話（シンハツ）と云
かと神譴（シンケン）と字でし。神奥（シンヤウ）、草薙（くさなぎ）の奥（ヤウ）
神鏡（ヤタノカヾみ）、八咫鏡（ヤタノカヾみ）、神縄（ヤさがにのまがため）、八咫瓊（ヤさがにのまがため）、曲玉
の三種神器あり。神韻縹渺たり。
教弘神韻沖簡、インスピレイションの大和魂は
武士道の神髄（シンズイ）だ。奥髄（シンリヨ）とは誤り、神
。貧不思議の事事。神慮を実し、
神代杉の色はアモテで着けることが
来る。神無月の雷のつはさが（十月）
六。六

あの葉は靈葉が仙葉の神葉の知らなしが売く治る、日本の神樣説は未人の頭には解し難いもの多ある。其雅盛が今日なる葉に、山には長崎にと神（シン）山鬼（シユツキ）沒（ボツ）の有様に盧鼇では頭を惱すてゐるけれど、未国人は神佛混流（シンブツコンカウ）する凡のある。王右混流（ヨウヒ）君葉は魂（ヨウ）智感情とを混流（ニンカウ）と批評するから法目、彼は芸方性すぎる。神経過敏なるのである。それは日本の内情を知らぬ外国人の神佛混流（シンブツコンカウ）の誹だ。松凡の声、陵の音阿が歩代の善を毒（コトブ）かぬはなし。管家復事君は祝史の悴で（雜言）ちりなかふ下拇男のピンプとなるとは。祝捷舎、祝筵（シユクテヤウ）を付った。祝着（シユクテヤウ）する、官の祝融（シユク）に事あらかれし全部竜殿也。

祝辞は夏の外、南海の孟夏、
其の祝辞は
祝辞を述ぶ
祝筵を張る。兵士の為には
為に
為の人は祖先崇拝
祖先を崇拝
する外は許されぬ。祖
祖宗の遺訓に反する。
祖宗の遺訓を重んずる。
祖宗の遺訓を重んずる。
祖宗の遺訓を重んずる

こんなふう
ヒゴ
ヒゴルフ
ヒゴルフケッ
ヒゴルフケッコ
ヒゴルフケッコン
ヒゴルフケッコン
ヒゴルフケッコン

華族や官吏にして特別の功労あるものを
待遇するために祇候と號する資格を
與へる、夫れに、錦雞間祇候と、麝香
間祇候との二種ある。麻穢れを清淨
せんがために祈祈するを祓除といふ。何
の祟りか、如何なる怪祟か。み神祟か。
皆宇宙は先考の十九年の祥日、布日に書、
年忌は小祥、三年忌は大祥。瑞
雲說はれ。祥雲說はれ、花を祭す。
米國の祭政は一致してゐる。神前に祭祭、
を侍供した。冠婚葬祭、天滿宮の
祭儀は宇宙一祭典、英雄祭拜、
雲然として說はれ、雲昳とあらはれた。裏
アパートたちの一階住えるは窓のうちの視
界が実に狹い。視聊。相信の祭祀

忘サ廻（ママ）とべき句、お花の言葉、みは人の
感情を実ずる言葉を綜合して禁句
とよ。別の詞部屋の仁間には女の童
の警者一人居る、頭は紫の白の浮ぬき
の着たに馬王の袴（ハカマ）を着て、禁色の
服装。禁殿（キンデン）には近衛兵、。禁門（キンモン）、
禁園（キンエン）の禁庭（キンテイ）、禁裏（キンリ）、禁廷（キンテイ）、禁中（キンチュウ）、禁闕（キンケツ）
止まる禁厨（キンチュウ）等。年若位に住こみ
る方は禁お殊に主（キミ）に同年（ドウネン）ごろ
のひ。雪姫（ユキヒメ）季穎（キエイ）の秋（トキ）、天童（テンドウ）の穎
村、童男（ドウナン）の秀才。元旦は福茶の
儀（ギ）庭を浄（キヨ）む。福徳事は七福神の一、
福は神心を布す。山形市のお事は彼の
ように山形と市のお事は彼の
ように山形と市のお事は彼の
ように山形と

彼の神は女人の姿を
示す神
何の神様じ。
ティキ神
ギョウシン
こと。スパーメンの筆者言、
マラサワ
殺さ
戦争
撃墜事実を誇り
心
せんがため
行する
禅
長持ちする
禅
禅
禅

食獣行だ。不倚の行状だ。人道を
ほかざるものだ、バラダイスと称する[illegible]
す。カリヨウビンカと呼ぶ仙禽あり、雉と
呼ぶ珍禽とある。野禽もある。和
革衛し三は[illegible]に延びた時をあれ、
未墜から最上まで和[illegible]を書く
を賞ひに来た。彼は私心を挑む事
むべき奴だ。私[illegible]して居ったのでる舞は
は夜分に宿に訪れて来た。私曲なこ
とはせない。私事の都庁で。私怨
に居るのも無理はない。北岩夷ゆ
私恩を受けた事は。地と或のぬし
私恩を濃ることはせぬ。宦尾を私
[illegible]た。私娼とは公娼公外の密
[illegible]婦よ或時はちごく、又は私寡子

女主人公の私は三角関係の渦中に巻き込まれる。私は、野沢からも私からも訪問を断られた。私は通、宿屋を営んでいる。密通は姦通である。彼は私を愛しているが私は彼を愛していない。彼は私の愛を得ようと努力した。私は彼と結婚しようと決心した。彼は野蛮の行為はしなかった。彼は楚々たる女である。か、私は彼の友人である。私は彼の仕事を助けた。公債の為めに一肩を落とした

北先君の秀気は田舎に在りては足許にも彼はない。天才秀逸、辞藻宏麗なる五十有余、君の文章、彼の著書中、母の小説は秀絶せる文章だ。山丸秀霊の地なり彼の秀穎を以て今長に任せられるのは。秀麗なる白楢人。史量の秀霊殆んど人寰にあらず、秀霊なる龍山。秀麗なる五代レスト百雲雄として千秋に高し彼の人事の醜陋嘆事すべし。心事の高高朗にして気宇の洞達なるに敬服する。垂涎に奪ひ、樹木のほ、杏山。大磯の磯の禅山。芋ゆんしゆは山丸禅の帯の地なる。山河祥帯する小邑である。佐長獨嘯と名乗る。

ピナンには本庄と云ふ有髪の僧、居士林
には炊事といふ禿丁。岳父は禿頭を曝し
て来た。れ若し禿頭を照らし。彼は公平
無私で。秉公持平の應若であれ。
君々の婚約を秉持してくれたのは蘆原氏
腰間の秋色、竟の秋色、秋色。昊天なる
く。秋波を送る怪しからぬ女。秋郊を自
動車で疾走したか。伍家の郡人から秋
扉の待遇を受け、日本の女から嫌厭
せられ今と斉りては眼孔の身となれば
なるから、ここを先途と戰つて、天下を麾
撃するか。さなくば自刃に倒れまし外し
策はない。瓦屋の恥。秋宵は耽読
する。秋涼が肌に迫つてゐる、去れは軍実、
無根のこと、それは秋毫も知らぬ。
秋扉
二十五

科弟、科拳

仕葉はすり〳〵仕れなく小所衿帯の
地は、務未、一層秋色を増して来た。
秋典を増す。淋しい秋霜の中に。
秋晴一陣の雲もなく。階前の梧葉
すでに秋声、何處も同じ秋の夕暮、
喜ん春陽、始めて秋霜、秋高しー
て馬既えて秋高馬肥。秋霜烈日の
態なるべきは彼の恐れ、彼の凡形は、秋
霜烈日の感ずるなり彼の獄を断するは秋
霜烈日の如し。科人、科斗文字。漢字
大倉の宝、科弟の上で能弟を定める。
かれこれと科白を論する要はない、科科
斗抜けなら先、古譚の官吏となるには
春甫に先立つて科拳を受し必要も
ある古ろう、判任官の按手となつて。

嵩に居れば親の光で、老の無頓に通つ
たし、世の人も信用してくれたが、今は、知る
べもなき基準、流浪の身、あれは学
識とか、履歴とか、あるもなし。徒手
空拳の一社糠。秒忽の事に弟を
立てて科白を誨するは、西陣の宅を辞
して自事の天下に。今日の青年は、ややとし
すると、科学の蔑能を義を東逝する。
マルクスはとも、だが、科学的社会主義を
陳説してゐるが。廣東の市街に、空々
と諸博博を詔可してゐる馬賊は白
書横行調おしてゐるといふのは因す
る所社政である。漢内領事の東公様
手にとる。無故恍惚なる神さ。廣東には
沙面と称する祖借地作事、祖界も同じ

移恩 三年

移檄（意田之）

租庸調は昔日昇にしあれ（云云）。夫役は庸
未祖は祖昇で）調は布又は産者にて始める。
屋式の秩序整然とし一絲も紊れず
官位の秩叙によって高官から一人つつ謝
遊として入場した。山の神邑の祖流、清和
秩々、左にあたり、右にあたり、無数の珠
玉は祭として春陽を流ひてゐる。秩黄（アゆベヤ）
紛三年程に延ひた頃、千葉億非秩（チンビリオン）
秩鮮は可度の北麓である。移恩二年
在鎌半にしモスリ、この我を辞した。
移恩 一年にして廣東沙面を辞す。
支那原の藍敷手は一髪の間にあり、香
港に逃れよと移檄が隣先のホルトキ、
から雪けた。希靴の北麓としし珍
[illegible]
[illegible]

山形の水野侯は遠州濱松から移封して
来た。移封を希ぜられて山形に来たのだ。
一種の改易である。米国には戸籍といふ
ものがないから移姓をしても移籍屋を
なす必要がない。移動警察は汽
車の中にある。汽車は分れ庭にして程限と
いふものがある。限度を超越した。人口の
稀薄と、稠密と、彼の著書は稀代の
業者である。切支は稀有（奇妙）の説
がある。稀覯の水属である。歳に似た
ぬ稚気満々たる溺である。稚気愛
すべき行時まで稚心が抜けない。蓬
髪垢面のブーチンの人夫。宛躯魅偉。
仁王の如き、伊藤房子が稚児となって尾宮
の歓迎行列に参加した、気骨稜々

冷い風が稜々と肌に迫つてしる。イングル氏
の気分稜々たる無言は今日でも。
眼底天皇の稜威。即ち天皇の御威光
尊嚴なる威儀、近来の著書で英
佛の稗史がある。事肌に小供業に辭し
得るやうに、面白く書いたものだ。暁年にし
て邯鄲之歩を二子に如かず。暁年にして
建築家が稗官となりて、著述する
なとは、若、農人が邯鄲の歩を学ばん
とし、二子の得ず、皈りて其国の歩を忘
れたといふ。誰が秋山の取に深々と来た
稗官となりて小説を書くなとは。過
激風のため一先稗官を呼れたる仰人が
百をもて算へられてゐる。民族は稗官
と同じ。大和村と称呼した、称和念伸、

秋山を称述したる其意味は隠忍自
重して自尊心を持てと云思考を
意味してゐる者、僕は彼を称揚し。
又称慕しゐる、称讃すべき功績。
獨原の勇敢なるに敬なる称讃に
便する、彼の功績は如何に称讃するも尚
足らない、彼の凡称、彼言行を称歎す
る。称嘆すべき功者、三十分の通釜して
も言ふない。鶴見君はシイルソン大に賞揚
する、止めどのないやうに称賛しゐる。反
よにフラバアを羣味通に鶯罠魂
諦した。が。今では如何に先見の服全し
かたかを後悔してゐる。何れは称讃だ
けではない、僕に自尊心を導起さし
て獨立して呉れいと云ことだ。彼味
様兵衛に抗とれて釣に出かけた。

時は満目緑蒼たる春の日で、穀見
体ろに来りて青い麦炬に猜をおつ
てゐる。雲雀は高い〳〵空に翔天し
ゐる。土屋の前には昨年が持越した
稲叢がある。鳩が四五羽屋根の下
に踞って穀々と鳴ひてゐる。千手室村に
の稲村が點在して。稲畦には鶴のやう
な鳥が首を延ばして四方を見廻して。
会場は稲麻竹葦の満気であるた、
三鍬の鋳地なし。天井は神代杉
に煙竹の稲子差を用えた稗を植め
た雑室であるた。稽査した上で田差する。
サラナンノ。稽留七年となるた。逗数
年。待言ふととは荒鹿無稽。
無稽をいふ管家文字だ

甲板先生の屋島には
漢文の稽古。
御土の野菜小執事に
の難に詣する。杜陵の
枕流の修司王不比先方
病傷かに之ほしと集
九清名嘩再来。紡は
君ゆく岸と生色蒲
稼如蒲々。春は稼
修敢しつる。稼集の
春稽紙を学りる。百
つ頃となる。春三百
親の修行に学ぶ兄妻
ル待且つなる。吉日
蒲天に海を。稼は
蒲々に修行に学ぶ兄妻
つ頃となる。春三百
親の修行に学ぶ兄妻

生年三年馬
責めの撃意。
指示不徹底
笑さぶる。
牙
責任
負傷しの連
絡のン
宣言処に慶直す
十慶此を飛ばす。
寿
の子宮を迷尼っ
生命は尊厳の
績善の卓には餓
種欧
なる之ま。
ヒン
擯
擯
擯

朝を辞して困所に幸尾へ稼穡
に餘愴なし、魅をした秋山。草
木森蔚として茂つてゐる。市、然たる穀
西に先はれたる緑葉は穠々として。
穠便にすまり、穠健なるこゝ章、
湖畔の樹木は穠緑として申天に
播つてゐる。執帯の鑿穠たる草
木。苦みて穢土に生ひ延びるまりは死
して浮土の塵となり考た。婆娑は
罪走りなるが、塵世なりだ。穢多
とは郭平民。空ゐに索尾して耳目
に觸るものは白雲と明け、

1930

青七〇〇冠

天皇
崩御
遷宮

葬送
死、

王キヨタイ
王キヨタイ
王キヨタイ

烏羽玉（ぬばたま）の宵、「烏羽玉の」を黒、夜、夢、暗などの枕詞
烏羽玉の闇の夜にあるごとく
烏（カラス）は黒し鷺は白し
烏賢き事、鷺愚かなること。
烏賢き事、鷺愚かなること。
烏之雌雄（からすのしゆう）
誰か烏の雌雄を知らん
烟（けむり）
烟（けむり）立つ
烟（けむり）
烟（けむり）
烟（けむり）

欣（キン）こゝす、やし、焚（エン）、ひば、ほのほ、

焚（ムキビ）火　地上ひもやす火

二箒火

焚（コンリヤウ）掠　つけ火して盗む、

焚書坑儒（ホウジユ）　産の姓皇帝、の経書を

やき学者を手にうつめにした故事、

無乃（むしろ）猶得無也。其無乃不可也乎、

無上は最上、無下は最下、

無妄（ムマウ）実然に起る事。有二無妄之福一。

無先（ムコン）頼る人のないこと

不虐二無先之民一

無住（ムヂユウ）の寺　住職のない寺、

無倉（ムネイ）已を忘れてゐる、

ムやしいこと、口苦しいこと、残念、

無事（ブジ）無事（ムヂ）無恵（ムヂ）故障がない、仕建、

無明（ムミヤウ）の暗（ムミヤウ）過去の煩悩で本心の明かなく

なること、無明（ムミヤウ）無明の暗（ムミヤウ）

無状（ムジヤウ）無義行がない、功状がない、

無恥（ムチ）なること、無法、言ふ状、

無垢（ムク）けがれない、衣服の上着下着と裏

表同一色の無地の仕立

無垢の指輪まじりのない

無妄 突然に起ること、有無妄之禍。

無吾 頼る人のないこと、 不虐無吾之民

無我 私心なし、我意なし 無我專心

無念 残念、口惜しい、くやしいこと

無事、無恙、無異。無妨、無雑、妄伏、

無明 過去の煩悩に本心の明かなくなること 无明。無明の暗

金無垢の指輪、

無根 すりどころがない 無恥 はぢしらぬ厚顔、

無情 慈悲情がない 生滅輪廻是諸無常、

心がない まごころがない

無聊 憂なりて寂まぬ。つれぐ、たいくつ

ことと 心のさびしいこと、無聊に苦む、

無量 仏常に多い。 無為 何事もしない

陳ぬ多くこと、 無干渉、

無慙 はぢなし。なきけちのいたはしい。 まごたらしい

無視 みくびる 無事 衆のない 無人

無智、無道、無極、無限、無銘の力、無名の士、

無漏 清淨無垢なる境涯

立二二

無愛の生活、無漏の人

無算は無数と同、無惨は無慙に同、

無釋は不仇流、無畫荒、とってしゝ取りつくせぬこと、

無麗は巨数、ざつ正、無麗三千人、

無稽でたらめ、まつかけん、荒唐無稽、

無像ゆゆりのほいもの死んでも弔ふものない、無頼（ブラリ）（漢）や蛇の

無彊は無窮に同、かぎらないさま、無

無雙の英雄、剛傑、無籍者、平せきのない者、

無辺、無断、無一切、無鉄砲

無花桔は木雪桔、無花果、果樹の一、

無所畏怖なるところがない、無仇帯又は

囲的無仇帯とも言ふ偉なる三十五の作り

無意識自分で気のつかぬこと、無声詩、書や畫、

無神論神の存在を否定する論

無機打は花樣打の反対、生活機能なきもの

無禮講、土下貴賤の障てなくして酒宴め

無二無三（一すぢにたゞまつすぐ）
ムまつすぐチヤラブウ
無用長物（役にたゝぬ邪魔もの）
ムダのきやう何もないとこと、
無何有郷（無何有の仙境）
無官大夫（官職のない人を冷笑した称）
無為徒食（なすこともなく遊んで暮すこと）
無位無官（官位または地位がなくまた官職のない人を冷笑した称）
無味乾燥（おもしろ味、興味、趣きのないこと）
無我夢中（我を忘れて一つのことに熱中すること）
無学文盲（学問のない人）
無一物（何も持たない貧乏）
無一文（一銭も持たない貧乏）
無政主義（国家や政府の存在を否認し個人の自由を主張する主義）
無期懲役（終身懲役）
無期徒刑（終身懲役）
無罪放免（罪がないとして釈放すること）
無用之用（役にたゝぬ様なものでも却つて役にたつこと）
無欲恬淡（欲がなくあつさりしてこだわりのないこと）
無病息災（病気をせずに健康なこと）
無為自然（人為を加えず自然のまゝにすること）
無縁仏（縁故者のない死者）
無縁墓（縁故者のない死者の墓）
無縁坊主（縁故者のない僧侶）
無縁寺（縁故者のない死者の墓）
無縁法界（縁故者のない死者の墓）
無縁三昧（縁故者のない死者の墓）
無縁塔（縁故者のない死者の墓）
無縁経（縁故者のない死者の墓）
無縁回向（縁故者のない死者の墓）
無縁供養（縁故者のない死者の墓）
無縁施餓鬼（縁故者のない死者の墓）
無縁寺院（縁故者のない死者の墓）
無縁仏（縁故者のない死者の墓

七ラレン　煙ヲモ
七ラレテ　立ツ事ヲ憚ケタ
煙　ノ如ク
煙ヲモ立ツ事ヲ憚ケタ

煙

煙霞療養所
煙、ばっぱらはし(風呂屋、
煙突
煙害
煙筒
煙突掃除夫
煙草
煙草屋
煙管
煙草入れ
煙草の美食すること
はらふ
もだえる
めんどう
わづらい、請
煙害訴訟、鉱毒事件煙害、移転強制
煙突掃除夫
煙害訴訟
煙筒
煙突掃除夫
煙草入れ
煙草屋
煙管
煙草の美食すること
うるさく
吸ひくせ
かかること
もだえる
わづらふ
煙害訴訟
煙害
煙害
煙害

おかやく、

炬火 ケイキ 光る眼、

炬る、てる、つきかげ、

かかやく、ひかる、

炬燵 炬煙 炬口 炬火 炬燵 燈台 燈火 燈明 燈心 燈油 燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

てる、おかやく、

ひかり、すきかげ

かかやく、ひかり、煌々は きらく

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

ともしび

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

ともしび、ひかり、

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

ともしび

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

燈台 燈火 燈明 燈心 燈油

照 明 電気燈等を利用する。
照 賢 神仏を照らしみる。
照 魔鏡 悪人の心底を照らし出す鏡。
照 應 あらかじめ用意すること。
照 顧 かえりみる。
照 會 問い合わせる。
照 破 見破る。
照 映 映し出す。
照 準 目標を定めること。
照 合 照らし合わせること。
照 明 光線を当てること。
照 射 光線を当てること。
照 査 照らし合わせて調べること。
照 覧 見ること。
照 尺 照準器。
照 灯 懐中電灯。
照 門 照準器。
照 度 光の強さ。
照 準 照尺。
照 星 照準器。
照 尺 照準器。
照 準 照尺。
照 星 照準器。
照 尺 照準器。
照 準 照尺。
照 星 照準器。
照 尺 照準器

熊の
虎の
猫の
鼠の
熊と虎の争ひ極まる
猫と鼠の
猫と鼠
猫と鼠
猫と鼠

熟柿（ジュクシ）　熟柿（ジュクシ）　熟柿（ジュクシ）

熟柿（ジュクシ）　熟柿（ジュクシ）

熟柿（ジュクシ）

熟柿（ジュクシ）

燈(トウ)ヲ 又(マタ)ハ 燈火(トウカ)ニ 向(ムカ)ヒ 讀(ヨ)ム 時(トキ)ハ 燈光(トウクワウ)ト 其(ソノ)ヒカリ、

燈火可親(トウカシンスベシ) 秋夜(シウヤ)ノ 長(ナガ)キヲ 以(モッテ)ナリ

燃(モヤ)ス 松脂(マツヤニ)ヲ 取(トリ)テ 燃(モヤ)ス、煙大(ケムリオホ)ニ 起(オコ)リ 黒(クロ)キ 物(モノ)ヲ 附(ツケ)テ 白(シロ)キ 壁(カベ)ヲ 汚(ヨゴ)ス、

燃松煙(ネンセウエン) 松脂(マツヤニ)ヲ 燃(モヤ)シテ 取(トル)ル 煙(ケムリ)ヲ 云(イフ)ナリ、

燃墨(ネンボク) 松脂(マツヤニ)ヲ 燃(モヤ)シテ 取(トル)ル 煙(ケムリ)ヲ 以(モッテ)テ 墨(スミ)ヲ 造(ツクル)ル 也(ナリ)、

燃燈(ネンテウ) 燈(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燭(ネンショク) 燭(ショク)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃火(ネンクワ) 火(ヒ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃灯(ネンテウ) 灯(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燈(ネンテウ) 燈(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燭(ネンショク) 燭(ショク)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃火(ネンクワ) 火(ヒ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃灯(ネンテウ) 灯(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燈(ネンテウ) 燈(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燭(ネンショク) 燭(ショク)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃火(ネンクワ) 火(ヒ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃灯(ネンテウ) 灯(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燈(ネンテウ) 燈(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燭(ネンショク) 燭(ショク)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃火(ネンクワ) 火(ヒ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃灯(ネンテウ) 灯(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燈(ネンテウ) 燈(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃燭(ネンショク) 燭(ショク)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃火(ネンクワ) 火(ヒ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燃灯(ネンテウ) 灯(トウ)ヲ 燃(モヤ)ス 也(ナリ)、

燕つばめ　燕居

燕（ツバメ）　つばめ、つばくろ、てい鳥。

燕（ツバメ）から　うちとけて睦（むつ）びき、心を通ずること。

燕（ツバメ）を飼（か）う　両宜（りょうぎ）をもとめる。

燕（ツバメ）の巣（す）　休息の部屋、燕居の意。

燕（ツバメ）の巣（す）今（いま）つまらぬ人（ひと）の喩（たとえ）へとして　燕雀何（えんじゃくなん）ぞ大鵬（たいほう）の志（こころざし）を知（し）らんや。

燕尾（えんび）服（ふく）　燕尾の如（ごと）き服（ふく）、前（まえ）かりの意（い）。

燕（ツバメ）来（き）　日（ひ）あたたかくなり、燕（つばめ）来（き）たる。

燭（しょく）　とぼしび、燭涙（しょくるい）、燭台（しょくだい）、燭奴（しょくど）、燭下（しょっか）、燭心（しょくしん）、燭花（しょっか）、燭（しょく）を剪（き）る。

燻（くん）　かわく、無味乾燥（むみかんそう）、燻煙（くんえん）、燻製（くんせい）、燻蒸（くんじょう）、燻焼（くんしょう）、燻製室（くんせいしつ）、燻煙器（くんえんき）、燻煙剤（くんえんざい）。

燔（はん）　やく、燔祭（はんさい）、燔肉（はんにく）、燔焼（はんしょう）、燔殺（はんさつ）。

燥（そう）　かわく、乾燥（かんそう）、燥渇（そうかつ）、燥土（そうど）、燥気（そうき）、燥熱（そうねつ）、燥湿（そうしつ）、燥病（そうびょう）、燥剤（そうざい）、燥性（そうせい）、燥果（そうか）、燥菜（そうさい）、燥物（そうぶつ）、燥粉（そうふん）、燥室（そうしつ）、燥場（そうじょう）、燥器（そうき）、燥法（そうほう）、燥薬（そうやく）、燥布（そうふ）、燥綿（そうめん）、燥繃帯（そうほうたい）、燥包帯（そうほうたい）、燥石膏（そうせっこう）、燥繃帯（そうほうたい）、燥包帯（そうほうたい）、燥石膏（そうせっこう）。

燥渇（そうかつ）　かわき、燥渇（そうかつ）を覚（おぼ）ゆ。

燥土（そうど）　かわきたる土（つち）。

燥気（そうき）　かわきたる気（き）。

燥熱（そうねつ）　かわきたる熱（ねつ）。

燥湿（そうしつ）　かわきたるとしめりたること。

燥病（そうびょう）　かわきたる病（やまい）。

燥剤（そうざい）　かわきたる薬剤（やくざい）。

燥性（そうせい）　かわきたる性（せい）。

燥果（そうか）　かわきたる果物（くだもの）。

燥菜（そうさい）　かわきたる菜（な）。

燥物（そうぶつ）　かわきたる物（もの）。

燥粉（そうふん）　かわきたる粉（こな）。

燥室（そうしつ）　かわきたる室（しつ）。

燥場（そうじょう）　かわきたる場（ば）。

燥器（そうき）　かわきたる器（うつわ）。

燥法（そうほう）　かわきたる法（ほう）。

燥薬（そうやく）　かわきたる薬（くすり）。

燥布（そうふ）　かわきたる布（ぬの）。

燥綿（そうめん）　かわきたる綿（わた）。

燥繃帯（そうほうたい）　かわきたる繃帯（ほうたい）。

燥包帯（そうほうたい）　かわきたる包帯（ほうたい）。

燥石膏（そうせっこう）　かわきたる石膏（せっこう）。

燥繃帯（そうほうたい）　かわきたる繃帯（ほうたい）。

燥包帯（そうほうたい）　かわきたる包帯（ほうたい）。

燥石膏（そうせっこう）　かわきたる石膏（せっこう）。

燥焼（そうしょう）　かわきやくこと。

燥殺（そうさつ）　かわきころすこと。

燥繃帯（そうほうたい）　かわきたる繃帯（ほうたい）。

燥包帯（そうほうたい）　かわきたる包帯（ほうたい）。

燥石膏（そうせっこう）　かわきたる石膏（せっこう）

憂国既世化ふるれ
ヂ
菅利
私
牙菅、化
戦争
梅
戦慶
ばく、
火
燻の頭、
燗
燗
燗

爬行をはじめる。
爬行
爬羅剔抉
爭ふ
爭奪
爭女
爭ひの
爭端
爭論、爭闘、
爭ひ
爭ふ
爭ひ
爭ひ
爭ひ

さっぱり、心地
爽快　爽やか
秋涼　気候さわやか
爽爽、訊爽、清爽、
爽快、時爽、
爽約　其の場合
今すぐの
今言、
今後、今度、
爽直、爽快
爽然、
爽朗
爽涼
爽秋
爽気
爽やか、
爽やか、
爽やか、

先月 いつ 弥月、
落葉先生、きれく 軽しとめ
さます
先生は来の間みは、かたとき、
ご病気 ちそうと
先言葉洗 一こと、二こと、言事句、
先生の 病気は 弥月、何日
先日 ご病気 御見舞 申上ず
わるの 影
書状 領土、 拝啓 春還、
書りする 梅も 色香
梅部の 落花を 惜む
土と人民を 軽蔑 還ず
かんばん 指揮 ねば
拝啓 秋冷之候 貴下 益々
御清祥 奉賀上候、 陳者 春還、
書、たゞち、たゞち、
第壱 寿還 基領、

貴人（トノガタ）、天晴（アッパレ）な、手柄（テガラ）、仲間（ナカマ）人（ニン）、手柄（テガラ）顔（ガオ）、手柄（テガラ）話（バナシ）、手柄（テガラ）立（タテ）、手柄（テガラ）次第（シダイ）、手柄（テガラ）成（ナリ）、大業（タイギョウ）の基（モト）、南京（ナンキン）虫（ムシ）、毎日（マイニチ）上（ノボ）下（リ）、牙城（ガジョウ）、牙営（ガエイ）を執（シ）る、牙営（ガエイ）を設（モウ）け、牙営（ガエイ）を置（オ）き、牙営（ガエイ）を撤（テッ）し、牙営（ガエイ）を移（ウツ）す、毎日（マイニチ）執牙（シツガ）、牙毒（ガドク）、書座（ショザ）計算（ケイサン）、牙保（キホ）証人（ショウニン）、結（ムス）ぼれ、牙（キバ）を折（オ）り、牙（キバ）を抜（ヌ）き、牙（キバ）を磨（ミガ）く、牙（キバ）を鳴（ナ）らす、牙（キバ）を噛（カ）む、牙（キバ）を剥（ム

牛後
おほるもの徐扈と
郵法三宿三雑
ゴバウ
牛爭 野菜の一種、
ギライ 牛のきらう
牛飲 酒をのむ
ヒンボウ
北牛のレン
北雑之最 そだてかう
牛飲馬食、
ボウ
牟なく 牛かな牟く
ジン
牡牸 牛物みつ、
牛 うしへん
牟 うしへん
牡 牛物みつ、
牸 牛物みつ、
牟 うしへん
牟 うしへん
牟 うしへん

づつる
とのゲ・おやじ
のゲ・おやじ
故は
おち仕用
寺おちの在様、世台の在様、
四季のおこの景気の様てる。
身也
おろ味のものうつ
おたち景色を
騒の世中、
おち詩は人の詩、おち詩、
世間のやうな
おち詩を醸す、
おち詩上の態、
おち賀長は精神更
おち賀上の態、秋に秋
おち賀上の態、秋に秋
おち賀上の態、秋に秋

牯めうし、特をうし、牛童こうし牛のこ、
とをイ 特別の
特殊 しゅたり
特徴 他に著る在様
書生 この図や品
特設電話、如何
特に 特に免除
牽引 夜のまもころ
牽牛 まだら牛
牽引 直に引き
牽引 ひきつけ自由に
牽制 させぬこと、
牽牛花 あさがほ
牽引 ひきつけること、
牽制 させぬこと、
牽牛花 あさがほ
摩利支天 武器の鉄
摩利支天 武器の鉄
摩擦 さい野獣
摩擦 さいのほか
摩擦 さいのほか
摩利支天 武器の鉄
摩擦 さい野獣
摩擦 さいのほか
摩擦 さいのほか
摩擦 さい野獣
摩擦 さいのほか
摩擦 さいのほか
摩擦 さいのほか

ケンビウ
犬羊　犬と羊、つまらぬもの。
ケンバ
犬馬　犬や馬の尋ねに自分のことをいふ
ケンエン
犬猿　犬と猿、仲の悪いこと。
ケンバのこころ
犬馬心　臣子の患考をつくす心を
ケンバの上馬
犬馬之齒　犬や馬に喩へていふ
この年齢をいふ。

狂人、狂句、狂犬、狂夫、狂言、狂気
きゃうキ
狂竟　非常な甚だ
きゃうぐう
狂妄　狂って道理に
けづれる
ケンきゃう
牽強附會　無理にこじつける。
きゃうランドウ
狂瀾怒濤　怒りさかまくなみ
きゃうゲンキ
狂言綺語　きゃうゲン　人情をひくやうに書い
キギヨ、てある言葉、小説の類、
きゃうサウ
狂躁　狂はしく騒がしい。
きゃうきゃう
狀況　様子　衣様　狀態　ありさま
様子、
コ
狐臭　わきが、脇臭、胡臭、
ヒヨウ
狐憑　きつねつき、狐疑　疑と憑とつて
憑かつかぬ、
コ
狐媚　巧みに媚びへつらふ　土四

狗盗、
狗盗ハ人ノ寝ノ間ニ盗ム者、
狗偸ハ人ノ寝ノ間ニ盗ム者ヲ云ニ非ス心ノ
狗馬之心（忠ナキ心ヲ云ヘリ論語）
狗ハ元帝ノ諱ニ触ルヽヲ以テ猫ト改ム
猟、
猟ハ山ニ入テ鳥獣ヲ捕ルヲ云
狩、
狩ハ冬ノ猟ヲ云
猟ハ春ノ猟ヲ云
猟ハ秋ノ猟ヲ云
猟ハ夏ノ猟ヲ云
猟ハ四時ノ猟ヲ通シテ云
猟ハ禽獣ヲ捕ルヲ云
猟ハ魚ヲ捕ルヲ云
猟ハ人ヲ捕ルヲ云
猟ハ人ヲ捕ルヲ云
猟ハ人

せまい　せばまる

狭い　窄い　狭量　ほがらかさ　度量が狭い、

窄める　窄まる　狭い　範囲の狭い　意味、

狭義　範囲を字義より狭く解釈すること、

寝る　寝かす　寝ころがす　寝ころぶ　寝ころがる　寝ころがす　寝ころがし　寝ころがし　寝ころがし

猛者（ますらを）…する事。
猛悪（もうあく）…強くて悪い事。
猛狒（もうひ）…猛狒（サイギ）
猜疑（さいぎ）…わたし、わたし、
猜物（さいぶつ）…人の才能をねたみ嫌う事。
猛獣（もうじゅう）…猛狒、狼、虎、豹、
猛烈（もうれつ）…はげしい事。
猛進（もうしん）…猛烈に、進む事。
猛勇（もうゆう）…猛烈に、勇ましい事。
猛将（もうしょう）…猛烈に、将の事。
猛火（もうか）…猛烈に、火の事。
猛風（もうふう）…猛烈に、風の事。
猛雨（もうう）…猛烈に、雨の事。
猛雷（もうらい）…猛烈に、雷の事。
猛暑（もうしょ）…猛烈に、暑い事。
猛寒（もうかん）…猛烈に、寒い事。
猛毒（もうどく）…猛烈に、毒の事。
猛病（もうびょう）…猛烈に、病の事。
猛死（もうし）…猛烈に、死ぬる事。
猛打（もうだ）…猛烈に、打つ事。
猛撃（もうげき）…猛烈に、撃つ事。
猛射（もうしゃ）…猛烈に、射る事。
猛突（もうとつ）…猛烈に、突く事。
猛刺（もうし）…猛烈に、刺す事。
猛斬（もうざん）…猛烈に、斬る事。
猛切（もうせつ）…猛烈に、切る事。
猛伐（もうばつ）…猛烈に、伐る事。
猛殺（もうさつ）…猛烈に、殺す事。
猛滅（もうめつ）…猛烈に、滅ぼす事。
猛亡（もうぼう）…猛烈に、亡ぼす事。
猛敗（もうはい）…猛烈に、敗る事。
猛負（もうまけ）…猛烈に、負ける事。
猛勝（もうしょう）…猛烈に、勝つ事。
猛捕（もうほ）…猛烈に、捕る事。
猛獲（もうかく）…猛烈に、獲る事。
猛得（もうとく）…猛烈に、得る事。
猛取（もうしゅ）…猛烈に、取る事。
猛奪（もうだつ）…猛烈に、奪う事。
猛盗（もうとう）…猛烈に、盗む事。
猛賊（もうぞく）…猛烈に、賊の事。
猛悪（もうあく）…猛烈に、悪い事。
猛善（もうぜん）…猛烈に、善い事。
猛美（もうび）…猛烈に、美しい事。
猛醜（もうしゅう）…猛烈に、醜い事。
猛汚（もうお）…猛烈に、汚い事。
猛清（もうせい）…猛烈に、清い事。
猛濁（もうだく）…猛烈に、濁る事。
猛静（もうせい）…猛烈に、静かな事。
猛動（もうどう）…猛烈に、動く事。
猛止（もうし）…猛烈に、止まる事。
猛行（もうこう）…猛烈に、行く事。
猛来（もうらい）…猛烈に、来る事。
猛帰（もうき）…猛烈に、帰る事。
猛去（もうきょ）…猛烈に、去る事。
猛入（もうにゅう）…猛烈に、入る事。
猛出（もうしゅつ）…猛烈に、出る事。
猛上（もうじょう）…猛烈に、上る事。
猛下（もうか）…猛烈に、下る事。
猛昇（もうしょう）…猛烈に、昇る事。
猛降（もうこう）…猛烈に、降る事。
猛飛（もうひ）…猛烈に、飛ぶ事。
猛走（もうそう）…猛烈に、走る事。
猛歩（もうほ）…猛烈に、歩く事。
猛泳（もうえい）…猛烈に、泳ぐ事。
猛潜（もうせん）…猛烈に、潜る事。
猛浮（もうふ）…猛烈に、浮く事。
猛沈（もうちん）…猛烈に、沈む事。
猛没（もうぼつ）…猛烈に、没する事。
猛現（もうげん）…猛烈に、現る事。
猛隠（もういん）…猛烈に、隠す事。
猛見（もうけん）…猛烈に、見る事。
猛聞（もうぶん）…猛烈に、聞く事。
猛知（もうち）…猛烈に、知る事。
猛無知（もうむち）…猛烈に、無知な事。
猛有知（もうゆうち）…猛烈に、有知な事。
猛有（もうゆう）…猛烈に、有る事。
猛無（もうむ）…猛烈に、無い事。
猛多（もうた）…猛烈に、多い事。
猛少（もうしょう）…猛烈に、少ない事。
猛大（もうだい）…猛烈に、大きい事。
猛小（もうしょう）…猛烈に、小さい事。
猛長（もうちょう）…猛烈に、長い事。
猛短（もうたん）…猛烈に、短い事。
猛広（もうこう）…猛烈に、広い事。
猛狭（もうきょう）…猛烈に、狭い事。
猛厚（もうこう）…猛烈に、厚い事。
猛薄（もうはく）…猛烈に、薄い事。
猛重（もうじゅう）…猛烈に、重い事。
猛軽（もうけい）…猛烈に、軽い事。
猛強（もうきょう）…猛烈に、強い事。
猛弱（もうじゃく）…猛烈に、弱い事。
猛速（もうそく）…猛烈に、速い事。
猛遅（もうち）…猛烈に、遅い事。
猛早（もうそう）…猛烈に、早い事。
猛晩（もうばん）…猛烈に、晩い事。
猛老（もうろう）…猛烈に、老いる事。
猛若（もうじゃく）…猛烈に、若い事。
猛幼（もうよう）…猛烈に、幼い事。
猛少年（もうしょうねん）…猛烈に、少年の事。
猛青年（もうせいねん）…猛烈に、青年の事。
猛壮年（もうそうねん）…猛烈に、壮年の事。
猛老年（もうろうねん）…猛烈に、老年の事。
猛男（もうだん）…猛烈に、男の事。
猛女（もうじょ）…猛烈に、女の事。
猛父（もうふ）…猛烈に、父の事。
猛母（もうぼ）…猛烈に、母の事。
猛兄（もうけい）…猛烈に、兄の事。
猛姉（もうし）…猛烈に、姉の事。
猛弟（もうてい）…猛烈に、弟の事。
猛妹（もうまい）…猛烈に、妹の事。
猛子（もうし）…猛烈に、子の事。
猛孫（もうそん）…猛烈に、孫の事。
猛祖父（もうそふ）…猛烈に、祖父の事。
猛祖母（もうそぼ）…猛烈に、祖母の事。
猛伯父（もうおじ）…猛烈に、伯父の事。
猛伯母（もうおば）…猛烈に、伯母の事。
猛叔父（もうおじ）…猛烈に、叔父の事。
猛叔母（もうおば）…猛烈に、叔母の事。
猛甥（もうせい）…猛烈に、甥の事。
猛姪（もうてつ）…猛烈に、姪の事。
猛従兄弟（もういとこ）…猛烈に、従兄弟の事。
猛従姉妹（もういとこ）…猛烈に、従姉妹の事。
猛夫（もうふ）…猛烈に、夫の事。
猛妻（もうさい）…猛烈に、妻の事。
猛主人（もうしゅじん）…猛烈に、主人の事。
猛家内（もうかない）…猛烈に、家内の事。
猛家族（もうかぞく）…猛烈に、家族の事。
猛親（もうしん）…猛烈に、親の事。
猛親戚（もうしんせき）…猛烈に、親戚の事。
猛友（もうゆう）…猛烈に、友の事。
猛知人（もうちじん）…猛烈に、知人の事。
猛他人（もうたにん）…猛烈に、他人の事。
猛隣人（もうりんじん）…猛烈に、隣人の事。
猛師（もうし）…猛烈に、師の事。
猛弟子（もうでし）…猛烈に、弟子の事。
猛生徒（もうせいと）…猛烈に、生徒の事。
猛学生（もうがくせい）…猛烈に、学生の事。
猛先生（もうせんせい）…猛烈に、先生の事。
猛医者（もうい）…猛烈に、医者の事。
猛看護婦（もうかんごふ）…猛烈に、看護婦の事。
猛役者（もうやくしゃ）…猛烈に、役者の事。
猛俳優（もうはいゆう）…猛烈に、俳優の事。
猛芸者（もうげいしゃ）…猛烈に、芸者の事。
猛遊女（もうゆうじょ）…猛烈に、遊女の事。
猛娼婦（もうしょうふ）…猛烈に、娼婦の事。
猛妓（もうぎ）…猛烈に、妓の事。
猛妾（もうしょう）…猛烈に、妾の事。
猛愛人（もうあいじん）…猛烈に、愛人の事。
猛情人（もうじょうじん）…猛烈に、情人の事。
猛恋人（もうこいびと）…猛烈に、恋人の事。
猛男子（もうだんし）…猛烈に、男子の事。
猛女子（もうじょし）…猛烈に、女子の事。
猛男性（もうだんせい）…猛烈に、男性の事。
猛女性（もうじょせい）…猛烈に、女性の事。
猛人（もうじん）…猛烈に、人の事。
猛人間（もうにんげん）…猛烈に、人間の事。
猛人類（もうじんるい）…猛烈に、人類の事。
猛人種（もうじんしゅ）…猛烈に、人種の事。
猛人民（もうじんみん）…猛烈に、人民の事。
猛国民（もうこくみん）…猛烈に、国民の事。
猛市民（もうしみん）…猛烈に、市民の事。
猛町民（もうちょうみん）…猛烈に、町民の事。
猛村民（もうそんみん）…猛烈に、村民の事。
猛住民（もうじゅうみん）…猛烈に、住民の事。
猛居民（もうきょみん）…猛烈に、居民の事。
猛国家（もうこっか）…猛烈に、国家の事。
猛都市（もうとし）…猛烈に、都市の事。
猛町（もうちょう）…猛烈に、町の事。
猛村（もうそん）…猛烈に、村の事。
猛家（もうか）…猛烈に、家の事。
猛家屋（もうかおく）…猛烈に、家屋の事。
猛建物（もうたてもの）…猛烈に、建物の事。
猛建築（もうけんちく）…猛烈に、建築の事。
猛工事（もうこうじ）…猛烈に、工事の事。
猛土木（もうどぼく）…猛烈に、土木の事。
猛道路（もうどうろ）…猛烈に、道路の事。
猛橋（もうきょう）…猛烈に、橋の事。
猛鉄道（もうてつどう）…猛烈に、鉄道の事。
猛汽車（もうきしゃ）…猛烈に、汽車の事。
猛電車（もうでんしゃ）…猛烈に、電車の事。
猛自動車（もうじどうしゃ）…猛烈に、自動車の事。
猛船（もうせん）…猛烈に、船の事。
猛飛行機（もうひこうき）…猛烈に、飛行機の事。
猛自転車（もうじてんしゃ）…猛烈に、自転車の事。
猛馬車（もうばしゃ）…猛烈に、馬車の事。
猛人力車（もうじんりきしゃ）…猛烈に、人力車の事。
猛荷車（もうにぐるま）…猛烈に、荷車の事。
猛車（もうしゃ）…猛烈に、車の事。
猛乗物（もうのりもの）…猛烈に、乗物の事。
猛道具（もうどうぐ）…猛烈に、道具の事。
猛器具（もうきぐ）…猛烈に、器具の事。
猛器械（もうきかい）…猛烈に、器械の事。
猛機械（もうきかい）…猛烈に、機械の事。
猛機関（もうきかん）…猛烈に、機関の事。
猛装置（もうそうち）…猛烈に、装置の事。
猛仕掛（もうしかけ）…猛烈に、仕掛の事。
猛仕組（もうしくみ）…猛烈に、仕組の事。
猛構造（もうこうぞう）…猛烈に、構造の事。
猛組織（もうそしき）…猛烈に、組織の事。
猛編成（もうへんせい）…猛烈に、編成の事。
猛構成（もうこうせい）…猛烈に、構成の事。
猛成立（もうせいりつ）…猛烈に、成立の事。
猛出来（もうしゅったい）…猛烈に、出来の事。
猛出来上（もうできあがり）…猛烈に、出来上の事。
猛出来上（もうできあがり）…猛烈に、出来上がる事。
猛出来上（もうできあがり）…猛烈に、出来上がった事。
猛出来上（もうできあがり）…猛烈に、出来上がらせる事。
猛出来上（もうできあがり）…猛烈に、出来上がらせた

ハイ　乱雑に在ること、淫猥に亘ること、
雑　猥　淫猥
猥褻のイセツ　みだらなこと、淫猥、
エン
猥ずる、猥さる、猥に、猥しい、
猥褻なる柔さの
猥さる、ますら、猥に、猥ら
きわどい
がはしい、猥がはを、
猥がはし、猥がはを、
猥本、猥雑、猥褻、猥談、
猥人、猥を慎む、
猥褻罪、猥褻文書、
猥褻物陳列、
猥褻行為、

南大門　南大門　南大門
南大門　南大門　南大門
南大門　南大門　南大門

獄る庭、獄吏、庭、獄る庭、
しいレンチョウのむいレ時
獄の身中思
レレ、フニンレンコンのレキ序
獄の蕾迅靭
獄丁、
獄吏
庭の獄人、獄
獄因
獄人、
獄門
獄る
獄吏、青年、
獄庭、
獄脊、
庭の獄人、獄
獄因
獄人、
獄門
獄る
獄吏、青年、
獄庭、
獄脊、
獄吏

（ドウソン）自分の
獲（ドル）事、自立（ドル）
事ということ。獲（ドル）美ましくすること。
（ドル）ひとり
獲（ドル）東（ドル）
（ドル）ぶんどる（ドル）ケち
獲（ドル）音の厲害、
獲（ドル）木（ドル）する木
（ドル）かん（ドル）当（ドル）
獲（ドル）ぶし（ドル）ましい（ドル）九本
獲（ドル）木（ドル）丹、
獲（ドル）眼（ドル）前、
（ドル）おちの音（ドル）
（ドル）ドリフレン（ドル）
獲（ドル）当（ドル）獲（ドル）事、
（ドル）ドリフレン（ドル）
獲（ドル）当自（ドル）
（ドル）ドリフレン（ドル）
（ドル）ドリフレン（ドル）
（ドル）ドリフレン

獣 猿 犬 馬 牛 羊 鹿 猪 狐 狸 大猿、猩々、猴、猫、狗、鼠、
さるおほざる、猩々、猴、猫、狗、鼠、
獼猴 大猿、 (くろうと)玄人 (ゲニン)玄人 (ゲニン)玄人 (ゲニン

率直（ソツヲヨラ）　すりの　まはまで直、率肰（ソツゼン）は偶肰。

率再（ソツジ）　ちは左だ　しきさま、戻肰　率[illegible]ながら

率土之濱（ソツトのヒン）　陸地の擴げる限り　如斯なるはしくしても、

禾国大陸は率土之濱まで擴げても

玉章（ギヨクヤウ）、玉札（ギヨクサツ）、仕人書簡の敬称、

玉山（ギヨクサン）、美（かほ）はしい　玉山（かたち）の　玉山頽（ギヨクサンくる）とも書く

美しい姿の人の倆に辞のたさま、

玉成（ギヨクセイ）　免庫して　大人形となる　玉人（ギヨクヒン）　玉で作れ　敬

玉肌（ギヨクキ）、玉歩（ギヨクホ）、玉杯（ギヨクハイ）、玉書（ギヨクシヨ）　仙人の書簡

玉免（ギヨクトヽ）、玉蟾（ギヨクセン）、玉盤（ギヨクバン）、月の異名、

玉座、玉冠、玉音、玉葉（ギヨクヨウ）、玉體

玉蛋（ギヨクサイ）、以上は天皇に一天聯せる敬称、

玉碎（ギヨクサイ）せられた、名誉の花、瓦（グワビン）屋の外、

大丈夫寧可ニ玉碎ト不能ニ瓦全ト、

瓦（グワビン）全　瓦となって全いということ、つまらぬものとなって生を保つにいふ。

寧可ニ玉碎ト、可能瓦全。

王室　王位なる、七官の家、宝、所

ギョクチョウ　王で宝都尼、雅原の陣屋、藝娼妓の王帳、

王帳　とばり、

王祠、人のたつた謀歌の教株

ギョクサイ

王摧　すくれた人の死せつふ、

ギョクキドウ　王も尼も同若に失れた里と、すぐ先人も悪は人もまじつてゐる喩、

王尼同楽

ギョクセキとしいやし　王も尼も同しに焼し、善にも悪と共に善にかかるの実や

王尼倶焚

ギョクセキコンカフ　女京の悪笑のせし

王尼混淆　おいものも悪しいものも

ギョクサフコンフン　ごうちやまぜ

王屑紛紛　悪かちなし降る

ロウ　天子のよい政治に成りて　さま、

王化　人民がよくたまりて善い花するといふ、

ロウサ　帝王の神佐、王者師、帝王の師

王佐

ロウカイ　王の宣めた政治、国法、

王綱

ヒキラ　臣は自分一身のことを考へずに

王臣匪躬　君の為に盡す、

ヒキラ　王臣賽賽、匪躬之故

匪躬之節　見て捨てて事につくす、

忠義一生の心に天に

五四七

匪は、あらず

躬は、自分

五四七

主政復古 武門の政事は天子の政事に如へる、

玕、玉に次ぐ一種の美石、琅玕のめし、

玖、玉に次ぐ黒色の美石、

玩味、吟味し味ふ。玩弄する、もてあそぶ、おもちゃにする、

玩索 よく考へて其意義を求める、玩索有得焉、

玫瑰は火赤珠、赤色の美石、

珍 ヲ珎 めづらし、又奇異なる事の、甘美なる食物、

珍事、椿葉、意外の出来事、

珍味、珍羞、珍饌、珍膳、珍肴、

次奇なし、めづらしくうまい食物、

珍蓮 遠国珍羞本次舊二羞宗廟、珍品、珍事、珍宝、珍書。

珍居、珍襲は、大事にしまつておく、

妙珍、不思ぎにめづらし、縟珍、ーちん、

玲琅 玉又は金属数のなる声、

玲瓏は前條に同じ、眼がなるさま、月玲瓏、

玻璃 七宝の一 水晶の類、ビードロ、玉 瑤とも書く

瑤珀 松脂などの地中に埋没して其性質を変じたるもの、玉にして鹿の形を作りたるもの、

珈琲 婦人の頭髪にさす珠玉の挙ぎり、昔は、其珠玉の多少にすると尊卑を分けたりとぶ、コーヒーにも用ゆ

珊珊 サンサン 臍におびたる玉の鳴る声、珠瑯 サンテ 米突、

眞珠 シンジュ 円形の玉の肌をなすもの、念珠 ネンジュ 珠玉を手にしてぶ、

珠玉 シュギョク 尊いもの、たま、詩成珠玉在揮毫、

珠璫 シュタウ 玉の耳飾り、珠箔 シュハク たまのすだれ、玉箔、玉簾、

珠数 シュザン すず、念珠、数珠、珠鷹 シュヨウ 玉人の靴、

珠算 シュサン たまぎん、算盤に計算する、

珠玉 ハンテン 朝廷より一般の公民に一定の広にまりて田地を分ち過へたること、孝徳天皇の御代に行はれたり、

班次 ハンシ 位の順序、班列 ハンレツ ともいふ、

班長 ハンチヤウ 一つの組長、班師 ハンシ 軍を引きゝること すること、

瓔珞 ヨウラク 首挙りの珠、珥 みみかざり

珥 ジ ひかさ、珥 ジ は口に珥 ユウラン くちさきに くちぶり 土佐ん、

人のまんなかに
生命を保つはたらき、
命を外部へ、運命と
運ぼうとするはたらき、
財産をうまく
招き寄せること、
想像力、
実際にする
推論する
備える法、
吉凶を占う
むりやたいに
する、無理な
枝ぎ
玩具
盆栽の松の木の根
柱たちの松の木の根
燈台
現在な
現在な男、意に満たぬ

財産
まだ実際に行
いと思うこと、最上完全であると言う、
理想
理論
自然の法、
自然の
自然の存在、
自然の姿、
命
運命
自然の
自然の
自然の

現象、喜びの感覚にひたること
現肚 ありのまま、現象は写真の
ごとく、いまの世にあること
現人神 天皇を称し奉ること
現行犯 現に行なわれ
現ナマ 今行なわれ、
現世利益 現世の利益
現代思想 現代は科学の
現世苦悩 現世に苦悩
現象即実在 現象即実在
現代語 現代語
現金 現金
現住所 現住所
現場 現場
現物 現物
現在 現在
現実 現実
現象 現象
現代 現代
現 現
現 現
現 現

キンシツの琴の音のしみ、家
琴之巣　書の
庭梅ニ鶯　詩会、せに鼓ニ琴琵
琵琶ニ尺八　詩気、詩験、五七言
祥、

皆老い醜、こは、素朴、徴、
古者天下高民、私慾、稀、
目ざすは、天の之意也
すべて仁政ニ反
下すこと
五七言ニ見よ、

稀感、希慮、稀
古者天下高民、私慾、稀慮靜主、
まかまして
目ざすは、天の之意也
稀国
我日本国ニ於ル、

みつばのしに
稀穂国
宝章　勲章の一つ、
ハう　ふう　等ニ分つ、

玉のひび、露、通、白光ニ
玉のきず、欠点
稀
稀ニ注ぐ　メ　稀ニ
玉ニ於ける
すべての文章、
重の意、
重ね
重、

玉ニ於ける
すべての文章、
重の意、
重ね
重、

稀
玉のきず
欠点
稀

玉ハ磨かずんば
玉ハ琢かずんば
連ねる
連ね
連、

子曰何也、白珪之玷、尚可磨也、斯言之玷、不可為也、
詩経、大雅、抑之篇、

老子曰、重言ハ信ならず、
老子曰、重言ハ信ならず、

玉ハ琢

葉琥は一ねん美石
琥がこうか
琥仏宗
琥仏サレミツ
琥仏余
琥仏三廻
こと、
高野山の宝
宗の世親の両先
主観宗蔵の
琥仏余で、甚教義を更にする
ため、琥仏余で、甚教義を更にする
ため、琥仏余で、甚教義を更にする
ため、

ナ尾は碌に言ず、みがく、玉の色の艸ゃ
王蓮珠は美こゝ玉、璎珠、
ばうぎょく
莫玉、
ぎょくまつこと
璞玉と煉王と
琢玉陣充質横にして美しき珠、
名と璋
なづく
珽、
璋性、
なづく
璋大さ
たい形、
日海、四海、海内の表、
三三、
璋瑞
しるし
璋信
まこと
璋端
はし
璋頭
ほとり
璋満
みち
璋続
つゞく
璋常
つね
璋壊
やぶる
璋壁
たま
璋玉
たま
璋玉
たま
璋玉

瓊筵（ケイト）
美しい席。
玉のやうに美しい筵、
瓊筵（ケイト）玉の饌（ケイト）
瓊英（ケイエイ）
玉のやうに美しい花、
瓊英（ケイエイ）瓊華（ケイカ）
梅花の異名。
玉の相（あひ）う槌（つち）
きらきらまばゆい玉の相うつ槌とは、
玉を一つなげる擲杖（なげうつ）
首飾（くびかざり）の玉、
瓊珠（ケイシュ）
玉のやうな珠、
瓊珠（ケイシュ）
玉のやうな珠、
瓊珠（ケイシュ）
玉のやうな珠

花
ひとつかみの
香、

文もん、五匁、
安産神
今を鉦正するの義、

車輪
頼文中
詞字
観音
尾
尾とまると念じて
すこし宙を左へ
まわるものと
こゝろえるなり、主尾のみ、
物能尾金、五匁、
尾
解
尾のやうに
仕立る、代用尾、
尾
棟
(はふと)しと、
ライメー士の
尾
雪嶋
尾千倍
尾
尾百倍
尾の百倍
尾千倍
尾の十倍
尾
我国の三分之一尾
尾の十分の一、
尾の百分の一
尾の千分の一、
稲子
稲
稲子
稲
稲子
稲

甘瞼（カンケン）、甘酸（カンサン）、甘苦（カンク）、甘辛（カンシン）、甘露（カンロ）、甘藷（カンショ）、甘蔗（カンシャ）、甘蕉（カンショウ）、甘藍（カンラン）、甘草（カンソウ）、甘味（カンミ）、甘美（カンビ）、甘言（カンゲン）、甘雨（カンウ）、甘露（カンロ）、甘味（カンミ）、甘蔗（カンシャ）、甘藷（カンショ

甘菜（テンサイ）　さたう大根、　蔓（ダイ）　うてな、

生（セイ）　こしやう、いく、うまる、あふ、はゆ、うひしい、

生人（セイジン）　人民、生民、祓めて達した人、

生口（セイコウ）　とりこ、いけどり、捕虜、牛馬の類、

生年（セイネン）　こやう、ネン　生れ年、いきてゐるあひだ　寿命、

生存（セイソン）　生き　なかへる、生息　事が生成（セイセイ）すれ　立来るいみ、

生色（セイシヨク）　いきゞく　其生色也、顔色、顔色に現はゆること、

生死（セイシ）　死の境、死ぬと　あらはれ所、

生伴（いきぼとけ）　差智識の高僧でいふ、

生別（セイヘイ）　死別、いきわかれと、死にわかれ、

生辰（セイシン）　誕生は、生兵（セイヘイ）　なふての兵、新兵、

生来（セイライ）　うまれつき、生れて此方、

生長は成長、

生前（セイゼン）　しきて死る、うち、生前相属且衝杯（カンパイ）、

生柄（セイホイ）　生得、生屋（セイキン）、生槍（セイキン）、生縛（セイバク）、

生孩（セイカイ）　みどりな、幸子、生遊（セイシ）　今年生れた子、

生活(くらし)
生計(たつき)
生業(なりわい)
生涯(しょうがい)
生命(いのち)
生死(しょうし)
生気(いきいき)
生命(いのち)
生硬(なまかた)
生殺(いきころし)
生活(くらし)
生涯(しょうがい)
生活(くらし)
生涯(しょうがい)
生存(いきのこり)
生存競争(いきのこりきょうそう)
生存(いきのこり)
生産(うみだす)
生産(うみだす)
生産(うみだす

用虎行長　能を、動かせ、拵がれば、
　　りそして、磨なる基圓迅れ、
　　五五ハ　　廬の言宣なると甲行長長、
　　論決　　用之則行、舍之則長、

ミラドラ　両側にかきを
角道　もうけ古道跡、
ロリ　角の名　ネイ　甫はじめ、
角　彈先生、　甯　はしめて、
デンプ　デンプ
田夫　みは田矢、百性、農夫、野人、
たつりのはぎしり　力の及ばぬ者が
田作の遊車　徒らん賣現するごと、
デンシヤ　デンシヤ　デンシヤ
田里、田虎、田氣、田野、田園、
デンシン　田虎体土の果、穴栗の竹体土らし、
田紳、　して、とこかに田虎とさい所ある、
たにし　　たつ
田蝶　北田に携　　蘆辺の田雄ツル、
　　む具の一種、
デンシヤカン　　野人、
田虎漢　みなりをとこ、
デンエントレ　　都市のわつらはしをしことを
田園都市　　さけし辞かな郊外に建設
　　するや都市
イウ　　自得のさま、　猶猶、
神田　　伸ばす跡離の名、
ユジユ　　平里　十言の演説
由間　　ゆゆり　ちなみ、
由縁　　惟概悪　二南歸　路遐無申縁、
　　也ちる

男女一般ニ平等ヲ主張スルヲ以テ目的トシ、社会ニ男女ノ権利ヲ同一ニスルヲ見ル。

男女同権、ジェンダーフリー、男尊女卑ノ弊、社会ニ存スル限リ、社会ニ無産ノ民アル限リ、

貴族、貴族ノ女、貴族ノ男、貴族ノ子供ハ、

貴族ノ子供ハ、貴族ノ女ノ子ハ、貴族ノ男ノ子

岸（ガン）、ほとり、そむく、はなれる、かぎり、芒手（バラテ）、おもう、或は或る、せ、

手、ク、かすかな疑問、かな感歎の辞、嘉、祭の辞を弾ずる意語、尾（ビ）屋（オク）る（ル）、尾（ビ）る（ル）、宇宙、芒手、芒手、ニク、雄手、ニク、

時迄（まで）、汨（ベキ）羅（ラ）をも、ちぼんなる、報道のこと、

時（ジ）間（カン）、日（ニチ）時（ジ）、曜（ヨウ）日（ビ）、昨日、昨夜、昨晩、昨年、昨今、昨春、昨秋、昨冬、昨朝、昨夕、昨夜、昨暁、昨月、昨日

略は異と心書て
略田
りゃくでん
収、おさめ取、採
りゃくさい
取、おさめ取、採
略奪
りゃくだつ
奪、うばう
略式
りゃくしき
略述
りゃくじゅつ
略す、略
略字
りゃくじ
略する、ことごとく、
死なまで、終生
生を終るまで、
生涯
しょうがい
生は生る、涯は
農夫、毎日
田畑
でんぱた
畑のうね、
ことすり、ことすり
ちがい
ちがい
ちがい

異存（イゾン）　ちがった考、異見（イケン）

異邦（イホウ）は異国異域、異見（イケン）は異見（イケン）みは異見、

異常（イジョウ）　普通（フツウ）と変った、

異腹（イフク）の子。　異（イ）って、異説珍説。

異端（イタン）者　異端（イタン）と信じたもの、信者を異（イ）

異国（イコク）の鬼　他の国の死体を

異口同音（イクドウオン）　二人の言葉が

異国語（イコクゴ）　外国の風俗や時勢をとり

異国趣味（イコクシュミ）　外国のような一種の気分、

異教（イキョウ）　基督（キリスト）教、仏教、

異変（イヘン）　普通と変った事。

異人（イジン）　外国人。

異様（イヨウ）　変った様子。

異議（イギ）　異った意見。

異動（イドウ）　変ること。

異性（イセイ）　男女の性質。

異色（イショク）　変った色。

異常（イジョウ）　変った様子。

異国（イコク）　外国

畫家、畫工
彩色を施ー
畫紙
畫架
畫筆、彩筆、
畫稿
畫案
畫凳
畫像
畫布
畫幅
畫題
畫題
畫題

焉（エン）　とうしてこれ、これより、ここに、五二一

哉（サイ）　一六大　かな、動定、や疑問、

和　二九、か、や、疑問の辞

也（さ）　三二、なり、たり、や、か、かな、感歎詞、ちあ、

なれはなり、まだ、説明の時ん用ね、

當代（タウダイ）　いまの世、当世、現世、

當惑（タウワク）　さしせまりて困る。

當事（タウキヨウ）　其事にあたりて実際を取扱ふこと

當人（タウヒン）　其人、當事者達、傍観者、審、

當面（タウメン）　其はちひ、目下、さし當つて

當競（タウカイ）　其かかり、其うけもち、

當選（タウセン）　えらぬ、えらぬ、えらぬ、

當籠（タウセン）　じどいあたる、

當跳（タウヤク）　みちの要地にあたること。

當事（タウイ）　其事を司ること、其人、

當意（タウイ）　其に應じた早速の様

當即（タウヤク）　ちゃ、ちゃ、

轉（ヒ）　ちゃ、ちゃ、

轉（ヒ）　ちゃ、ちゃ、

奮（ヒ）　ふるふ、

戴（タイ）　いただし

畿内（キナイ）　天子の都に近い土地、我国にては

山城、大和、摂津、河内、和泉、

壘（ルイ）　とりて、

疊（ジヨウ）　かさなる、たたみ、

ちそる、たたむ、

畳表（たたみおもて）
まず昔（むかし）
昔（むかし）の小（ちい）さい頃（ころ）は、
昔（むかし）の日（ひ）、
昔（むかし）の人（ひと）
昔（むかし）の通（とお）り
昔（むかし）の事（こと）
昔（むかし）の薄（うす）い畳（たたみ）
昔（むかし）の畳（たたみ）
昔（むかし）の畳（たたみ）
昔（むかし）の

疎ソ　疎ソ　疎ソ　

疑問（ぎもん）　意義（いぎ）

疑問（ぎもん）　うたがひの

疑問（ぎもん）　かたまり、

メンやまひ　やまひ（ほ）

やまひ（ほ）ちんもく、

病（やまひ）　病（やまひ）

せん矢（や）　病気（びょうき）の名（な）

病（やまひ）　病（やまひ）

疫病（えきびょう）　病（やまひ）

やまし、　悪（わる）いはやりやまひ、

疫病（えきびょう）　疫痢（えきり）に同（おな）じ。

病（やまひ）　病（やまひ）

ぼ、　疫（えき）、赤痢（せきり）、疫痢（えきり）、疱瘡（ほうそう）、

疫病（えきびょう）　病（やまひ）

やまひ（ほ）　疫病（えきびょう）

やまひ（ほ）　疫病（えきびょう）

やまひ（ほ）　疫病（えきびょう

大田まだ、ほやで言ふ、ついてゐる新妹
雖在鹿二ま書痛意連色
シッゲンキョ シカノ
疾言遽色
シッ
疾走、はやく言ふ。
疾視 目をとめてにらむ
みつめる、
疾歩 はやあるき
疾病 大病、
疾苦 苦しみなやむ
とも呼ぶ
疾 ヒ 疫 ヒ 疼 ヒ 痘 ヒ 痛 ヒ 病 ヒ 痒 ヒ 瘍 ヒ 癰 ヒ 瘢 ヒ 癩 ヒ 癘 ヒ 癌 ヒ 癇 ヒ 癆 ヒ 癒 ヒ 癖 ヒ 癡 ヒ 癲 ヒ 癪 ヒ 癬 ヒ 癭 ヒ 癜 ヒ 癤 ヒ 癧 ヒ 癨

痘 不痘ひとの黄疸一種の病
ゲンダ ひつり 横痘 カサ
痘アカ 痘やまひ 十児ふたつなるさる痂、
痘 きずぎずて、痘と、きまりまと、
痘 痘ニ斜なると女右、痘ニ
痘 あと、痘迹 タらコン
痘 痘ゆし、 痘痂、 ヲ痘ヲきす
痘 痘 痘

痛（つう）　痛（つう）　痛（つう）　痛（つう）　楚（そ）

痛（つう）　痛（つう）　痛（つう）　痛（つう）　歎（たん）

痛（つう）　痛（つう）　憤（ふん）　慨（がい）　悲（ひ）

痛（つう）　痛（つう）　事（こと）

萬（ばん）　苦（く）　悪（あく）　痛（つう）　痛（つう）

萬（ばん）　痛（つう）　撃（げき）　腹（ふく）　痛（つう）

萬（ばん）　痛（つう）　腹（ふく）　痛（つう）　痛（つう）

痛（つう）　痛（つう）　痛（つう

痲痺（まひ）　痲痺（まひ）　痲痺（まひ）　痲痺（まひ）　痲痺（まひ）

痘痕（きず、きりきず、擦り
戦争などで受けた校庭
般に、きずあと、今村の顔に生々とした痘痕
痕跡、きずあと、やけど、おもかげ
痘痕、おこり、おでき、
座（ニイ）
うつ伏、七転八倒す、七転は産、
温（ユウ）
えやみ、もがき、
瘴（シャウ）癘（レイ）
山やまいの毒気、
瘴癘（ショウレイ）
くにの元と瘴癘病、瘴気の元、瘴毒
瘴毒（ショウドク）
瘴癘の悪気、瘴毒の地、瘴毒の国、
瘴癘（ショウレイ）
瘴癘は一説にはこりと読む、
瘴気（ショウキ）
瘴気のうみは水
瘴気（ショウキ）
瘴気のまい
瘴気（ショウキ）
瘴毒（ショウドク）
瘴気の病、瘴毒にそまる、
瘴気（ショウキ）
瘴気のまい
瘴気（ショウキ

癈兵　不具になった兵、疲兵、
癆疾　なまけ病、不具者となった病者、
癌腫　がんのできもの、
瘸　あしなえ、
瘸者　あしなえ者、
瘸馬　あしなえ馬、
瘸牛　あしなえ牛、
瘸犬　あしなえ犬、
瘸鼠　あしなえ鼠、
瘸蛙　あしなえ蛙、
瘸蛇　あしなえ蛇、
瘸魚　あしなえ魚、
瘸鳥　あしなえ鳥、
瘸虫　あしなえ虫、
瘸蟹　あしなえ蟹、
瘸蝦　あしなえ蝦、
瘸蝶　あしなえ蝶、
瘸蜂　あしなえ蜂、
瘸蜻蛉　あしなえ蜻蛉、
瘸蜘蛛　あしなえ蜘蛛、
瘸蚯蚓　あしなえ蚯蚓、
瘸蛭　あしなえ蛭、
瘸蛞蝓　あしなえ蛞蝓、
瘸蝸牛　あしなえ蝸牛、
瘸蛤　あしなえ蛤、
瘸蜆　あしなえ蜆、
瘸蜊　あしなえ蜊、
瘸蠣　あしなえ蠣、
瘸蛸　あしなえ蛸、
瘸烏賊　あしなえ烏賊、
瘸海鼠　あしなえ海鼠、
瘸海月　あしなえ海月、
瘸海老　あしなえ海老、
瘸蟹　あしなえ蟹、
瘸蝦蛄　あしなえ蝦蛄、
瘸蝦　あしなえ蝦、
瘸鯛　あしなえ鯛、
瘸鰯　あしなえ鰯、
瘸鰹　あしなえ鰹、
瘸鰤　あしなえ鰤、
瘸鮪　あしなえ鮪、
瘸鯖　あしなえ鯖、
瘸鰺　あしなえ鰺、
瘸鰈　あしなえ鰈、
瘸鮫　あしなえ鮫、
瘸鱶　あしなえ鱶、
瘸鰐　あしなえ鰐、
瘸鯨　あしなえ鯨、
瘸鯱　あしなえ鯱、
瘸鯢　あしなえ鯢、
瘸鰻　あしなえ鰻、
瘸鰌　あしなえ鰌、
瘸鯰　あしなえ鯰、
瘸鮒　あしなえ鮒、
瘸鯉　あしなえ鯉

ハツ ひらく、を むく
キ
天 みつめる、手のひらは 発 みな 十
ハツ ハツ
発心 おもむく 北、北斗は 天、月 経、
ハツカン
発願 たつ、急ぐ 菩提心を おこす 仏に 誓
ハツガン
発利 世に ひろめる、発 兄弟 書物を 売り 広める、
ハツ
発句 連歌の 上の句、五七五の三句十七字、俳句
ハツク
発句 俳句の 始まり、
ハツク
発汗 おもに 熱を 出す、
ハツカン
発行 書物を 出版 する、
ハツコウ
発育 すくすく 育つ こと、
ハツイク
発育 すくすく 育つ こと、
ハツイク
発育 すくすく 育つ こと、
ハツイク

発揮　こころき通す、一
発発　のちやそさま、
らうそう　美のまきくとそ
発言　読（よんな）
発散　ちる、ちう、
発散　ちし、
発揮　商を先ることキーー
発揮　ものみのやく、
発揮　しきどうりを
発揮　発する、
発揮　声をやす、
発揮　流すあくる
発揮　ぐれをかける、
発揮　なるほう
発揮　ハンドうき
発揮　仕入最初のうこ
発揮　発揮、
発揮　発揮機、
発揮　おこすき
発揮　発揮耳鼻咽喉
発揮　発揮工業の
発揮　発揮
発揮　発揮
発揮　発揮

五七四

登記（トウキ）、帳簿にかきのせる、土地建物などの財産所在掘をおもて向に書きのせる住方

登高（トウカウ）、書き丘や山にのぼる、登第は試験に及ぶ

登祇（トウゲンレイ）、天子の御宿につかせられること、登極と同じ

登舩禮（トウシウセン）、御舩に移意を表するために下士平が手板に集り、斉が移禮

登龍（トウ）、黄河の上流にある龍門を鯉が登りたとへ、又名士に謁するに左といふ、

竟（トウ）、こーかけ、

自丁（ハクテイ）、身分のないもの、

自丁（ハクチヨウ）、かたき祇のつけた白い布の狩衣、神事などに於をかつて人夫、

登殿（トウカ）、天皇の前御をしや、

白人（ハクジン）、白色人種に同じ、遠世の下等のなるもの、白文（ハクブン）、白り印らない漢文

白刃（ハクジン）、しらは、白刃をぬきみ、白白（ハクハク）、何きらかなさま、

白衣（ハクイ）、しろいきもの、本帛の衣を持、庶人、平民、びやくえ、無位、急官の身分、

白波（ハクハ）、しろく見へるは、盗賊の異名、ぬす人、後漢の孝靈帝の時、黄巾の賊、財白波に籠りしまり、其白帝のこと、訓読して盗賊の異名とす、

白大（ハクヾヤウ）、くちがき、口書、自分官に罪を申出ること、自分自分の危かりしることをいふ、

白虎（ビヤコ）、四神の一、西をまもる中、宣賛の異名

白屋　貧家、　白宮　白亜館（ハクアカン）

白雨（ハクウ）　にはかあめ、ゆふだち、　白雨（ハクウ）脚（キャク）　白雨の脚（キャク）の如く（ごとく）

白雨（ハクウ）　俗（ぞく）にはかにふりだすものの、　白雨（ハクウ）の下（した）　白雨（ハクウ）の去（さ）るを待（まつ）

白眼（ハクガン）　兄弟中（きょうだいちゅう）善悪（よしあし）あるとき、　白眼（ハクガン）視（し）　白眼（ハクガン）にらむ

白眼（ハクガン）　すると、白（しろ）こまかに冷笑（れいしょう）するやうな、

白鳥（ハクチョウ）　こふ、一ちどうに、白い（しろい）羽（はね）　白鳥（ハクチョウ）の歌（うた）

白鳥（ハクチョウ）の歌（うた）　白梅（ハクバイ）　白梅（ハクバイ）は五（ご）の色（いろ）の白（しろ）いこと、

白髪（ハクハツ）　しらが、　白髪（ハクハツ）三千丈（さんぜんじょう）　白髪（ハクハツ）から手（て）で鼠（ねずみ）小、

白髪（ハクハツ）　ふるふ、なかば白（しろ）となること、　白髪（ハクハツ）三千丈（さんぜんじょう）

白髪（ハクハツ）　二十四歳（にじゅうよんさい）の一、春（はる）　白髪（ハクハツ）一（いち）ぬう、

白髪（ハクハツ）　しらが、　白髪（ハクハツ）三千丈（さんぜんじょう）

白鼠（ハクソ）　しろねずみ　白鼠（ハクソ）の尾（お）は五（ご）　白鼠（ハクソ）の尾（お）は五（ご）

白晝（ハクチュウ）　ひるま、　白晝（ハクチュウ）堂々（どうどう）と　白晝（ハクチュウ）

白刃（ハクジン）　しらは、　白刃（ハクジン）きらめく　白刃（ハクジン）の舞（まい）、舞（まい）

白髯（ハクゼン）　しらひげ、　白髯（ハクゼン）の翁（おきな）、　白髯（ハクゼン）

白面（ハクメン）　しろかほ、　白面（ハクメン）の書生（しょせい）　白面（ハクメン）の書生（しょせい）

白面（ハクメン）　年若（としわか）く　白面（ハクメン）の書生（しょせい）

白面書生（ハクメンショセイ）　年若（としわか）く　白面（ハクメン）の書生（しょせい）

白面郎（ハクメンロウ）　しらかほの人（ひと）　白面郎（ハクメンロウ）

白毛（ハクモウ）　しらが、　白毛（ハクモウ）赤面（せきめん）　白毛（ハクモウ）赤面（せきめん）

白毛赤面（ハクモウセキメン）　白毛（ハクモウ）赤面（せきめん）の人（ひと）

白毛赤面（ハクモウセキメン）　白毛（ハクモウ）赤面（せきめん）の人（ひと）

白羽（ハクウ）の矢（や）　天人（てんにん）の死（し）を　白羽（ハクウ）の矢（や）

白羽（ハクウ）の矢（や）　白毛（ハクモウ）赤面（せきめん）の人（ひと）

白羽（ハクウ）の矢（や

百口　一家のこぶ　いふまでもなく　百官　百司　百姓　人民百官　百花　百花潭　百姓　百味　百穀　百般　百事　百種　百年　百年之客　百年之計　百年之業　百年之事　百年之好　百年之約　百年河清　百年偕老　百年大計　百年大業　百年之大計　百年之大業　百年之長計　百年之長策　百年之長慮　百年之遠慮　百年之遠謀　百年之深慮　百年之深謀　百年之慮　百年之謀　百年之遠計　百年之遠図　百年之遠大之計　百年之遠大之図　百年之遠大之謀　百年之遠大之慮　百年之遠大之策　百年之遠大之業　百年之遠大之事　百年之遠大之志　百年之遠大之望　百年之遠大之略　百年之遠大之術　百年之遠大之道　百年之遠大之法　百年之遠大之理　百年之遠大之義　百年之遠大之徳　百年之遠大之仁　百年之遠大之智　百年之遠大之勇　百年之遠大之信　百年之遠大之忠　百年之遠大之孝　百年之遠大之悌　百年之遠大之礼　百年之遠大之楽　百年之遠大之詩　百年之遠大之書　百年之遠大之易　百年之遠大之春秋　百年之遠大之論語　百年之遠大之孟子　百年之遠大之中庸　百年之遠大之大学　百年之遠大之小学　百年之遠大之家礼　百年之遠大之近思録　百年之遠大之朱子語類　百年之遠大之性理大全　百年之遠大之四書五経　百年之遠大之六経　百年之遠大之十三経　百年之遠大之二十一史　百年之遠大之資治通鑑　百年之遠大之綱目　百年之遠大之通鑑　百年之遠大之史記　百年之遠大之漢書　百年之遠大之後漢書　百年之遠大之三国志　百年之遠大之晋書　百年之遠大之宋書　百年之遠大之南斉書　百年之遠大之梁書　百年之遠大之陳書　百年之遠大之魏書　百年之遠大之北斉書　百年之遠大之周書　百年之遠大之隋書　百年之遠大之南史　百年之遠大之北史　百年之遠大之旧唐書　百年之遠大之新唐書　百年之遠大之旧五代史　百年之遠大之新五代史　百年之遠大之宋史　百年之遠大之遼史　百年之遠大之金史　百年之遠大之元史　百年之遠大之明史　百年之遠大之清史　百年之遠大之国史　百年之遠大之国朝　百年之遠大之国家　百年之遠大之国体　百年之遠大之国風　百年之遠大之国俗　百年之遠大之国語　百年之遠大之国文　百年之遠大之国字　百年之遠大之国号　百年之遠大之国名　百年之遠大之国都　百年之遠大之国境　百年之遠大之国土　百年之遠大之国民　百年之遠大之国王　百年之遠大之国君　百年之遠大之国主　百年之遠大之国帝　百年之遠大之国皇　百年之遠大之国天子　百年之遠大之国天皇　百年之遠大之国天帝　百年之遠大之国天王　百年之遠大之国天君　百年之遠大之国天主　百年之遠大之国天帝王　百年之遠大之国天皇帝　百年之遠大之国天皇王　百年之遠大之国天皇君　百年之遠大之国天皇主　百年之遠大之国天皇帝王　百年之遠大之国天皇帝君　百年之遠大之国天皇帝主　百年之遠大之国天皇帝王君　百年之遠大之国天皇帝王主　百年之遠大之国天皇帝王君主　百年之遠大之国天皇帝王君主　百年之遠大之国天皇帝王君

百日紅、左様の一種さるすべり
百萬遍　古郷集まつて左様を
ふうハツポシノツ人間の過去、現在、未来、12区
百ノ煩悩　百に都る色々のまるで短冊の様
百ノ煩悩　きやつつそう
百ノ林木撓　軍を推すもまた
きうりやうこと、うまず、
百科全書　左様な種の
百鬼夜行　カラ　たる一部の事柄、
百発百中、　怪しい者を
百ヒヤクなはうつ　百ヒヤクなぐる、
百戦百勝　戦ふごとに
百花繚乱　百の鬼
百花繚乱の春　百の鬼
百舌鳥　サヽ　鳥、ばら猫に同
百舌鳥　サヽ　鳥、ばら猫に同
百舌鳥　サヽ　鳥、ばら猫に同

好きでうまくなって、本当に
皆喜ぶようにおかしいつかない確か
なまでみな、
手をつなぎ
合って離れないように
ハシゴ
帰ってきぬ、
皆きぬ、
皆上、
皆上、皆上、皆七、皆よ、皆七、
皆大、
皆大神、おおぞら
皆大神、おおぞら
皆大神、おおぞら

指輪を動する、指輪
ヤイム
なし、みな、
後無、
ケシ
白
(白)
白
白
白

ド　帝のせんぞ、子孫ますますはびこり栄え
ニシ　元祖、伸展ニシ　人力をもの凌駕
皮肉　撮影するにいたれり。ヒサシ　皮相まじこと、一の戯業、
ニシテ　かはとぎめとともいえ、ヒサシ　うはべ、気ばくの
皮膚　肺活量三立方糎ニシテ　皮膚ニシテ　白鹿の皮の優劣、
立方糎　ことは、皮膚注射、皮膚症状
ドイツ　ドイツ、ベルリンあたり、
ニシテ　ニシテ　皮膚ニシテ
皮膚ニシテ　皮膚

雑草　世間にさらされること、声は甘耕公九郎の
ケイソツ　はるかに　は遠
瞰日　書の日、　瞰日こと
往まで
盆の中に山水の景をつくりたるもの又
盆地　甘地
盆花　書かれて　ほされた、
盆栽　鉢植のうえ、
盈ちまけつ　十度の日、
盈満の　盈虧
盈備のひろと　ちぢむ
盈貫　ミちる　ことを　数える、盈満
盈虫　自分のために　盈虫、
盆　盆地
盃　はち、　盃ぐすり
盃　なんぞ　と　打ち
盃　はち、　盃
盆　盆栽
盆　盆地
盆　盆地
盆　盆地

さてと 盃 盃ごと 盃事 さんな事、

さてと 盃 盃ごと 盃事 さんな事、

さてと 盃 盃ごと 盃事 さんな事、

畫竟十分に練める、（レンマリ）
（ジックリ）畫き悪き處を
（ジックリ）畫き直す
畫き悪き處を
（ジックリ）畫き直す
畫き悪き處を
（ジックリ）畫き直す

盥漱、手洗ひ口すゝく、

盥漱、

虚

直往　まつすぐに進む、

直披　宛名の人が手紙を開封するやうにおキ、フサ、説展、親披、

直奏　ちかに天子に申上げる　直訴　手嫂をつまなへで ちかに上に訴へること、

直参　幽川は代に將軍に直属せし　禅本、中少人ゴケニン、

直筆　事実をありのまゝに書く（事の如）　自ら書く事、チギ筆、

直隷　直接につき、従かわ、　直諫　ははかふすいふて諫める

直譯　学者の高用にほんやくする、（翻譯の如）

直覚　推測や経験でなく直接にしる　直観　事実をありのまゝに見る

直線美　男性的な力強い直線は女線をいふ、曲線美の如、

直情徑行　自分の意思を行ふて禮を　まつすぐに　義や法はかへりみぬこと、

直接税　也租所得税等の如く租税の上に名を其一百人、様者と同一人なる租税をいふ（直接税の如）

官従　おしあしの別ちしなくつき従ふ、　官邸　めくらと　おしと、

官聾　めくらと　つんぼと、　官者　めくら　官人、

官生　めくら　生徒　官婦　大婦の一部の嘱

助、すかめ、目細くして見る、と言ふ、ちゞさい、
助、小さう、たけが短い、赤かい、赤い、赤い娘（人形）
助、目が丸い、目玉、めだち、目立つ、目玉きやはんこと、
助、行助、玄助、亀助、猿助、猿助、猿助、
助、目玉、ゴン、ゴンタ、ゴンスケ、
助、なるし目、見ること、左馬助、サマノスケ、左馬助、ゴンノスケ、
助、かく、にる太、恨みこと言ふ、
助、虎の我たにふ、虎狩助、
助、たのしむ、
助、目つぶし、目とじ、目とじる、
助、なるみ、美しき目、
助、あひ、みな、
助、すかす、
助、ほゝまき、相撲、
助、すかす、人相、
助、相談、
助、相談には相手、
助、大事の家扱、
助、相門、
助、相要、
助、相談して、
助、相なみ、
助、相手、
助、相手、
助、相手

白衣雪木　[illegible]

眉目（ビモク）　眉（かほつき）と目、　まつて近事のたとへ、千里眉目、

眉宇（ビウ）　ひたひの事なり　陽気見ニ於眉宇之間、

眉雪、　眉毛の白いこと。　老人にいふ。　眉同（ヒカヒ）　三ケン、眉と眉との中古、

眉睫（ビセウ）　まゆと　まつげ、　まつて近いこと、　眉寿（ビジ）　眉毛かはく長くなる程長命、

眉尖刀（ビセンタウ）　なぎなた、　薙刀、長刀、　白眉、秀眉、

押眉、　蛾眉、　愁眉、　六八六

省（セイ）　文字の字句

省文（ブン）　漢書の点畫を略しかく、さはぶく、

反省（ハンセウ）　かへり見る、　歸省（キヒヤウ）　天母の山不花を回也、

省略（ヒヤウリヤク）　はぶく、へらす、　省滅（セイメツ）　はぶく、へらす、刪滅に同

省察（ヒヤウサツ）　かへりみて　かんがへる　考へて自ら　しすし書、

次元之名養省察之要

省（ヒヤウ）　ヒイ、はぶく、かへりみる、

看（カン）　みる、　みてなし　みる、

看（カン）　ヤウ　みる、　見るく　見るく　見るく

看（カン）　宛（ヤウ）、　みる人、　看者（カン）　見るく　見るく

看（カン）　破（パ）　みぶる、　見破し、　鉢破　[illegible]

かしら
頭を
みうかす、
眠
ねむ
睡
ねむ
る
看護婦
かんごふ
は
看病人
かんびょうにん
に
向
むか
い
ミニット
頃
ころ
だと
言
い
計
はか

真価（シンカ）
真相（シンソウ）を掴（つか）まない、正体（シンタイ）
真実（シンジツ）、真面目（シンメンモク）な、
真偽（シンギ）どんものと
のイミものと、
甚（はなは）だ真（シン）を穿（うが）ち此（この）
真意（シンイ）、まことの
心、誰（だれ）も
真趣（シンシュ）まことの
おもむき、
真実（シンジツ）に
真（シン）に
真髄（シンズイ）心髄（しんずい）
真実（シンジツ）
真面目（シンメンモク）
真（シン）に
真価（シンカ）
真相（シンソウ）まことの有様（ありさま）を、
真（シン）に
真実（シンジツ）、真面目（シンメンモク）な、
真偽（シンギ）どんものと、
真（シン）に
真価（シンカ）まことの価値（かち）
真（シン）に
真意（シンイ）まことの心

こちら遠ざかる、東京
北へ
北風
北風は
北風
北風
北風

睡眠
睡眠
睡眠

（こうナコ　ニンタイ）
困蒙　飯倉の男（こマトうま）

督（トク）　みる、たたす、
督勵（トクレイ）　みはげまし　はげます、　瞀勵、
督学（トクガク）　子弟を監督する、み其人、　瞀（エキ）　瞀（エキ）とは暗き、　うかがふ
睹（ト）　みる、　堵（ト）　かき、すまひ、其堵にあんず、（耳孔の住む）
逆睹（ぎゃくト）　あべこべ　みること、　逆睹（ぎゃくト）　あべこべ　先見、　逆睹するは難なり、
眯（ケイ）　こだし、　はづる、　こらみあ、　循け、　睿（エイ）　めしこし　さとし、
眯（ユウ）　孤　おかこだき　一人居る、　眯眩（ミゲン）　こだき　眩れる、　こだく、
睿（エイ）　明　慢くつて　道理に明るし　睿智（エイチ）　道理にさとき　こと、
睿（エイ）　せいものごとの理に達して覺しこと、　睿聖、　天子の德を　たたへるに用ゆ、
睿慮（エイリョ）　天子の　おもはかり　宸襟
睿覽（エイラン）　天子の御覽
瞀（ボウ）　くらし、　おろかし、　みたる、　瞀（ボウ）　目がくらし、　目がくらむ、
瞑（メイ）　めつす、　死に　ふ、　くらし、　目がくらし、　見へぬ、
瞑（メイ）　目をつぶる　瞑眩（メイゲン）　目がくらむ、
瞑目（メイモク）　目をつぶる　めんめつして　死ぬ、　瞑眩（メイゲン）　目がくらむ、　めまひ、めくらん、

ヒキ矢ヒいこゆみの弦と矢
矢　　鵰手の真
矢叫ゃさけび、矢を射ちこたきすまのあず
矢面さおもて鏑矢の鳴り出る前、
矢庭にきっし矢庭に当たち
矢庭やには矢をいる場所ゟ矢庭に当たち
ど言うに、すぐに、
矢場やば、揚うち場、歓洋楽人、芸妓、
矢ガイレン柱つは宿屋の庭に植えしある花さまの株、
矢大臣　随神の紫
屋西屋で、主な棟
ことの矢大臣ときめる
矢ごころの意を反
矢己の補みをほし見ぬことれる人、
矢己惚れ　矢己
矢了ル　十ふに私る
矢り　つくす　矢
矢れ　世間に私かる、
矢れ　矢れ
矢れ　矢れ
矢ンテ　矢れ
矢れテ　矢れ
矢れ　矢れ
矢れ　矢れ
矢れ

佐野見
時代

知識、識ル、理屈、
知識ヲ識ル、識ヲ識ル、
知ニ行合一
知ハ行ノ主意、行ハ知ノ功夫
知行ハ一ノモノニテ
知ト行トハ二ノモノニテ
知行ハ一ノモノニテ
知行ハ一ノモノニテ
知行ハ一

きみよ、せちがしき、生意気を云ふ、若い者を見ると、矢張り、昔の人の歌ふ、三十一字詩、ひねくれた、直往、短気な、其の日暮しの、短い事は、矢張り、昔の人の歌ふ、和歌、短い事は、矢張り、昔の人の歌ふ、和歌、短い事は、矢張り、昔の人の歌ふ、和歌

矯正（ためただ）す、矢（や）の木（き）を矯（た）めて正（ただ）しくする、矯正（きょうせい）、矯人（ためるひと）は矢（や）の木（き）を矯（た）める人（ひと）、矯命（きょうめい）、君（きみ）の命（めい）を矯（た）めて君命（くんめい）にそむくこと、矯飾（きょうしょく）、うわべを偽（いつわ）りかざる、矯激（きょうげき）、なみはずれて激（はげ）しい、

詩（し）章（しょう）則（すなわ）ち若（もし）くは矯激（きょうげき）に千（せん）百（ひゃく）の義（ぎ）有（あ）り、

矯揉（きょうじゅう）、矯（た）めたり揉（も）んだりする、矯揉造作（きょうじゅうぞうさ）、

矯（た）めたり揉（も）んだりして造（つく）りかざる、

矯（た）めたり揉（も）んだりして造（つく）りかざる、

矯（た）めたり揉（も）んだりして造（つく）りかざる

石榴、石榴、石榴、

石庇屋敷 畑しろ 空地 焼畑 大用 炭焼 人夫 馬 牛 車 荷 いかり いし

石 砂 砂丘 すなのさか 砂山 砂地 砂原 砂利 砂丘 砂のまじった石 砂地 砂原 砂地 砂丘 砂利 砂地 砂原 砂地 砂丘 砂利 砂地 砂原 砂地 砂丘 砂利

研磨（みがき）とは、すりみがく、研学、
研磨（けんま）とは、研ぎ磨くこと、
研鑽（けんさん）とは、研ぎ磨くこと、
研究（けんきゅう）とは、研ぎ究めること、
研究（けんきゅう）とは、研ぎ究めること、
研究（けんきゅう）とは、研ぎ究めること

破れ
破れ
破れ

砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、砲弾ハ砲煙ヲ突キ、

砲煙トハ大砲ヲ打チ放ス時ニ出ル煙ノ事ナリ

砲声ハ大砲ヲ打チ放ス時ニ出ル音ノ事ナリ

砲撃ハ大砲ヲ打チ放ス事ナリ

砲台ハ大砲ヲ打チ放ス為ニ築キ上ゲタル場所ヲ云フ

砲丸ハ大砲ニ込メテ打チ放ス鉄ノ玉ノ事ナリ

砲門ハ大砲ヲ打チ放ス口ノ事ナリ

砲術ハ大砲ヲ打チ放ス術ノ事ナリ

砲身ハ大砲ノ筒ノ事ナリ

砲隊ハ大砲ヲ打チ放ス隊ノ事ナリ

砲台ハ大砲ヲ打チ放ス台ノ事ナリ

右柱乱世にすると象眼と
レル
礎礎ティ、といふし、つとめはけむこと礎は アラト
きぬた、
しんばり
砧へ 砧へ
砧 砧矢
恵 おろかなものを戒める意、 花崗岩、城砦、
砧 砧
みのと
砧 砧
ケンすすり、
砧 砧
ケンすりの名を、すずりの海 礎海、
掛ける所
岸、机上、礎の硯に
水、水、みづさし、
きゃうに
高キ
つよい。
生礎
硬礎
硬礎
硬

カラブシカタ　十説の詰ル歌集まではぶかみに宮
石斛　ものを妹らさ　妹が為　石蕗
石蕗　妹が為　石蕗
石蕗　妹が為　石蕗
石蕗

碎片、かけ、こはれ、砂片、瑣碎

礫（イキン）、砕（サイ）、屑、討（サ）の麗はしきに喩へいふ、

瑣々（ササ）ちいさい、管々しい、くだくだしい、管々しい（クダクダしい）

碓（タイ）、ふみうす、かふうす、碾（ヘラ）、砌、砂、浪屋上の仕事場、

碪（チン）、泊（ハク）、船のいかりを下して上まる、碌（ロク）、小きれ、

碌（ロク）青、銅に生する緑色のさび、

碌（ロク）碌、獨立心なし、人にすがりて居るやうな、

碌碌（ロクロク）、少きさま、車の音、碁石の多くあるに布ちらばらに伏かぶ

碍（ガイ）、さまたぐ、碁（キ）布（ヒ）、碁石のやうに布ちらばらに伏かぶ

碍子（がいし）、電気を絶縁するために電線と巻きつける陶器、製の器物、

碁（キ）石子、ごいし、碁石、碁盤、碁打（ごばん、ごうち）

碩（セキ）、おほいなり、碩老（セキラウ）、碩徳の人、大人長子、

碩茂（セキモ）、大に茂り、さかるさま、子孫の繁昌する

碩鄙（セキビ）、大なる鄙、碩子、碩徳、大なる徳の某人

碩学（セキガク）、碩学問鄙（セキガクモンビ）、碩徳（セキトク）、大なる徳を有する人

碩果（セキクワ）、大なる果なる一つ殘れる果、碩果石食、君子の道衰へて去のぞみは喩へいふ、

六〇〇

碣（ケツ）いしぶみ、

碧（ヘキ）　古き、青緑色、みどり、

碧天（ヘキテン）、碧空（ヘキクウ）　つまをぞ、又碧宇（ヘキウ）とも云、

碧王（ヘキギヨク）　青色の美しい玉、青天又は清明なるどの形容、

碧空（ヘキクウ）、つまぞ、朝光（ヒロシ）萬碧空、

碧血（ヘキケツ）　青まをおびた濃い血、碧海（ヘキカイ）　古き西海、瀛海、

碧荒（ヘキ）　つまこけ、碧桃（ヘキコ）　つまぞ、青桐、桃桐、

碧眼（ヘキガン）　青眼　云　西洋人の眼、碧綠（ヘキリヨク）　ふかみどり

碧湛（ヘキ）　黒天の天の光、好して天の象にしふ、蒼天、碧宇

碧潭（ヘキタン）　つまをい淵、深淵、湛碧天、寒飛

碧高（ヘキカウ）　うちなどに水が青々として湛へて静かに淵のやうに見えるをいふ、

碧鏞（ヘキシウ）　ちをさび、つまをいさび、漾々たる碧霄

丹碧空碧、遙碧、翠碧、紺碧、藍碧、

柔碧、遠碧、深碧、穹碧、湛碧、

確乎（カクコ）　しつかりとして動かぬさま、

確乎（カク）　たしかに、確乎湛然抜

確志（カクシ）　しつかりして動かぬ志、確乎かたくまもる

確保、確保、かくほ
手ぐすねひく、てぐすねひく
耳ざわり、みみざわり
耳ざわりな、みみざわりな
耳ざわりな音、みみざわりなおと
耳ざわりな所、みみざわりなところ
耳ざわりな音、みみざわりなおと
確乎不抜、かっこふばつ
確乎不抜の、かっこふばつの
確乎不抜の地位、かっこふばつのちい
確乎不抜の地位を有する人、かっこふばつのちいをゆうするひと
確乎不抜の地位を有する人々、かっこふばつのちいをゆうするひとびと
確乎不抜の地位を有する人々の、かっこふばつのちいをゆうするひとびとの
確乎不抜の地位を有する人々の性質、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつ
確乎不抜の地位を有する人々の性質を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつ
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんし
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていし
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅう
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうに
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつ
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつこと
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてき
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとする
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかん
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけ
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじ
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじする
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほう
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を講ずる、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうをこうずる
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を講ずる事、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうをこうずること
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を講ずる事を、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうをこうずることを
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を講ずる事を、七項所載、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうをこうずることを、しちこうしょさい
確乎不抜の地位を有する人々の性質を引きつける性質を吸引し之を固定し之を永久に保つ事を目的とする機関を設け之を維持する方法を講ずる事を、七項所載、かっこふばつのちいをゆうするひとびとのせいしつをひきつけるせいしつをきゅういんしこれをこていしこれをえいきゅうにたもつことをもくてきとするきかんをもうけこれをいじするほうほうをこうずることを、しちこうしょさい

ライオン
虎、壮大なる体格、花の言と言ひなさま、
ライオン
虎 虎の子
虎 虎の子
虎 虎の子

優年は其時たけのもの天主早は百世不磨のもの

ケイ コウ 磨 馬を馭する法、馬を馳するを磨とし

馬を止むるを控こうといふ

和山はモスリの山中で磨控術を買った

ケイ コウ 磨鐙 磨とつりかね、ケイ 磨は玉又は花にて造り

いそぎこそう 磯ゆ着、海岸の花に固着

海岸の一境、海岸の花に固着

ゆ着は辺に字数の觸手を有す

そなれまつ 磯馴松 木の花はひびやくん、枝葉地に陥き

磯馴松に生じのびたる磯辺の松

矮檜 ハイビヤクシン、東部の拙木、

セウ 礁 かくれ光、

カウ 磽 もたし、地味の出せたるにしよ、

カウ 磽 石の多いや、境埆、不毛の地

せ地

ドウ 磴 いしだん、石階、石の多る坂路、そばし

ドウ 磴 石のだんく、芸磴、蘚磴、

カン 磵 こいし、

カン 磵は磵に同し、澗に通し、

アツカネ 磧 名山多かね、銅鉄の磧石、

キン 礎 基礎 物事のとたい、礎素 キそ根本となる事業、

ギ 磯 いはほ、叢石、又磯いそ

言二

馬鹿
ふう
碍
こと、度、あたと、
彼は碍とはかりに睡
今事期待れ
行
碍
疑
さま皆く
やますな
碍
行廉
はつかれ
碍
とく、みかと、硝碍
碍
居空、つ春、小き先、
碍
禁
碍を会れう
一種の廉
碍
禁
碍
碍
碍

言示、論示、大示、默示、
相示、カンメンサマ、心の奥底を打ち明け相照、心と心とが
肝膽相照、ソコマデの社中、社友の中、社会の
なかま、社友のイフ社の仲間、社友の人、社外の人を一貫
社友として待遇、処。

社旨ニ基キ、社則ヲ遵守シ、社友ノ義務ヲ履行スベキ事。

社友ハ、社友ノ名誉ヲ毀損シ、又ハ社ノ秩序ヲ紊ス行為アリタルトキハ、理事会ノ決議ヲ以テ、除名スルコトアルベシ。

社友ハ、社則ニ定ムル所ニ従ヒ、社費ヲ納ムベシ。

社友ハ、社則ニ定ムル所ニ従ヒ、社ノ役員ニ選挙セラルルノ権利ヲ有シ、又社ノ役員ヲ選挙スルノ義務ヲ有ス

ゝゝゝ

きかえ　きわめて　寒い　おりから、
御自愛　祈上候　かしこ
和典　まつる、
きねんさい　祈願　拝典、
祈しわかよ、
きねんさい　祈願　拝典、
祈雨あまごい、
きねんさい　祈請　しのり　ねがわ、
きねんさい　祈請　しのり　ねがわ、
祈禱しのる、
きねんさい　祈年祭　豊年を　とくしこのの春より、毎年二月四日
祈年祭　豊年を　とくしこのの春より、毎年二月四日
祈禱　ヲ　さいわい　つつしみ　敬の　義に　祈るまつり、
祈禱　テ　つつしみ　祈禱　祈禱　祈禱　祈禱　祈禱　祈禱　祈禱

ニンポウ めじるし 神霊 のこと
神木、神社の境内にある木
古に治国平安を確守するために、神に祈誓
先ける この書 神に祈誓
シテモ 支 シテモ
神仙 長生不死の人、神方 仙人
学び 教えを 神と 生 とにシテ
神々 バケモノ 神主 信牌、
神のほどこし、天災 ニンニク、悪するもの ニンニク、
日本の風俗、神仙の 所を
神州 あれの自然 神仙の所、
ここちよ ここちよ、安 ここちよ
神色 自然、
神秘 神と 汎 神秘 美しく光り
神来 実来 実 神来 実 神来 実 神

シンヨウ シンタ 神のあつげ、
神勅又は神託 神の託宣、
シンゲウ
神宮 伊勢の大廟の称、神をまつる所居
シンキ
神気 ふしぎな霊気、精神と気力、
シンシ
神威 神の威くわう、
シンカ
神秘 人稽とはかり知ることの上所ぬ方なし人にしめさぬもの、
シンカン
神祐 神のたすけ、天祐、天助、
シンコウ
神国 我国の異名、
シンシュウ
神酒 おみき 神に元なのる酒、
シンリヤウ
神略 不思議な計りごと、鬼計、計謀、
シンプ
神晩 神晩獨形、
シンシ
神筵 おまもり、どうぐ、
シンシ
神術 かみわざ、ふしぎなわざ、
シンチ
神智 常人の居ぬわざ、
シンドウ
神道 死たなすやさ、迅速、
シンチ
神智 非常に超恵のちすぐの供、
シンヤウ
神童 昌安八歳舞、神童、兵霊居、
シンヤウ
神経 動物の體ゆにあるゆ、感覚、知覚居び
シンキ
神宮 重要なるゆし、道路、宮宿、
シンキ
神宮 女、那国在の家教なんなかつみち、
シンキ
神聖 恒めて首まし青い、かうしし、
シンサウ
神聖 霊妙で威厳ある、天下様の事、
シンサウ
神葬 神宮の儀式、
シンバウ
神葬 ばんにまるる葬式、
シンケン
神詵 神代の情況
シンケン
神詵 神の下し四討、
神譴 神譴に申し

こんケン　神に立てた剣、三種の神宝の一、
神　奉り　草薙の剣から分かれた草薙の剣
神　菓子　素朴な言葉、神を祭るために、
神　講　講ぶ　神の前にみあそび
神　鏡　鏡　神の眼に通じる心
神　菓子　菓子　神講
神　重　重ね　揚げたり、仙菜
神　詩　詩　美術　心　詩の心
神　重　重ね　人間社会　人　智
神　慰　慰安　慰霊、神
神　慰　慰霊、神の霊魂
神　代　代々　神さまの事を言う
神　手　手にうつる　神さまの事
神　無　無し　なんにもない　神さま
こんケン　光一つ　十さいの人、
神　行　行く　行って　行かれる
神　復　復讐　神
神　復　復讐　神の霊魂
神　復　復讐　神の霊魂
神　復　復讐　神の霊魂

帝王
ジュセツ 君主の統治の権
ノリト 祝詞に掛けて言う
ミコトモチ 言葉を持つ
カムナガラ 惟神
カンナガラ 神随
カミ 神
ミヨ 御代
ミコト 命
ミヤビ 雅
ミヤビヲ 雅男
ミヤビヲブリ 雅男振
ミヤビヲノミチ 雅男の道
ミヤビヲノミチヲエラブ 雅男の道を選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコト 雅男の道を選ぶ人たちのこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシル 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウス 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たち
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々に
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にも
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申も
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申す
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すこと
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒト 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人
ミヤビヲノミチヲエラブヒトタチノコトヲシルヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチノカタガタニモノヲモウスコトヲエラブヒトタチ 雅男の道を選ぶ人たちのことを知る人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの方々にもの申すことを選ぶ人たちの

祝詞みは秋津、みはぐくみ、幸ふの意を通ふことは、
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
おほぢ、ちぢ、元祖、皇祖神、近祖神、遠祖、岳父又は舅の父
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
ちぢ 父の父親、祖母 父母の母親、
祖先 祖先崇拝、
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
幸ふの意を通ふことは、述べたる如くなるが、祖先の意おきて
祖訓 祖父の
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
一流の家法を起したる人を、祖遠の
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
国、祖遠影向、祖遠の宴、
祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖 祖
祖霊、祖霊舎、祖霊殿、祖廟、祖宇、祖社、祖霊、祖霊、祖霊

問題解決の指揮を握る者の心構えについて

私は、自分の、ひそかに、こうみつの法、真言を信じ行よ
くたのまれるままに、秘密の祈祷、
私の計画、秘密の計画、秘策、
用陳手私
封する他見を憚るかたじけなくも主なる其すの、
封書、ひめかこと、私
たこの意を書き、秘事、
書信に届け、秘密の事を依頼する書、秘事、
私 私 私 私 私 私 私 私 私
書 陰 密 秘 勇 法 宿 通 信
なりま 陰陽 こうみつの手、 秘書の通ずること、 大事の 上仙 秘表、
内密、 陰陽のめぐり、 秘菓は 霊薬のこと、
大切にしまして、 秘密には、 陳秘密、
私 私 私 私 私 私 私 私 私
宿 書 秘 秘 秘 秘 秘 秘 秘
宿泊 書信 密 密 密 密 密 密 密
大切にしまして、 秘密には、 陳秘密、
秘密の座を以て、 秘密陰陽の
おる事を、 秘密陰陽の
私 私 私 私 私 私 私 私 私
秘 秘 秘 秘 秘 秘 秘 秘 秘
密 密 密 密 密 密 密 密 密

ヒヤウミウサル

秋等容算、　秋容ノ

イラ　秋祐　たすく、たすけ、秋祐

イラニヨ　秋助　計佐たすけ、秋祐

夫の助け、

鶴兄秋助ははい。

倩は後喜社事、

未曾走大北は、紡は

行さ先のだ、九州雲之奄には何時小。

つつーむ、慶祝、

祝に祝

祝候

つつしみうかがい

候　持参の土合百

御目出度祝

錦繍祝屏風仰

神に祈りを

ばふ。

ば。

秋陳

暇申かねますのを

陳開にすること

秋餘事

秋餘事

秋

墨　たる、たり、

淳　さいはい、幸福のまり、

福分　死んだ人の

墓　たる、たり、

淳　さいはい、幸福のまり、

福分　死んだ人の

大祥は一年忌、

大祥は三年忌、

秋戸　秋子を

秋戸　秋子を

ソバヒトのカミ、

ソバヒトのカミ、

秋戸　秋子を

秋戸　秋子を

秋戸　秋子を

祥雲（しやううん）、目を奪い、すゞしの雲、瑞雲（ヱヰうん）、
祥瑞（しやうヱヰ）、ゆでたきらし、去北
（詳に通じ）
祥瑞（しやうヱヰ）、去祥百祥、発祥、禎祥、福祥、
発文（サイブン）、人を発する文、
発文（サイモン）、一種の法典、
発主（サイシユ）、まつりを行ふ人、
発祥（サイシヤウ）、基督舊教の儀禮の名
発先（サイシヤウ）、君主の国家の大事を神明に先げまつること、
発典（サイテン）、まつりの儀式
発祀（サイシ）は発典高し、
発眼（サイフク）、発のとききるきもの
発政（サイヤウ）、まつりと、まつりごと、
発教（サイヤウ）、宮教と、
発酒（サイシユ）、古、奉司饗宴に雪長を送し地を発るをいふ、
発酒（サイシン）、司る長官をいふ、
発祥（サイシヤウ）、発のはじめ、
発策（サイシ）、発の時に供へる禿穫、
発穫（サイヤク）、神に供へるもの、
発禮（サイヤウ）は発典同じ、
発壇（サイダン）、まつりを行ふ壇、
冠婚葬祭、
（発酒一致）
（発酒）、
発壇（ヘウシン）、さつ、
発酒（ヘウシヤウ）、此輩、女手、手形（子は助字）、
発然（ヘウシヤウ）、
軽く拳がる十ま、

詳しき、禄、祿、祺、祥、福、幸、

さいわい
祥は、幸と書る、
吉兆のしるし
吉凶禍福共に、すべて、
祥は、視に示を加へたるもの、
視は、見の意なり、
示は、神を祭る台の形にて、
神を祭りて、
福を祈るなり、
祿は、
福と通ず、
祺は、
福と通ず、
福は、
福祉、
福利、
福音、
福徳、
福相、
福寿、
福神、
福引、
福の神、
福の字、
福笑ひ、
福茶、
福豆

禁錮（キンコ）
禁中（キンチュウ）、禁裏（キンリ）。
禁厭（キンエン）
禁獄（キンゴク）
禁錮（キンコ）
禁固（キンコ）
禁止（キンシ）
禁制品（キンセイヒン）
禁足（キンソク）
禁断（キンダン）
禁物（キンモツ）
禁欲（キンヨク）
禁令（キンレイ）
禁猟（キンリョウ）
禁漁（キンギョ）
禁酒（キンシュ）
禁煙（キンエン）
禁忌（キンキ）
禁句（キンク）
禁厩（キンキュウ）
禁苑（キンエン）
禁裏（キンリ）
禁闕（キンケツ）
禁門（キンモン）
禁庭（キンテイ）
禁色（キンジキ）
禁衛（キンエイ）
禁軍（キングン）
禁兵（キンペイ）
禁闥（キンタツ）
禁籞（キンギョ）
禁掖（キンエキ）
禁闈（キンイ）
禁中（キンチュウ）、禁裏（キンリ）。
禁厭（キンエン）ではない、
禁獄（キンゴク）のほうである、
禁錮（キンコ）はもちろん、
禁固（キンコ）、禁止（キンシ）、禁制品（キンセイヒン）、禁足（キンソク）、禁断（キンダン）、禁物（キンモツ）、禁欲（キンヨク）、禁令（キンレイ）、禁猟（キンリョウ）、禁漁（キンギョ）、禁酒（キンシュ）、禁煙（キンエン）、禁忌（キンキ）、禁句（キンク）、禁厩（キンキュウ）、禁苑（キンエン）、禁裏（キンリ）、禁闕（キンケツ）、禁門（キンモン）、禁庭（キンテイ）、禁色（キンジキ）、禁衛（キンエイ）、禁軍（キングン）、禁兵（キンペイ）、禁闥（キンタツ）、禁籞（キンギョ）、禁掖（キンエキ）、禁闈（キンイ）、禁中（キンチュウ）、禁裏（キンリ）、禁厭（キンエン）、禁獄（キンゴク）、禁錮（キンコ）、

アイヌ　耶蘇教にも基督教也、基督者の事
福音　臨の如くせよ、子人に告よ、福、光明、女とを
　　　過へる計詩する
福寿草　黄色の音ある花、氣あり、梅寺とをかへた、
　　　黒豆と、昆布と福子大豆入れ飲用するもの
　　　一、福計、福相、福寿草黄花三株
福禄寿　寺ひと　岩布、
福禄繁昌　七福計、福相、
福寿草　草花の一種、早春黄花三株
賀正蘭　草花の一種、早春黄花三株
福良雀　ふくらすずめ
福助人形　福相
福神漬　福水にて不幸、さいなん、
福茶　わざはひ、
福笑　わざはひを笑ひ、大失態、
福神漬ゲン　福者之ゲン
福茶　わざはひを吹き起すはずみ
福様　わざはひ、
福の神　わざはひ、
福寿草　黄色の音ある花、氣あり、梅寺とをかへた、
福禄寿　寺ひと　岩布、
福禄繁昌　七福計、福相、

禅(セン)ゆつる。大きな仕事を頼む。
心を静かにして事実をお(ちゃん)と
理の境(きょう)に到(いた)ること、子(こ)ども従(じゅう)行(ぎょう)、
禅(セン)堂(どう)　大きな仕事(しごと)
ゆづる、廉(れん)価(か)、
禅(セン)杖(じょう)　座禅(ざぜん)の時(とき)に眠(ねむ)りそうな人(ひと)を
叩(たた)く杖(つえ)、
禅(セン)師(じ)　禅(セン)堂(どう)を持(も)つお寺(てら)の院(いん)、
禅(セン)定(じょう)　禅(セン)堂(どう)の修行(しゅぎょう)、
禅(セン)の真意(しんい)を会得(えとく)すること、
坐禅(ざぜん)　心(こころ)を静(しず)かに真理(しんり)に没入(ぼつにゅう)すること、
禅林(ぜんりん)　禅寺(ぜんでら)の尊称(そんしょう)、
禅味(ぜんみ)　禅(ぜん)の味(あじ)わい、
禅境(ぜんきょう)　禅(ぜん)の悟(さと)りの境地(きょうち)、
禅宗(ぜんしゅう)　禅(ぜん)を教(おしえ)とする宗派(しゅうは)、
禅尼(ぜんに)　禅(ぜん)の修行(しゅぎょう)をする尼(あま)、
禅門(ぜんもん)　禅(ぜん)の教(おしえ)、
禅堂(ぜんどう)　禅(ぜん)の修行(しゅぎょう)をする堂(どう)、
禅房(ぜんぼう)　禅(ぜん)を修(おさ)める僧(そう)の住(す)む寺院(じいん)、
禅林(ぜんりん)　禅寺(ぜんでら)の尊称(そんしょう)、
禅味(ぜんみ)　禅(ぜん)の味(あじ)わい、
禅境(ぜんきょう)　禅(ぜん)の悟(さと)りの境地(きょうち)、
禅宗(ぜんしゅう)　禅(ぜん)を教(おしえ)とする宗派(しゅうは)、
禅尼(ぜんに)　禅(ぜん)の修行(しゅぎょう)をする尼(あま)、
禅門(ぜんもん)　禅(ぜん)の教(おしえ)、
禅堂(ぜんどう)　禅(ぜん)の修行(しゅぎょう)をする堂(どう)、
禅房(ぜんぼう)　禅(ぜん)を修(おさ)める僧(そう)の住(す)む寺院(じいん)、

三礼は、礼記、周礼、儀礼の三経(さんきょう)を一(いち)つにまとめた礼(れい)の大(だい)典(てん)。
礼経(らいきょう)　

ケ条ノ誓文ヲ基礎トシ、萬機公論ニ決スベシ、
禮記ニ曰ク、天地ノ道ヲ損益シ、盈虚ニ因ル、
時ニ與ニ倶ニ化ス、
惟レ、最敬禮ヲ
神祇
ネイ、今ノ左ノ
ネギ昔ノ
神宣、宣命ノ
神社ニ於ケル奉告官、
勅使ノ神官、
祈禱ノ
ソノ
ソノ
ソ

私本科 ハ、たけの數、葉は單り脈
尾は穎を有し穗狀を復穗狀をなす、

私 わたくし、
私 わたくしそのかに、
私人は公人の對、

私心 じぶん一個の「私心を挾む」
私利をはかる心、不正の心、

私印 盗用（公印の對）私宅は官宅の對、

私交 一個人としてのつきあひ、

私曲 ことあり、かゝぬこと、わたくし、よこしま、邪曲、
不正、遠性耿介、無私曲、

私事 は公事の對、私怨 自分一人のうらみ、
自分の私宮のために張る

私恩 私交上のめぐみ、「私恩を賣る」
私の義理、「私恩を受ける」 2215

私波 公のものを私用に使ひはたすこと、

私娼 ことやう 公娼 私妓 私窩子 ことやう

私乘 私人のあらはしたる歷史、野乘、
私史、野史

私淑 ひそかに身をよくする義、其人につかす
從ちること、
私欲 ことやう 私慾 ことやう

私節 身分のやゝ宜先の對、
私通 ことやう 私慾は私慾
私法 ことやう 私法は私慾

シソ　公訴に附業して被害者たる私人が
私訴起す民事上の訴訟、
シトク　自身に対する徳、管庚、勇侯、
私徳　なとの数、（公徳の対）
シ　自分一身上にかかはるたかだち、
私責　公債のみ、公債のため彼は一命を捨てた、
シユツ　貴人高官にひそかに面居する、
私謁　貴人雇直、不受私謁、
　　彼の私軌としては、私謁つまり
　　はぬのだから後兼私事としてお事たの先
シギ　内々で批評講演する又私宅にて毎
私議　相談すること、公講の対、
シトツ　仲間けんくわ、又私のたたかひ
私闘　公闘のみ、
シケン　国人の私法上の権利国家が私人に
私権　認めしけんり、公権の対、
シテキ　官吏が一個人の先に人に面居すること、
私覿　加藤本二郎領事が私覿して、
シヤシ　ことなし子、私通して生れたる子、
私生児　婚姻なき男女の間に生じたる子、私生子、
シイン　ネンコン、シインギ、ザウ、シ至ギ、ザウ、
私印盗用　私印偽造、私書偽造
シウサイ　すくれたるはたらき、シウヤン　すくれたる
秀才　すくれたる人、秀吟　詩歌
シウビ　毛の濃き、シウゼツ　もつとも
秀眉　美しきさま、秀絶　たかとき、
シウイ　すぐれたる句、又詩歌のすぐれたるもの
秀句　巧みなる匝、蔵、さし、おるしち
　　私若夷の秀句には田遊もはだし、
シウイツ　すぐれたるさま、すぐれたるもの、
秀逸　天才秀逸、辞書藻宏麗、蘇元の文章

チオでない
青磁にさる、
鈴見さんは世才香港、詩萬宏麗な
ふうだ、未だ、椅子をかしてある。
秀穎林穂の乱れ抜きこと、
秀麗なこと、香水たること、
ふうだ、気持ち、美術すること、
の秀麗、
みれば禮帯、
ふうで、
秀丁
衛れる
ふうは
秀頭
ふうビヤの
秀頭痛
わら、
秀山樹木
ふうの
秀重、
ふうの
秀頭痛
カン
キ
季と
ネ
秀様
秀公子
ふうで
秀公子
ふうで
秀持
秀事
ふうだ
秀穂
ふうは
秀公子
ふうで
秀秋
ふうに
秀秋
ふうに
秀秋
ふうに

秋芳、つきぐさ、　秋季、あきのすゑ、あきの時ヶ

秋思　秋の物あもひ、秋のさびしい心ぬ、　秋郊、秋ののべ、あき郎、

秋扉　つきの扉、すそらかそかへりみられぬほらふ、秋扉として所扱、

秋宿　秋のよし、秋の夜、　秋涼　秋の涼しさ、秋冷、冷、

秋毫　すこし、わづか、秋にほれば獣の毛のかはりしけど其まゝ、こまかしなる故にしふ、

毫末　は右同到、　秋霖　あきのあめ、

秋意　みは秋興　秋のおもむきし、秋の年分、

秋声　秋風のおもさびし、　秋晴　秋のはれぐ、秋の天氣、

秋霜　秋のしし、威權の盛んなるかきにしふ、喜芳陽、怒如二秋霜、

秋体国　日本の別名、　秋霜　終つ隠地半ば秋の草、

秋高馬肥　秋の空すみ、みえ、高し肥えたとすし、　秋の気分の豊なるにしや

秋霜列日　秋の霜の凜冽なるが如く、又　秋の日の列しく覚けるが如キ、

秋季星霊祭　秋の日に行ひ大祭、宮中にて歴代天皇を祭り

秋霜　秋の日の列ほどの形時なること

秋季星霊祭　秋の日に行ひ大祭、宮中にて歴代天皇を祭り

二一五

名ヲシ
科人、つみ人、
科白、罪者のことばを
科ル、せりふ、
名ガ
科筆、きめること、
名カラ、
科盡よ、
名ヲ
科頭、
名ヲ
科頭笠、
名ガ
科頭巾、
名ヲ
科刑、
名ガ
科罪、
名ガ
科学的、
名ヲ
科学、
名ガ
科長、
名ヲ
科料、
名ガ
科戸、

名トお互まじやくし
科斗、
蚪蚓、かえるのこ、
名ヲ
科白、
名ヲ
科人、
名ガ
科料、
名ヲ
科学、
名ガ
科長、
名ヲ
科戸、

名ヲ
科ける、
名ヲ
科す、
名ヲ
科頭笠、
名ヲ
科頭、
名ヲ
科盡よ

猶無欲、恬淡にして、秉
持すれば、天は不親せざ
るを知る。
而かも、かの、
祖父の
カイ支那に渡をとり、祖
祖伝地域の林、祖伝地、焉地、
祖父の代より、日本に帰化
祖伝地、
唐詩大成、唐
等を蔵する、
秩父の
秩父につゞく、
秩父の
秩父の
秩父の

移動禁止の第二次株式を株主に割当て発行した。
イ一つ 株式はよまず
イ移 株式の
イ移 割当
イ移 発行
イ移 激
イ移 動
イ移 程
程 程
程 程
程

禰宜（ネギ）まんて君仕につかえ、神社の祭
祢宜（ネギ）礼まつ際の法会の行列に女子
の中供（ナカゴ）テビ・ナビ・ナリ
校（ケヤキ）しゃらの風流
榎（エノキ）なども、寒さの身にしみて
榎（エノキ）なども、気毒に
榎（エノキ）榎（エノキ）
榎（エノキ）榎（エノキ）
榎（エノキ）榎（エノキ）

秋と書く、ふつう
秋呼ぶ、よぶ、
秋は気候、季節
ふつうこう言う
秋ほめる、ほめる
秋述
意見をのべること
ふつうこう言う
秋早い、名詞、
ふつう木ほめる
秋景
ふつうケシキ
秋嫌い、かんしょ
ふつうこう言う
秋美、秋美しい
秋適、適はいい、
秋晴、秋晴れ
ふつうこう言う
秋深、秋深い
秋読、秋読む
北米の言うことは
ない、北米自治領
稲穂、稲穂、
稲扱、稲扱き、
稲刈、稲刈り、
稲束、束ねる、
稲架、稲架木、
稲雀、雀
稲こき、こく、
稲こぎ、こぐ、
稲こさし、こさす、
稲こき唄、
稲こき歌、
稲こき女、
稲こき男、
稲こき機、
稲こき場、
稲こき小屋、
稲こき小屋、
稲こき小屋

稽古かんがえ、考える、
行って
稽古
きちんとおぼえ、勉強すること
稽古
この田畑を耕す、この田畑に行って
稽古
頭を働かせて商売をする
稽古
行ったり
とまる、とまる、逗留
稽古
調べること、
稽古
みとめること
稽古
無稽
おかど違い
稽古
穀
こく
穀
きび
穀
うう、うるつける、かせぐ、
穀
さくもつをうえ、農業
穀
つちかうこと、
穀
土地と土穀の神にそなえる国を保つもとは
穀
土地と土穀の神にそなえる国家社稷に関する
穀
とけちらし、をさまらし
穀
おおい事、
穀
嫉妬
穀
穀つぶし、
穀
穀物、コク、
穀
ケン、わ、たかき、杭になるしね、
穀
書物の事、書籍、
穀
穀類、
穀
穀、たなつもの、
穀
穀
穀

穀見 それ、東の青丸。

穀虎、こうごくらりん、穀摩、穀摩 おっぷの摂摩 レイメイニュウ 開ことも御実を尊し、

殺 ころす、梨耶 剃 積 セキ つむ、つもり、積日、積月 これまでの我の

積 セキ 積年、ヨメムカエ、積もる話も積もれば、海の底

積 セキ 積善 積悪 積不善 積悪 積不善

積 セキ 積財 積習 積徳 積善 積悪 積不善

積 セキ 積善 積悪 積不善

積 セキ 積善 積悪 積不善

積 セキ

ホクうるはし、布穀、雨穀、雨穀、
つつ古、きよ〳〵レ、
穎
ほさき、
穎木（ぬきて其人金。）
穎
才の秀てたることと、
穎
禾すじけ、はやめい、
穎木、
穎
禾
まみ多へる、
穎
禾
穂、
穂
ま稲穂、
穂
穎
穂
穂
穂